1967

越波（おっぱ）、夏の夢物語

菊地憲二

来た時は、
思いもよらなかったよなあ・・

ずた袋を担ぎ直し、
もう一度振り返る
橋も、歩いて来た道も
消えてしまっている
対岸の高屋山の不気味な森が
越波への入り口を
閉ざしてしまった・・

全ては、夢
まぼろしだったのだろうか・・

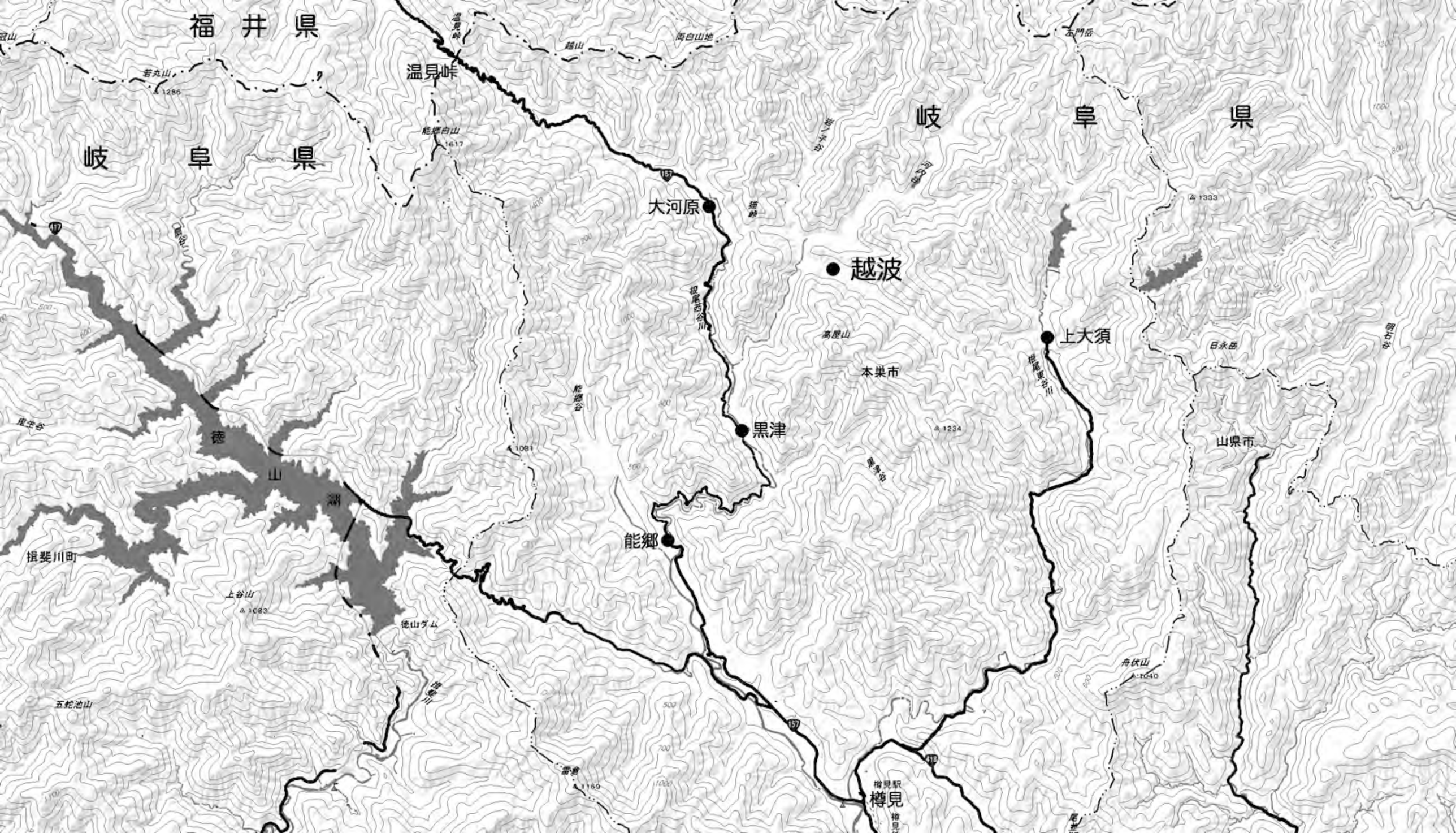
「e-konの道をゆく」にて2016年８月より公開

前書き

この回想録は、筆者が高校３年（１９６７年）の夏休みに、岐阜と福井の県境にある「越波（おっぱ）」という人里離れた限界集落（現在は７０代の松葉さんご兄弟の２人しか住んでおられません）を訪れた時の体験談です。

ネット上で、山の集落や消えゆく村の調査研究をライフワークにしておられる、滋賀県在住の近藤英治さんのサイトに投稿したのがきっかけで交流が始まり、少しでも参考になるならばと一念発起、書いている本人が飽きないように事実を基に物語にしたものです。

《お断り》半世紀近く前の事ですから時系列は曖昧ですし、登場人物の名前等は一部実名ではありませんのでご了承ください。又、特定の地域、団体、人物を侮辱、標榜することを目的としておりません。


福井県
岐阜県
岐阜県
温見峠
若丸山
1286
越山
両白山地
能郷白山
1617
大河原
猫峠
越波
根尾西谷川
高屋山
本巣市
上大須
根尾東谷川
黒津
1234
能郷谷
1081
黒津谷
山県市
能郷
徳山湖
揖斐川町
上谷山
1083
徳山ダム
揖斐川
五蛇池山
雷倉
1169
樽見駅
樽見
舟伏山
1040
日永岳
明石谷
1333
左門岳

序章

必死になってボールを追い回した2年間、秋の県大会新人戦で優勝して3年生での活躍を期待されたが、気の緩みと部内のゴタゴタも有って春の大会であえなく敗退し、サッカーへの情熱が消えてしまう。それからは、インターハイ県予選に向けて汗を流している仲間には申し訳なかったが、グランドに足を入れることは無かった。

時間があるのだから受験に備えればいいものを、ビリヤード、パチンコにあけくれ、喫茶店に入り浸り、ぐうたらな生活を送る。目標がないというのは何と退屈なことだろう。入学してからサッカー漬けの毎日を送っていたのだから無理もない。

それでは高校生活の最後の夏休みは何か面白いことを体験しよう、とあれやこれや思いを巡らせ始める。 とりあえず受験勉強でもするかということで、図書館通いも考えたのだが、自宅にいては普段と何も変わらない。そこで、どこか寝食の心配の無い、人里離れた場所はないか、と考えた時に「山寺」が頭に浮かんだのだった。

小学生の頃、ＮＨＫの「みんなの歌」で聴いた「山寺の和尚さん」「カラスのカンザブロウ」「しょじょ寺の狸？」などの童謡が大好きで、童話や民話に出てくる山里の暮らしと動物とのふれあいに憬れていて、夢を実現すべく「山寺」に行ってみようと思ったわけなのだ。

中学一年の時に横浜から岐阜市に引っ越してきて、歴史のある地域の面白さを充分に肌で感じてはいたが、山深い辺境の地には「鳥獣戯画」の世界が存在するのに違いない・・と。

仲の良かったバレー部の山本に話すと呆れていたが、とりあえず図書室で探すことにした。そして地図上の福井県と岐阜県との県境に『卍』を見つける。梅雨時のうっとうしい昼休みだったが、高揚した気持ちで職員室脇のピンク電話から最寄の役場に電話を入れ、寺の名前と住所を教えてもらった。（役場の女性が不思議そうな応対だった。あんな所へ何しに？）

すぐに「受験勉強を兼ねて精神を鍛えたいので是非修行に行きたい」との手紙を書き投函。根尾村出身のクラスメート小野島がいたので訊いてみると、「行ったことも無いし、話題にしたことも無い」とのこと。ますますイメ-ジが膨らんで来る。「秘境」に間違い無い・・・と。

そして待ちに待った返事が届く。「話を訊きたいので会いたい・・」と。住所を見ると、岐阜市内で「願養寺岐阜出張所・・」？とにかく指定された日時に、二人揃って制服でかしこまって行くことに。

着いた先はごく普通の家だが、玄関にちゃんと看板が掛かっている。奥さんだろうか、緑茶と菓子を運んで来たが。訝しげな表情を隠しもせず奥へ引っ込む。

和尚の話によると、越波は平家の落人集落で歴史は古いのだが、今では殆んどの檀家が山を下りてしまい、お盆以外、市内で仏事を行っているとのこと。またその寺「願養寺」は、近隣の３集落の神仏一体の菩提寺で、由緒があるという。写真を見せながら「天武天皇の勅願寺であり・・淡墨桜の由来は・・」等と、ことさらに権威を強調する。どうせ仏事の残り物か供物の余り物なのだろう、たいして美味くもない茶をすすり、菓子を食いながら、神妙な顔をして聴き入ることに。

和尚は気位が高いのか気難しいのか得体の知れない人物という感じを受けた。

「この小僧らは何故に修行したいなどと言い出したのか？」と探るような表情だったが、それでも承諾してくれ、期間はお盆の前まで、費用は１日３００円、「器物を大切にし、決して村人の反感を買ってはいかん」など一通りの注意と説明を受ける。そしてその後で、和尚の口から夢のような言葉が発せられた。

「自分はいないが君らの食事は、一人で寺を守っている下女の「キヨ」がいるので心配ない」と。

和尚も小坊主もいなけりゃ・・・暴れたい放題ではないか！

帰り道は足取りも軽く、アルバイトの計画や日程の調整に胸を膨らませながら、頭の中はすでに「越波」へ・・・・。
が、一週間後に速達が届いた。「今回の計画は断念されたし、下女が病気ゆえ君らの世話が出来ない・・・・。」ショックであった。すでに7月に入り、バスの時刻まで調べ準備を整えていたのだ。しかたないので別の地域を探すがなかなか見つからない。

ところが又　一週間後に速達が届く。「下女の病気が回復したので計画通り来られたし」と。
ご丁寧にバスの時刻まで書いてある。嬉しかったのだが、何か目に見えない糸に手繰り寄せられているような感じを受けた。子供の頃から何度か「霊的」な事象を経験していて、自分の直感をある程度信じているが、それらの時と同じような何かを感じたのである。

原始の里

なにはともあれ8月1日早朝、始発のバスに乗り、根尾谷へ向かったのである。

新岐阜駅から直通バスに乗り、終点の能郷まで3時間近くかかったのではないだろうか。
車中、山本と会話が弾み、あれやこれや思いをめぐらせ役割も提案。山本は１８０センチ近い大男なので、イノシシ・熊などの動きのトロイ大型動物を、こちらは１６５センチ、サッカ-のＦＷで俊敏さはあったので、猿・狐・狸・蛇・百足など小動物は「俺にまかせろ！」と。「俺の方が危険じゃねえか！」山本が苦笑いだ。妖怪・物の怪の類は、タッグを組んで

対決、絶対に一人で逃げ出さない・・・劇画みたいなことを考えてバスに揺られていたのである。

本巣郡に入り、のどかな田園風景に別れを告げ、根尾川沿いに谷汲へ。キャンプに行く子供たちが降りてしまうと、他は５０代と思しき一組の男女のみ。その二人も樽見で降りたのだが、最後部席の我々を不思議そうに見ている。

そして遂に終点の能郷に到着。バスの営業所を兼ねていると思われる商店で菓子やインスタントコーヒーを購入。バスの向きを入れ替え終わった運転手と車掌を交え商店のオバサンと５人で、かき氷を食いながら談笑となる。

よほど変わり者の少年に見えたのだろう。３人とも「越波なんぞには行ったことが無い」と言う。「生きて帰れんのか？」と脅かされたり勇気付けられたり。

３０分程して、出発するバスを見送ろうと立ち上がった時に、砂塵を巻き上げて坂道を登って行く黒塗りのセドリックのテールランプが暖簾の隙間から見えた。オバサンの話では、徳山ダム計画が進んでからは、山を越えたこちらの川筋にも役所や新聞社の車がたまに来るようになった、とのこと。

オバサンの不気味な笑顔に見送られ、１２キロ先の越波に向かって未舗装の砂利道を歩きだした。スポーツの特徴は服装にも現れるもので、温厚で勉強も出来た山本はスポーツシューズ、こちらは素足にゴムゾウリ、いでたちからして性格が判るというもの。１時間も経つと肩に痛みが。マドラス風ズタ袋の中の

本が当たっている。山本も荷物を気にしているようで、一休みして梱包し直すことに。「古文解釈」の硬い表紙はひっちゃぶいて川の中にぶん投げた。古文の教師が赤点をくれた嫌いな女だったので・・・。

谷が深くなってきた。山側からせり出す大木の枝ぶりが見事なほどに逞しい。視界が開けて崖っぷちに祠が現われた。地蔵尊に手を合わせる。谷を覗いて見たが、この断崖では落ちたら助かるまい。今まで何人が命を落としたのだろうか・・。絶叫が聞こえてきそうだ。

峠を越えたので足取りも軽い。川原に下りられそうな処では体を冷やしたり、淵が在れば飛び込んだりしながら、トボトボとひたすら歩き続け、やがて国道から右にそれる道を進むと、黒津の集落が現れた。能郷と越波の中間に在り、家は数軒しかないようだ。しかも何軒かは戸板が打ち付けられていて人が住んでいる気配が無い。次元の違う世界へ足を踏み入れているのは間違いない。

天気はピーカン、正午を過ぎて残りは6キロ、オバサンがタダでくれた売れ残りの「饅頭・羊羹」で空腹を満たし、再び歩き出した。不思議な雰囲気を感じながら・・・。

その昔、一族郎党を引き連れて歴史の表舞台から姿を消した先祖から何代続いているのだろう。おそらく、この川沿いに岩を越え藪をかき分けて越波に辿り着いたのだろうが、迫害から逃れるために別天地を求めたのか、或いは先住民と交流があって導かれたのか・・・。逞しい先人達だ。

その越波も、今では３０軒のうち２０軒は山を下りてしまっていて、お盆にしか戻ってこないというのが現実。

そして、名古屋の孤児施設から連れて来て、家族の一員として迎え入れたという「キヨ」と呼ばれる４０過ぎのおばさんのこと、病気のことも気がかりであった。

ずっと気になっていたのが、能郷のオバサンは、魔界への入り口の門番ではないか、ということだ。山本に話すと笑ってばかにしていたが、何か？は感じていたようだ。

「得体の知れない男が二人そちらへ向かったので、注意せよ」と信号を送ったのだろう。

どうやって長い道中を見張ったのか？木陰から手裏剣や吹き矢は飛んで来なかったが、バカでかい牛虻がまとわりついていた。何匹か追い払ってから気が付いたが、蝉の声が通信手段なのだろう。それを確信したのは、橋を渡りしばらくして右手に粗末な小屋が見えた時、アブラ蝉の品の無い鳴き声がやんで上品なヒグラシが迎えてくれたのだった。

願養寺

ついに百鬼夜行、魑魅魍魎が跋扈する闇の魔界へ吸い寄せられたのである。目の前が開けた時、道の左側の畑の脇に黒塗り

のセドリックが・・・。場違いな光景だった。

向かい側のゆるやかな参道を上り、山門をくぐって鐘突き堂を左に見て庫裡の玄関へ。戸は開け放たれていて、衝立には水墨画のトラが描かれていた。奥から現れたキヨさんを見て驚いた・・・どう見ても５０過ぎの初老のおばさんだった。そして、いるはずのない和尚が顔を出したのだ。

「途中で出会うと思ったがどこにいたのだ？」「何時のバスに乗ったのか？」なんと和尚は親切にも我々を拾うつもりでバスの時間まで手紙に書いていたのだ。やはり御仏に仕える人間は慈悲深いのだろう。（まさか馬鹿笑いしながらカキ氷食って駄弁っていたとは口が裂けても言えない）

用意してあった昼食を食べ終え、和尚に玄関から外へ案内される。「壁の角の青い陶器は小便器、そして大便はここで」と指定されたのは、畑の手前にあった肥溜であった。どうりで屋根と腰の高さの板が付いていた訳だ。脚の幅に厚さ５センチほどの板が２枚渡してあって、覗いて見るとカエルが一匹壁にへばり付いている。あの高さでは上がって来れまい。「南無・・・」

畑のひまわりに迎えられ、池の鯉を見やりながら本堂の正面に。ついに辿り着いたのだ。山門を入った時も圧倒されたが、実際に階段を目の前にして厳かな気持ちが湧き上がってきた。

障子を開けると八十畳程の部屋で、柵の向こうの正面にはもちろんご本尊が安置され、左右にも仏像が鎮座している。その板の間も同じような広さがあるようだ。そして和尚は、山本を右端の角に連れて行き「君はここだ」と。そこには、時代劇の寺子屋に出てくる長机がすでに置かれていて、頭の上には直径が１メートル近い胴長太鼓が吊るしてあり、ご丁寧に裸電球もぶら下がっている。横の障子を開けると鬱そうとした森と不気味な八幡神社がこちらを伺っている。

そして「おまえはこっちだ」と左端の角に連れて行かれた。回廊の下が池でロケーションは申し分ない。柱を背にして横の障子を開ければ、やや耳障りな鹿脅しも目に入るが、採光は充分である。

日が落ちる前に帰りたかったのだろう、注意事項を説明し終えると和尚はセドリックに乗り込み、あっと言う間に視界から消えた。疲れもあって大の字でまどろんでいると「暮れ六つ」の鐘が・・・。見るとキヨさんが突いている。絵に描いたような山里の夕暮れだ。夕食だからと言われ、用意してくれた下駄をはいて庫裡(くり)に行って・・・驚いた。同年代と思しき男が二人、すでに席に座っていたのだ。

出身校と名前を告げ、越波に来た理由も説明すると、少しこ馬鹿にしたような顔をしたが、彼らは岐阜で一番の進学校出身で、一浪して東大と京大を目指しているという。見るからに頭は良さそうだが、このタイプの弱点は、プライドが邪魔して物事を正面から見られないことだろう。常に逃げ道を探しながら、斜に構えてしまい大事なことを見逃すことが多いようだ。

組みし易い相手であることは分かったが、何故越波に来たのか？訊いてみた。県庁の上級職の息子小西さんとその友人の白井さんだ。小西さんの父親と和尚が友人で、浪人中の息子と友人の受験勉強を是非、願養寺で面倒をみてほしいと頼んだそうだ。

疑問が二つ解けた。和尚は二人を乗せて来たのであって、我々はついでの荷物だったのだ。そして当初の計画が二転三転し

たのも頷ける。キヨさんは本当に病気だったかも知れないが、友人に懇願されて引き受けてしまい、無理に押し付けたのではないか。そうなると、狭い岐阜の中で「あの得体の知れない、やたら行動力のある小僧が、どこぞでこの話を耳にするかも知れん」。知識人と言われる連中はとかく、いちゃもんや揉め事が苦手なので「二人も四人も同じ」ということで急遽ＯＫを出したのだろうと。後に驚愕の真実が判るのだが知らない方が良かったのか・・・。

庫裡の裏手にある風呂に入り、キヨさんには「明け六つの鐘は俺たちが突きます」と告げて、懐中電灯を手に本堂へ。外の明かりといえば、山門を下りた道路傍の裸電球の街灯と対面の山の中腹の、青白い誘蛾灯のみ、本堂の軒下の電気は球が切れている。

火鉢を囲んで一服すると、大便をしたくなったので一人で肥溜めに行ったのだが、さて前向きに進むのか、後ろ向きにしゃがむのか迷ってしまった。しかも夜露のせいか板の表面が濡れている。桶の口径は1メートル以上あり中央まで進むと板も結構しなる。天井から紐らしきものはぶら下がっていないし、命がけの脱糞である。なるべく入り口近くに後ろ向きにしゃがみ、万が一の時は上半身だけでも落ちないようにした。

緊張の排便が終わり、昼間見たカエルを思い出して、ライトを照らすと反対側の壁に移動していた（六根清浄（ろっこんしょうじょう）・・・）。本堂に戻って、山本に報告すると「俺は庭に穴を掘ってする」と言い張る。猫じゃあるまいし本能的に板が折れるのを察知したのではないだろうか。

庭に下りて、池の奥にある手水鉢で口を濯いで本堂に戻り、それぞれの陣地に布団を敷いて「さあ寝るべ」と電気を消した瞬間、息を呑んだ。前面の障子全てに、松や杉が拡大されて映し出されたのだ。先ほどから啼いているフクロウや、ムササビの姿も、目を凝らせば見えたかも・・・。半世紀近く経ったいまでも忘れえぬ衝撃の影絵だ。

山本から「真ん中で並んで寝ようぜ」と言われ、御仏に守られながら・・・やっと一日目が終わりに。

初めての朝

「コッカドゥードゥルドゥー！」 時告げ鳥とはいえ、まさか外国かぶれの鶏に起こされるとは・・・。
山本も「今のはニワトリだよな、カッコーはどうした？」と。昨夜、不気味ではあるが、どこか優しさのあるフクロウの鳴声を聴きながら床についたのだが、山本はスイス民謡を知らなかったので「朝はカッコーにやさしく起こされ、夜はフクロウにおやすみなさい・・・と囁かれ」と言う内容の歌を聴かせていたのだ。

アルプスの少女ハイジは赤い屋根の石作りの家に住み、森の影からはカッコーが啼いただろうが、ここはアルプス山麓の静かな湖畔ではなかった。谷あいに漂っているのは、朝もやではなく、一日の始まりを知らせるカマドの煙なのだろう、山奥とはいえ人の住む集落、甘い幻想であった。

そして鬱そうとした森の影には何が潜んでいるのやら・・・。やはり・・・・居た。

障子に映る影絵はすでに消え、外は白んで明るい。布団をたたんで本尊に手を合わせ外へ。
越波で初めての朝を迎えたが、凛とした空気が何とも心地良い。下の道路へ下りて集落を見渡したが、人影は見えない。街灯の裸電球の周りには手のひらほどの蛾が数匹、夜の世界を惜しむように切なく動き回っている。朝廷、貴族の前で優雅に舞っていた白拍子の生まれ変わりなのか？

キヨさんが街灯の電気を消しに下りて来た。「寝坊するのかと思ったのよ」、そしてまだ時間があるからと一緒に庫裡へ戻り、ザルと鎌を持って裏の畑へ。ねぎ、サトイモを掘り起こし、庫裡の真裏の湿地へ行く。本堂の裏手まで2メートルほどの高さの石垣が積まれていて、高屋山の伏流水が石の隙間から絶え間なく流れ出て清らかな水溜りを作っている。本堂の床下近くまで広がっていて、わさび、みょうが、三つ葉などが群生している。直径が10センチほどの黒いゴムホースが石垣の一番上に差し込まれている。高低差を利用して庫裡の生活用水や、池の脇の鹿脅しに送っているのだろう。

「明け六つ」の鐘を半分ずつ思い切り撞いた。「今日の鐘は大きいから村の人は驚いたろうね」と楽しそうに下で見ていたキヨさんが言う。近くで見るキヨさんは、物腰、所作、表情は老人ではなく歳相応の、元気な中年のおばさんだった。

そして待ちに待った朝飯だ、居間で座っていると奥から小西さんらが首にタオルをぶら下げて現れた。昨晩、自己紹介は済んでいるので、とりあえず挨拶をかわして飯をかき込む。生卵に塩しゃけ、野菜はどれも新鮮でうまい。汁は三つ葉とサトイモのお吸い物。飯は昨晩同様に麦や粟、稗が適当に混ざっている。精進料理は覚悟していたが、飯が何杯でも食えるのは有難かった。

我々と違って両氏ともに食が細く遅い。育ちが良いのだろうか、昨晩の焼き魚も箸使いが不器用で見ていていらいらした。こちらは二人とも好き嫌いが無く、雷魚のように雑食、悪食なので、ほとんどの魚は頭からかぶりつき尻尾しか残さない。喰いっぷりが良いので驚いたのだろう、キヨさんは笑って見ていた。

お茶を飲みながら話を切り出した。「あの便所は怖いでしょう」と。小西さんと白井さんは顔を見合わせて「何故？」と聞き返す。説明すると、驚いたようで庫裡の奥へ案内してくれた。両氏があてがわれている六畳間の個室が並び、本堂へ続く廊下には清潔な便所があった。そして本堂に上がる階段の手前にも部屋が二つ。あまりの待遇の違いではあったが、友人の子息と、どこぞの馬の骨ではしかたあるまい。

疑問がまた解けた、和尚がのたまった注意事項の一つに「庫裡には必ず庭を通る事、掃除は本堂だけでよい」とあったが、何のことは無い、この廊下を通らせたく無かったのだ。だんだんと和尚の正体が判ってきた。昨日の昼飯は、白米と肉がたっぷりのすき焼風だったが、あれは和尚自身のためであったのだ。

喜んだのは山本である、さっそく便所にかけこんだ。勝ち誇った顔で本堂に戻って来たが、本当に嬉しそうだ。外の便所を使わないでよいのか・・・・ンッ！例のカエルを思い出した。行って見たが姿が見えない ・・・と、真下に移動していた。壁づたいに手がかりを探したのだろう、疲労の色が顔に浮んでいて利き腕を窪みに食い込ませ片手を振っている。庫裡の裏に立てかけてあった柄杓を取りに行き、救助を開始。無事に救い出し・・が器から跳び出して又、肥溜めの中へ、仕方なく被せたまま壁に沿って縁まで上げて今度は成功した。礼も言わずに草むらの中に消えたが、笑って見ていた山本が一言。「カエルの恩返しがあるんじゃないか？」

カエルの救出を終え、掃除の準備をしながら、今日一日の計画を練る。越波の探索は午後からにして、涼しい午前中は机に向かうことにした。

障子を開け放し本堂の隅々まで掃いて回廊へ掃きだす。紙屑やゴミは出ないので塵取りを使わずに済む。軒下とは言え、回廊は風雨に晒されているので、ヒビ割れてそっくり返ったり腐食も進んでいる。釘が錆びて効いていないのだろうか、踏むと木琴のように色々な音階が・・・（大工に遊び心があったわけではあるまい）

回廊は、両側とも奥行きの半分のところまで本堂を囲んでいて、突き当たりの障子を開けると、よく磨かれた板張りの廊下になり一周出来るようになっている。廊下の真中、ご本尊の後ろには障子が２枚あって、開けると裏山の水を滴らせた石垣が迫っている。砂地の水溜りは澄んでいてイモリが数匹ならんでいる。（朝礼でも始まるのだろうか）踏段が無いので、採光と風通しの為に使われているようだ。和尚が、のたまった注意事項に「開けっ放しにするな、木の葉や虫が入ってきてかなわん！」とあったが、本末転倒ではないか。もともと虫や獣の棲む世界に、人間が勝手に入り込んで来て住まわせて戴いているのだから、謙虚になるべきであろう。

廊下には仏事に使う祭壇や提灯の入った木箱と、不気味な長持ちが並んでいる。ミイラが安置されているのを期待して恐る恐る蓋を開けてみると、布団と枕が入っているだけであった。が、気のせいか布団の中央が沈み、枕も頭の形にへこんでいる。誰かの寝床ではあるまいか。そういえば長持ちと接している壁の裏側には、数百年前の上人の肖像画だろうか、古ぼけた掛け軸が一幅かけてあり、形容しがたい威圧感を放っている。

廊下を含む板の間は、雑巾がけをするのだが結構時間がかかる。修行とはいえ明日からは手抜きをせねば・・・。

昼食まで時間があるので、机の周りに本を並べ、とりあえず目標を書き出してみる。山本は苦手な物理を始めたようで、頭をかかえこんでいる。自分は寺の雰囲気に負けて「古文解釈」を読みだす・・・が、イカン！嫌な女教師の顔が浮かぶ。尊敬する清少納言になりきっているのも滑稽だが、紫式部を敵視するのには参った。容姿については言うまいが真ん中分けの髪型だけは許せん。

しばらくして、キヨさんが廊下に現れ本堂に向ってくるのが見えた。待ちに待った昼飯だ。
キヨさんと一緒に廊下に降りたが、山本が来る気配がない。戻って見ると、まだ頭をかかえこんでいる。しかも足をばたつかせ、のたうちまわっているのだ。立ち上がった瞬間、太鼓に脳天を激打したという。思い切り笑ったが、山本はこの後、

２度ぶつけている。危機管理の学習能力が欠けているのではないか。

質素ではあるがボリュームたっぷりの昼食が用意されている。小西さんらは例によって、ぼそぼそと食いながら「アミノ酸がどうたらこうたら・・・」。何も考えずに食う我々と違って、優秀な人々は脳みそが納得しなければ口にしないのだろうか。トイレの件から、だいぶ打ち解けたが、溝は相当深い。

越波の子どもたち

「村を歩いてきます」と告げると「一緒に行くわよ」とキヨさんが立ち上がる。白井さんが「昨日ぶらついたけど、特別変わったことは、無かったなあ」小西さんも頷く。恐らく俺たちとは感覚や視点が違うのだろう、別に気にする事でもでない。

山門の柱に打ちつけてある郵便ポストは、村全体の投函用で一日おきに局員が集めに来るとのこと。道路に降ると街灯と石垣の間に馬鹿でかいガマガエルが・・。人間の頭ほどの大きさだ。昨夜、裸電球の周りで享楽に溺れ、命の尽きた虫たちを貪っている。異様な図太い形相をしている。思わず「児雷也」を思い浮かべた。道中、蛇は何度も見たし回廊の床下や池の周りにも住み着いているようだ。となると「児雷也」の大蛇退治が繰り広げられるかも知れない。鳥獣戯画のウサギとカエルの相撲よりも現実味がある。

緩やかな坂道を歩いて行くと、学校が建っている。長峰小学校の越波分校だ。道路の両側に数軒の家が点在し、ほとんどの家の入口や窓には板が打ち付けてあって、聞いていたとおり１０軒しか住んでいないようだ。素朴だが丈夫そうな橋の向こ

うにも家が並んでいる。

キヨさんが村はずれの墓地に入って行くのでついて行く。訪れる人が途絶えた墓石の手入れをしながら、ヨモギなどを摘みに来るという。少し登った所に栃の木が数本並んでいて、斜面の窪みには栃の実が転がっている。野鼠の縄張りだろうか、数匹がこちらを上目づかいに見ながら盛んに食いかじっている。同じ仲間とは言え、リスと違って可愛さも無いし食い方に品が無い・・と、山本と話していると、一匹が体を起こし両手で栃の実を持って笑顔でかじりだした。こちらの話が聞えたのだろうか、或いは森に住んでいるリスにあこがれているのかも知れない。

布袋いっぱいに実を拾い道路に戻り、寺へ戻るキヨさんと別れて、上流に見えている堰堤まで足を延ばす。深く澄んだ水の中には魚影が濃い。釣果が期待出来そうだ。この先は上大須の集落に続いているのだが、踵を返して分校へ行ってみる。

寺を出た時から気付いていたが、村人達が迷惑顔で我々を見ている。キヨさんにもどこかよそよそしい素振りだった。ニワトリを飼っている家の人は挨拶を返してくれたが、恐らく寺が卵を買ってくれるからだろう。二日目にして初めて村人たちに出会ったが、何人住んでいるのだろうか。子供たちの騒ぐ声もテレビやラジオの音楽も聞えてこない。セミやカジカ、山鳥が時折鳴くが、雪に埋もれる冬季は、静寂に包まれた異次元の世界なのだろう。

いつの間にか5～6才の子供が3人後ろから付いて来ている。ずっと興味があったのだろう、機会を伺っていたようだ。年長の女の子が校舎に入って行って、先生を連れて来た。頼んでもいないのに得意げな顔して、腕にぶら下がっている。自己紹介して話を伺うと、西村先生は3年前に赴任して来たそうで、いかにも僻地廻りの教師らしく温厚で情熱的である。

３０歳位だろうか、小学生の一人息子のムネキと優しい奥さんと3人で分校に住んでいるとのこと。山本は教員志望なので先生と話がはずんでいる。子供らがうるさいのでボールを持って来させ、リフティングを実演し、狭いグランドでボールを

追っかけた。

ひと汗かいて教室に戻り、奥さんが出してくれた麦茶を飲みながら、話に加わる。過酷な環境のなかでの生活と教師としての仕事は、相当な苦労があると思うのだが、平然と楽しそうに語ってくれる。西村先生のような教師が日本の僻地教育を支えているのだと思うと、頭が下がる。思いがけない出会いだった。礼を言って帰ろうとすると「今朝の鐘は君たちが撞いたのか？」と笑っていた。

まとわりつく子供らと一緒に寺へ戻る。この3人兄妹と途中で合流した姉妹とムネキの6人が分校の生徒なのだ。授業風景が目に浮かぶ・・・。物語が出来そうだ。狸と狐の子供もランドセルをしょって登校、教師はもちろん森の博士と言われるフクロウだ。

子供らにとって寺は特別な場所なのだろう、回廊を走り回ったりはするが、本堂の中ではおとなしい。小さい子が和尚のことを「ごげんさん」と呼んでいる。年長の女の子に訊いてみると「権現様」とのこと。何というか、権力志向の強い坊主であることは間違いない。

黒塗りのセドリックは威厳を表しているのだろう。車が在る時は子供らは寺に寄り付かない。歩いてみて分かったが、どこから見ても車は見える位置にある。昨日、子供らが寺に来ない訳が分かった。

日が傾きかけ、キヨさんが優しく子供らを送り出す。「暮れ六つ」の鐘は、先輩達が撞きたいとのこと、晩飯まで勉強をすることにした。そして・・・二日目の夜が忍びよって来た。

小西さんらに、野鼠や堰堤、分校の話を振ってみるが、つまらなそうに箸を動かしている。全く興味が無いようで、視線を合わせないで頷いている。キヨさんは表情にこそ表さないが、何かを感じていたようだ。

風呂を浴びて、本堂に戻り机に向かう。子どもらが話す内容を書き出してみたが、何を言っているのか判らない言葉もある。「おんしは誰？」これは「御主」だろう。「やってくぜ」は「やってくだせい」か？もう少し歳上の、せめて中学生には会いたいものだ。

気が付くと、蛾や甲虫がやけに障子にぶつかって来る。山本の場所は八幡神社の森に近いので、こちらの倍は集まっていそうだ。外に出て本堂を見てみる。庫裡の灯りは消え、我々のいる両端だけが仄かに明るい。山本が御本尊の電気を消したので、更に風情が醸し出された。巨大な精霊流しの提灯のようだ。道路端の裸電球が、川崎のフィリピンパブに喩えるならば、本堂はさしづめ京都の高級クラブか。

気温や湿度が虫たちの行動に影響を与えているのだろうか、昨夜よりはやや生暖かい。しばらくして消灯、巨大な影絵には慣れたが、虫が集まっていた付近に目をやるとヤモリが数匹へばりついている。捕食の苦労がないとみえ、ガマガエルと同様にやたらとでかい！

山本は分校の西村先生が気に入ったようで、話を訊きながら眠りに入った・・・・。

魔界からの訪問者

何の音だろう、聞いたことが在るような、無いような・・・。耳障りな鹿脅しは、雑巾を重ねて音が出ないようにしてある。都会の寺ならいざ知らず、この山の中では不要な雑音そのものだ。その効果も在って、音とリズムが明瞭に耳に入ってくる。天井裏をネズミが走っているのか？

天井を見つめながら耳を澄ますと・・・思い出した、子供らが回廊で遊んでいた時の音だ。夢・・か？いや、何かが音階を楽しむように軽やかに動き回っているのは間違いない。腕時計をみると、まさに草木も眠る丑三つ時、山本は、と見ると・・いない！すでに正面の障子の前にうずくまって腰板の隙間から外を窺っている。四つん這いで近寄ったが、何も見えないという。影が映らないので身長は低い筈だが、体重がないと回廊の音階は出ない。気配を察したのか、前を横切らないで離れた所で跳ねている。「ポン・ポン・ポン」暫く息を殺して前を横切るのを待っていたが、左側の神社の方に音が遠のいたので、思い切り障子を開けた・・・その瞬間、砂利の上に飛び降りたのだろう「ザッ！」と聞えたが、何も見えない。近寄って見たが動く物は無い。街灯の灯りだけが頼りだが影を作るばかりで役に立たない。又、静寂が戻って来た。そして気が付くとフクロウが鳴き、虫も騒ぎ出した。

火鉢を挟んで一息付いて、お互いに想像をめぐらす。２本脚歩行で体重は１０キロ以上。山本の意見は「猿」。自分は、子どもらの友達で病気で亡くなった「女の子の霊」。子どもらが意味不明の数え歌を歌いながら回廊の音階を楽しんでいたが、

そのリズムとよく似ていたからである。

しばらくは変化も無いので、寝ることに・・・ふと、ご本尊の阿弥陀如来を見やると、右手でＯＫマークを作っている。何がＯＫなのか分からんが、とにかく布団に入った。しかし神経が冴えて眠れそうもない。山本もまんじりとしている。

おかしい、静かすぎるのだ。フクロウも眠ってしまったのか、虫のなき声もピタリと止んだ。そして、かすかにだが・・・砂利を踏む音が聞こえる。山本も気付いたようで、目で確認する。そして、その確かな足音は階段を登ってくる・・。正面の回廊で動かない、恐らく障子の隙間からこちらを覗いているのだろう。恐怖と期待の入り交った、生涯で初めての感覚に身震いした。

半身を起こして山本に目配せする。布団から離れたその瞬間、足音が又、神社の方向に走り出した。逃げられたか・・が違う！角を曲がって突き当りの障子を開けたのだ。建付けが悪く、開けにくい筈だが、いとも簡単にまるで住人のように・・・。そして、足音は板の間の廊下をスキップでもするかのように進んで行く。

何者かと我々は今、同じ部屋の中にいるのだ。とっさに左端の壁にあるスイッチまで走り板の間の電気を点ける。とその時、ガタガタッと音が・・・。そして静寂。気が付くと外気が顔にあたっている。まさか！とは思ったが真裏の障子が開いていた。しかも2枚ともきっちりと。何と言う余裕だろうか。けものが逃げるのであれば障子など簡単に蹴破るだろうに。しかも飛び降りれば水音がする筈だ。裏山の石垣に跳び移ったのだろうか。漆黒の闇が一層不気味である。間違いなくこちらを凝視している・・・。

しばらく興奮が治まらなかったが、朝まで眠れなかった・・・。

明け六つまでは、まだ時間がある。とりあえず、何か痕跡がないか探してみることにした。回廊は表面が滑らかではないので足跡は見つけ難い。そして突き当りの障子をあけてみる。

やはり、だいぶ下の方を引かないと、がたつく。腰板に爪あとのような窪みがあるが、無数の傷があって判別できない。でこぼこした回廊の表面が足ふきマット替わりになったのだろう板の間はきれいなもんだ。足が濡れてなければ足跡はつかないのではないだろうか。

そして真裏の障子は湿気を含んでいるためか、すんなりと、それこそ両手を使えばで楽に左右に開く。それにしても助走をつけずに石垣の上に跳び移るのだから、並みの跳躍力ではない。いや・・・ひょっとして外へ逃げ出したと見せかけて物陰に隠れたのではないだろうか。障子を閉めて戻ろうとすると、山本が「後ろを見ろ」と顎で合図する。その視線の先にある長持ちの蓋が、ややずれている。やはり何者かの寝所なのだろうか？

妖怪

、座敷童・・・。震える手でそっと持ち上げてみる・・・が動かない・・・中から強い力で押さえているようだ・・てなことはなく、何も変わった所はない。

頭が半分ボーッとしているので、体を動かすために掃除を始めることにした。板の間を掃出しながら、何か落ちていないかと目を凝らすが何も無い。ご本尊の左側の阿弥陀如来に訊いてみるが、うつむいて黙り込んでいる。右側の如来像はどうだろうか？本堂に侵入した時に襖一枚隔てただけなのだから、何か感じている筈だ。無駄だった。「すまん」とでも言っているのか片手で謝っている。おぼろげながら疑問が解けた。昨夜の出来事は、この寺にとっては不可思議な事象ではないのだろう。ご本尊の「ＯＫ」は「心配するな」、うつむいているのは「話す訳にはいかん」、謝っているのは「見なかったことにしてくれ」と言っているのではないか。山本に話すと「まったく、お前の想像力には呆れる・・」と。

雑巾がけを手早く済ませ、明け六つの鐘を力いっぱい撞く。街灯の裸電球を消しに参道を下りた。蛾が数匹地面でバタついているが、ガマガエルがいない。昨夜の侵入者の登場に恐れを成したのだろうか。期待していたこととは言え、二日目の夜に起きるとは・・・この先いったい何が待ち受けているのだろう。

朝飯の前に少しでも机に向おうと本堂に戻ることに。子供らが遊びに来るに違いないので時間は有効に使いたい。階段を上がるとトカゲが一匹敷居に手をかけて中を伺っている。昨日も畳の上を走り廻っていたが、どうやら同じトカゲのようだ。からまれると面倒なので無視することにしたが、机の横までついて来てこちらを見てる。トカゲの表情が分かるほど親しくしたことははないが、安心しているのか警戒心はないようだ。

単語をいくつか調べてノートに書きだし「ＲＥＥＤＥＲ」を読みだす・・・と、キヨさんが迎えに来た。山本を見ると注意深く立ち上がってこちらに向かって来る。足音に驚いたのか、トカゲはそそくさと入って来た時と同じ正面から出て行った。

小西さんらもほぼ同時に居間に入り席につく。環境にも慣れたのか勉強に身が入っているようで、目が赤い。キヨさんが味噌汁をよそってくれ、４人とも箸を手にして、それぞれが身についている食事動作が始まる。一口二口食べたところで、山本が目配せする「つまらん話を切り出される前に早く話せ」と。

箸を置いて「実は夕べ・・草木も眠る丑三つ時に得体の知れない何かが・・・」二人とも驚く素振りを押し殺し、にやりとしながら「またまたあ～夢じゃないの？」と、こちらを傷つけまいと大人の応対をする。興味はあるだろうが話に引き込まれるのを避けているようだ。無理もない、浪人ではあるが最高学府を目指している人間として、年下のしかも運動馬鹿を絵に描いたような輩の与太話に興味を示したとあっては、プライドが許さないのだろう。さながら矢追純一率いる頭の悪そうな面々を一笑に付す大槻教授のようだ。予想はしていたが、とりあえず面白がって一部始終は聴いてくれた。

キヨさんは頷きながら「こんな山の中だから何が棲んでるのか分からないわよ」と、そして「お供えが消えることがあるから猿だろうね」と驚く様子もない。不思議な経験を聴いてみると「檀家の男衆が死ぬと靴音が、女性が亡くなると下駄の音がする」とのこと、何度か体験したそうだ。とにかく今夜は何としても証拠を掴みたいので、古くなったうどん粉を貰うことにした。足跡を採るために回廊に撒くのだ。先輩たちも参加したいのだろう、「本堂に泊まろうかな」と顔に出てるが意地でも言い出さない。

マムシ騒動

本堂に戻ったが、寝不足と飯の食い過ぎで頭が働かない。腹ごなしに体を動かそうと、薪を割ることに。山本は庫裡の裏の畑を耕しに行った。農家の息子だけに手馴れていて、キヨさんが感心していた。小一時間、汗を流し机に向かう。しばらくすると、子供らの声が聞こえてきた。話がまともには通じないが、遊んでやらねばなるまい。

と、階段まで来たところで「蛇！」と叫んで後ずさりしている。見に行くと、池の周りの大きな石の上に５０センチ程のシマヘビがのんびりとのたくっている。床下に棲んでいるのは分かっていたが水でも飲みに来たのだろうか。とりあえず挨拶だけはしておこうと近寄ったが逃げる素振りがない。尻尾を掴んで持ち上げると、驚いたのか、体をくねらせ頭を持ち上げてこちらを睨んでいる。無理もない、自分の生涯でこんな目に会うとは思ってもいなかったろう。

性格がおとなしいのか観念して甘えているのか、仕草が妙に色っぽい。山本がキヨさんから一升瓶の空き瓶を貰って来たの

で、やさしく首根っこを摘んで頭から瓶の中へ。子供らは目を丸くして固まっている。蛇なんぞは珍しくもないだろうに、やはり爬虫類には苦手意識があるのだろうか。逃げ出さないように手ぬぐいの切れ端を瓶に被せる。暫くじっとしていたが壁に沿って昇って来た。そして頭に布を載せたまま左右前後に揺れている。視界が遮られているので動きが遅い。そのユーモラスな姿に、やっと子供らの表情が和らぐ。「妖怪ろくろ首」は、案外こんな光景から生まれたのかも知れない。

ちょうどその時、カバンを肩にかけたおネエさんが山門に現れた。汗を拭きながらこちらに歩いて来る。郵便局員は女性だった。３０代前半だろうか、こざっぱりした身なりで、やや太めだが笑顔が魅力的だ。「掃き溜めに鶴」とはこういうことを言うのだろう。二日に一回会えると思うと何故か嬉しい。

いたずら心で「マムシ！」と言って瓶を見せるが、おネエさんは少しも動じない。笑いながら「それはマムシじゃないわよ、マムシならそこにいるじゃない。」と指をさす。なんとヒマワリの根元にとぐろを巻いていて。
淡褐色の体に銭型の模様が周りを威圧している。「ワッ！」と叫んで子供らは山門まで逃げ出した。危ないところだった。知らずに近寄っていれば咬まれていただろう。いつかは出っくわすと思っていたが3日目にして主役の登場だ。すぐにシマヘビを逃がしてやり、床下から2メートル程の手ごろな太さの竹竿を引っ張り出す。山本が物置からナタを持ち出して来た。竿の先を裂いて、折った小枝を差込み適当なＶ字を作る。手紙を庫裡に届けたおネエさんとキヨさんが並んで心配そうに見ている。寺の境内で無益な殺生はしたくないが、マムシが相手ではしかたあるまい。殺気を感じたのか目が据わっている。竿を向けるとすぐに鎌首をもたげて臨戦態勢に入った。すかさずＶ字で首を挟み、捻って地面にこすりつける。小枝のくさびが外れ、竹の鋭い断面が鱗に食い込み、血が噴出し首が半分ちぎれた。持ち上げてみると６０センチ近く有り胴が太い。どうしようか迷ったが川に流すことにして、竹竿にぶら下げたまま山門へ向かう。子供らが青ざめた顔で逃げ出す。家に帰ったようだ。茂みが深いので川べりまでは行かれない。遠心力を利用して竹竿を振り下ろしたが、飛びすぎて向こう岸の岩と草むらの間に落ちた。寺へ戻ると、キヨさんが「何でもやるんだねー」と感心している。おネエさんも「めったに人の前には出て来ないけど、いるのは間違いないから気を付けてね」と言いながら、ポストから郵便物を取り出して帰って行った。

キヨさんが麦茶を運んで来たので階段に腰を下ろして一息つく。やっとマムシ騒動の緊張がほぐれてきた。昨夜からの事を考えると、越波は想像していたよりも魅力的で危険な地域なのだ。今も何者かがどこからか見つめているかも知れない。考えただけでも身が引き締まる。

のんびりしていると、オヤジさんが山門から入って来た。何事かと思っていると「マムシはどうした？」といきなり聞いてきた。場所へ案内すると、地元の人だけあって器用に石に飛び移って向こう岸へ。すぐに見つけ、ぶら下げて戻って来たが、凄い生命力だ、まだ動いている。子供らに話を聴いた父親なのだろう。「又、捕まえたら教えてくれ」と言って帰って行った。マムシは貴重な精力剤であり滋養の薬なのだ。

山本が笑って言う「ふつうは、見つけたら教えてくれって言わねえか？」と。岐阜の蛇屋に、生きたマムシを焼酎に漬けた強壮酒を売っていたが結構高かった。生け捕りは危険なのだろうが、捕まえるのをあてにされても困る。境内での騒ぎにも小西さんたちは全く無関心なようで顔も出さない。「少し早いけど昼飯にしましょう」とキヨさんが迎えに来る。我々に対する印象が少しずつ変わってきたようだ。

「めったに作らないから・・・」と言いながら、楽しそうにカレーをよそってくれる。キヨさんも献立には苦労しているようだ。先輩たちよりも多めに盛ってくれ、こちらも期待に応えてきれいにたいらげる。蛇の話には興味を示し、「蛇池と言う地名もあるぐらいだから相当いるんじゃないのかなあ」と小西さん。「出来れば見たくないよ」と白井さん。そして「俺たちも少し運動をするかなあ」と二人とも3日目にして息抜きがしたくなったようだ。無理もない、完全に自由な環境の中で勉学だけに励むと言うのは、相当な精神力がいる筈だ。凡人には理解出来ないが、目標を達成するための努力には敬意を表したい。

本堂に戻って昼寝をする。昨夜の出来事とマムシ騒動でやや疲れたようだ、障子を閉めていても涼しいが、蒸してきたので数箇所開けておいた。予想どおりトカゲが入って来たが、相手をしないで無視することに。満腹という事もあって熟睡してしまった。

障子がガタガタと騒がしい、風が出てきたようだ。蒸し暑いのか首筋に汗が滲んでいる。
空を見ると雲が流れてきて集まりだしている。一雨くるのだろうか、子供らは来そうにないので安心して机に向かう。寺に来て3日経つがやっと集中して単語を覚えられそうだ。

庫裡の方で下駄の音がする。先輩二人が「暮れ六つ」の鐘を撞きに来たのだが、時計を見るとまだ時間がある。勉強に飽きたのか、山門を出て見えなくなってしまった。「興味が無い」とは言っていたが、堰堤や分校でも見に行ったのだろうか、現実離れした山深いこの地域にいる訳だから、もっと楽しんで欲しいものだ。

夕飯は結構盛り上がった。だいぶ気心が知れて来た事もあるが、散歩に行って腹が減ったのだろう、二人とも箸がよく動く。こちらは昨夜の出来事を思い出だし気持ちが昂ぶっている。キヨさんも話に入って来て「正体が分かるといいわね」といたずらっぽく笑う。「何か餌を置いて誘き寄せようか、罠を仕掛けようか」と会話が弾むが止めることに。回廊に粉を撒いて足跡だけ確認する事にした。自惚れてはいかん、この地は彼らの世界なのだ、よけいな事をするのはおこがましい、謙虚な姿勢を持ち続けなければならない。色々な事に出会えること自体恵まれているのだから。

外が騒がしい、越波に来て初めての雨だ。風が杉や松の枝を揺さぶっている。鳥や獣たちはどうしているのだろう。風呂から上がってキヨさんにうどん粉を貰う。先輩たちも、とりあえず現状をチェックしに本堂に顔を出した。本気で信じてはいないだろうが、くだらないと思える事でも、何かを目的に行動を起こすことの面白さが分かってきたのかも。

本を開くが、わくわくして頭に何も入らない。山本も上の空のようだ。灯りが点いていては来訪者も来ないだろうが今夜は眠れそうもない。障子を開けてみると雨も風もやや弱まってきている。庇が大きいので雨が吹き込んでいない、回廊は乾いている。まずはうどん粉を半分程使い、手分けして両端から撒いて階段にもまんべんなく散らし様子を見ることに。とりあえず電気を消して布団に入るが雨音以外何も聞こえない。ジッとしているのも飽きるので何度も障子の隙間から外を窺う。誘蛾灯の青白い光と街灯のオレンジ色の灯りが雨の中に滲んでいる。「谷内六郎」の絵画のようだ。時計はすでに日付が変わっている。

風が出てきたのだろう、障子に映る木々の枝が不気味に揺れている。神経を集中するが、期待する足音は聞こえてこない。待ちくたびれて二人とも寝入ってしまった・・・。

ジジジ・・目覚ましの音に起こされる。願いを込めて寝ぼけ眼で障子を開ける。雨はだいぶ前に止んだようだ。風も穏やかで石畳はすでに乾いている。回廊は、と見ると普段と何も変わらない。足跡どころかうどん粉も無い。風で吹き飛んでしまったのだ。敷居の隅にわずかに残っている。庭に下りて神社の方へ回ってみると所々霜が降りたように白くなっている。風は予想外だったが、所詮我々の浅知恵はこんなもんだ。がっかりもしたが、何故かホッとした気持ちも・・。そしてこれ以後、魔界からの訪問者は来なかった。

先輩達が顔を出す。少しは期待していたようだ。回廊を歩いて神社の森を見上げている。

「何が居ても不思議じゃないね・・・」白井さんも腕組みをしながら「・・・雨が降らなければなあ」と落胆の色を隠せない。キヨさんが庫裡から出て来た。石畳を掃きながら「どうだった？」と笑っている。我々のやる事が面白いのだろう、楽しくてしょうがないようだ。

鐘を突いて、日課の掃除を済ませる。話がはずんで朝飯はにぎやかだった。先輩たちも「同じ釜の飯を食う」雰囲気になじんできたようだ。

スズメバチ1

4日目が幕を開けた。期限の12日まで今日を入れてあと9日間、4分の1があっという間に過ぎ去ってしまったが、あまりにも濃密な時間だった。ろくに予備知識などを頭に入れないで、幻想を描いて遊びに来ただけなのだから、毎日が斬新で楽しくてしかたがない。松江に魅入られたラフカディオ・ハーンも、こんな心境だったのだろうか。

「一雨ごとに・・・」とよく言われるが、この自然の真ん中にいると分かる気がする。
ほこりが洗い落とされた葉っぱはどれも緑が濃い。銀杏の大木は樹皮の模様が鮮明でやや太くなったようにも見える。畑のヒマワリも「今を盛り」と地中の水を吸い上げている。背後の高屋山の、きのこが大騒ぎしているのが目に浮かぶ。そして、あの訪問者も雨を浴びて身ぎれいになったことだろう・・・。

子供らが遊びに来た。昨日の蛇騒ぎのせいか畑や植え込みにも目を向けている。この地域で暮らしていくには、自然のなかに潜む危険と絶えず向き合っていかなければならないのだ。怖がってばかりいては生活出来ないが、察知能力みたいなものは身についていくのだろう。五感なども研ぎ澄まされ、逞しく育っていくに違いない。

女の子が石けりを始めた。男の子は虫取り網を持っているが、本堂の周りをうろうろするだけで、畑の中や神社の方には行かない。それぞれ階段に座って休んでいるが本堂には上がって来ない。こちらの顔色を窺っている、声をかけられるのを待っているようだ。

キヨさんが箒と塵取りを手に庫裡から出て来た。子供らがちょっと緊張する。「書生さんの邪魔をしちゃだめよ」と言い聞かせながら、女の子を連れて神社の拝殿へ。掃除を手伝わせて飽きさせないようにしている。男の子もキヨさんがいて安心したのだろう、神社の階段を登って網をふりまわしている。しばらくして掃除も終わり　一緒に戻って来た。キヨさんがエ

プロンのポケットから飴を出して子供らに配る。「お昼ご飯を食べてからね」と山門まで送って行く。おかげで午前中は勉強に集中できた。

昼食は「子供たちの日常の生活」について語り合う。殆んどの家は林業を営んでいて、子供らは手伝いなどは出来ないだろうから、家の中ではテレビを観たり本でも読んでいるのだろう。狭い地域ではあるが外に出れば、木登りや虫捕り魚釣りなど、遊びには事欠かないはずだ。年寄りから聴かされる「伝説や民話」などもたくさんあるだろうから、ぜひとも教えて欲しいが5〜6歳では心もとない。金田一京助博士の苦労が理解出来るというものだ。キヨさんは飯をよそってくれながら話を聴いているが、どこか寂しげだったのが気になった。

会話が続くようになったので食事の時間がだんだん長くなってきた。お互い相手の領域には立ち入らないので、信頼関係は出来つつある。先輩両氏は友人であっても受験に関しては競争相手であるらしく、時折火花を散らしている。我々のような運動馬鹿丸出しの輩の生臭い友情は理解できないだろう。

本堂に戻る廊下で、山本がズボンに右手を突っ込んでさかんに睾丸辺りを掻いている。インキンタムシがうつったようだ。無理もない、寝食はおろか風呂も一緒なのだ。部室が隣なのにバレー部にはインキン持ちがいなかったとのことが前から不思議だった。我がサッカー部を始め他の運動部には蔓延していたのに・・だ。競技のスタイル同様に、清潔感があり泥臭い不潔な奴がいないのだろう。もちろん対処方を知らないので教えてやることに。ズタ袋から「キンカン」を取り出し団扇も渡す。「手伝うぞ」と申し出たが、「向こうに行ってろ」とさすがに断られた。パンツをズリ下ろし障子を開けて神社に向かって胡坐をかいている。「痛くないだろうな？」と怖がっているので「チョットしみるからすぐ団扇で扇げ」と大声でアドバイス。そして・・・絶叫が響きわたるが、すぐに呻き声に変わった。

飛び上がった瞬間、太鼓に頭を強打したのだ。ずうっと注意していたのに二度目の災難だ。跳躍力は認めるが、どこか鈍いのかも知れん。笑いをこらえながら近寄ったが、情けない格好だ。錯乱しているのだろう、下半身を左手で押さえ頭を団扇

で扇いで悶えている。「キンカン」の瓶は蹴飛ばされ回廊に転がっている。団扇を取り上げ、丸出しの局部を扇いでやる。男同士の珍なる友情だ。暫くして騒ぎは収まったが山本の目には涙が浮かんでいる。インキンの痒みは頭痛で忘れたようだ。首を回してコキコキと音を立てている。

上半身裸で短パン一枚で横になる。日差しの強い庭を眺めながら頭の中がからっぽになっていく。畳の感触が馴染んできたようで、何ともいえない幸福感に包まれる。山本も頭に濡れタオルを乗せて、柱を背にボーっとしている。午前中は姿を現さなかったトカゲが顔を出す。しばらく廻りをチョロチョロしていたが、遊んでくれないと分かったのか、うなだれて帰って行った。

兄弟の声で目が覚めた。陽がやや傾き始めているが、とにかくよく眠れる。階段で虫捕り網を持った弟が拝殿を指差して何やら喚いている。見ると兄が拝殿の中で天井を見上げて網を突き上げている。「蝉を捕ってくじょ」と弟がせがむ。山本は半身を起こしてボーッとしていて動くつもりはない。しかたないので目をこすりながら拝殿へ・・。天井の梁の下面にあぶら蝉がいた。蝉なんぞ珍しくもないだろうに、それでも子供らにとっては大切なおもちゃなのだろう。腰板の上に乗ってジャンプすれば、梁の中程の蝉に届きそうだが、横の面ではなく下面に留まっているのでテクニックがいる。兄弟が目を輝かせて見つめているので少し離れるように指示。とにかくやってみよう、網の口を曲げて角度をつけ狙いを定めて思い切り跳んだ・・・・。

ジジッ蝉が鳴く、確かに捕った・・・そして着地。ベキッ！右足が床板をぶち抜いた。やっちまった。膝から下が隠れている、引き上げて見ると脛の皮がめくれ血が滲み出し痛みが襲って来た。兄弟は、と見ると、すでに拝殿から飛び出し、何やら叫びながら山門へ向かって走って行く。速い！顔は見えないが恐怖で引きつっているのが分かる。山本が何事かと身を乗り出している。立ち上がって網を見ると蝉が動いている・・・が、いつ入ったのだろうスズメバチが一匹這い出して来た。でかい！そして見事な美しさだ。見とれていると、羽が広がり軽やかに浮き上がって左の肩に留まった。至近距離で見る黒

と黄色の警戒色の造形美に圧倒されて身動き出来ない。そして奇妙な感覚に囚われる。刺されるのは分かっているのだから叩き潰せばよいのに恐怖心より好奇心が湧いてきた。ミツバチやアシナガバチには何度も刺されているし、ムカデには睾丸の脇を噛まれたこともある。果たしてスズメバチの痛さは・・。

血管を探しているのだろうか、首を左右上下に振りながら触角を盛んに動かしている。そして尻をこちらに向けた。先端が皮膚に触れた。チクッ！僅かに痛みが走るがたいしたことは無い。尻を持ち上げた、透明な滴が見える。先走り液だろうか、そしてバラの棘を細くしたような黒い鋭利な針と肉を切り裂くノコギリ状の刃が現れた。６本の手足が皮膚に食い込む。その瞬間、強烈な痛みが走る。針が奥深く刺し込まれたのだ。体をのけぞらせ腹が波打っている。ありったけの体液を注ぎ込んでいるのだ。・・・そして、悠然と森の中に消えて行った・

肩の奥深く衝撃が・・・我に返った。傷口から血が出ている。右手に力を入れて毒を絞り出しながら本堂まで歩いて来て階段の手摺りによりかかる。まるで矢を射抜かれた武将、いや雑兵の姿とだぶる。山本が笑いながら「キンカン」を持ってきた。肩口なので自分で毒を吸い出す事は出来ない。山本が申し出るが断る、と「小便をかけようか」と、それも断る。スズメバチの毒についての知識はないが、とりあえず「キンカン」だけでも塗っておく。気のせいか脈拍が速くなってきたようだ。

山門に年配のオヤジさんが現れた。板切れを抱え大工道具の入った袋をぶら下げている。苦情を言われるかと覚悟したが、すまなそうにペコリと頭を下げ、拝殿の中へ。暫くしてカナヅチの音が止んだ。折れた板を袋に突っ込んでオヤジさんが戻って来た。「すみませんでした」と謝って虫捕り網を渡す。兄弟が正直に訳を話したのだろう、「脚の怪我は大丈夫か？」と気遣いながら帰って行った。

本堂に戻って濡れタオルで肩を冷やすが効果は期待出来ない。体が重い、時間の流れが止まったように感じる。小西さんた

ちが「暮れ六つ」の鐘を撞き始めた。いつの間にか夕闇が迫っている。うつ伏せになって本を読んでいた山本も目を覚ました。痒みが消えたのか、爽やかな表情でこちらに歩いて来る。一緒に庫裡へ向かうが自分の身体ではないようだ・・。

膳を前に正座する。背筋を伸ばして箸を持つが食欲が湧いて来ない。白井さんらとキヨさんが異変に気づく。山本が、拝殿で起きた顛末を説明する。３人とも自分を見て笑いをこらえている。山本が続ける、「こいつは、どこに行っても目立ちたがり屋でオッチョコチョイだから、いつもこういう目にあう・・・」と。４人で楽しそうに笑うが、スズメバチにはチクッと刺されただけでまさか、追い払いもせずに眺めていたとは思わないだろう。何とか食べ終わったが、身体が熱を帯びてきた。目をつぶると倒れそうになる。キヨさんに濡れタオルを用意して貰い本堂に戻ることにした。山本は風呂に入るので居間に残って皆で談笑している。「神仏の怒りが・・」だの、「天罰が下った・・」だの言いたい事を言っている。廊下に出たが本堂までが遠い、わずか３段の階段も脚が思うように上がらない。心臓に近かったので毒が身体中に回ったのだろう、脈が早くなってきた。ふらつきながらもやっと布団にたどり着く。・・・そして得体の知れない不気味な渦に引きずり込まれた・・・。

暗闇の中に仄かな明かりが・・足元は見えないが近寄って行くと分校だと分かった。いつの間にか教室の中にいる。先生はフクロウだ。夜しか活動しないので定時制を担当していると言う。生徒は狐と狸の子供が一匹づつ、机を並べていて胸には大きな名札をぶら下げている。「きつわ」と「ためき」と書いてあるので訊いてみると、筆が持ちにくいので、小さく丸めることが出来ないと答える。二匹ともポケットから「かぶと虫」を取り出し、ノートに書いた「土俵」で相撲をとらせている。先生は黒板に何やら書いているが、首だけを廻しては微笑んでいる。楽しそうな授業だ、自分も加わりたい・・・。身体が浮いた、風に流されていく・・線香の匂いが漂って来た、暗くて何も見えない、墓地なのか？ 思い出した、自分はスズメバチに刺されて倒れたのだ。身体はまだ浮いている、爽快な気分だ・・
下方に明かりが見える、布団が敷いてある部屋が現れた、短パンとTシャツの男が寝ている・・いや死んでいるのか、あれは自分ではないか？身体が吸い込まれていく・・・。

障子が開いた、ペタペタと足音がする。頭にリボンをつけたエプロン姿のカエルが入って来た。心配そうな表情で枕元に座り、顔を覗き込んでいる。「大丈夫だよ」と目で答えると、安心したのだろう、喋りかけてきた。朝帰りした馬鹿亭主を問い詰めたところ、「一晩中肥溜めに落ちていたのを高校生が助けてくれた」とのこと。恩人の高校生がスズメバチに刺されて危険な状態と聞いて取るものも取らず駆けつけた、と言うが真っ赤な口紅をひいて化粧も濃い。愚痴が始まった。「馴染みの客として遊びに来ていた頃は真面目そうだったので、自分も身を固めようと一緒になったが、どうしようもない道楽者で苦労が絶えない」と、エプロンの端で涙を拭いている。ふとももが露わになった。妙に色っぽい、高校生には目の毒だ。雄琴で売れっ子だっただけに「女」を演出するのはうまい。

物音に振り向いたカエルの女房が怯えた表情で反対側の枕元に移動する。何事かと目を凝らすとシマヘビが入って来た。瓶に突っ込まれて笑い者にされたのを怒って、文句の一つでも言いに来たのかと思ったが、そうではないようだ。事の一部始終を床下から見ていたので「心配で見舞いに来た」と言う。そして「仲間のマムシも嫌われ者だけど、スズメバチとは比べ物にならない」と語気を強める。「木の枝に寝そべっていた弟に集団で襲いかかり無残に殺された」と、まぶたの無い目に涙を浮かべている。「空を飛べるので、防ぎようがない」と悔しがる。寺と神社には「白竜」が崇められていて、その一族を殺すのだから相当な悪党なのだろう。訊けば「白竜の起源は、生まれつき身体が弱かったので外に出て遊ぶことが無く、色白だった母方の祖先のシマヘビなの」と、胸を張る。どこまでが胸だか分からんが、カエルの女房を威圧している。畳を掃くような小さな音が近づいて来た、例のトカゲだが様子が違う。見るからにヨボヨボの年寄りのトカゲを連れている。尻尾が切れたままで再生出来ずにいるところを見ると相当な歳なのだろう。歯が何本も抜けた口を大きく開けて喋り始めた。「白竜がシマヘビとは笑止千万、ヘビのどこに手足があるのだ」更に続けて「鯉が出世して龍になる訳が無い、タツノオトシゴならともかく」と、声が震えている。積年の鬱憤が溜まっていたのだろう、こめかみの血管が浮いている・・・・。

涅槃に横たわる釈迦は、あらゆる動物たちに見守られてその生涯を閉じたが、自分の廻りには爬虫類と両生類が四匹・・え

らい違いだが誰もいないよりマシか、だがまだ死ぬ訳にはいかん。

「へらへら笑ってないで目を醒ませ」山本の声だ。風呂から上がって冷たい水を持って来てくれた。だいぶ汗をかいたので一気に飲み干す。「どうせ下らん夢でもみてたんだろう」と笑っている。まだボッーとしているが、だるさが半減している。朝まで熟睡できそうだ。

腹が減って目が覚めた。外はすでに明るい、穏やかな朝を迎えたようだ。天井は廻っていない、いつものように金箔の極楽浄土にハスの花が咲いている。昨夜の出来事は夢だったのだろうか。爬虫類の世界も大変なようだが、それにしてもトカゲの爺さまの話は説得力があった。龍は、人間が創った架空の動物だが罪な事をしたものだ。自分も、姿そのものはトカゲがモデルかなとは思うが、蛇の持つ威圧感や、滝を昇る鯉の逞しさは無い。チョロチョロ動き回りシッポを切り落として逃げて行くさまは、滑稽で「神」として崇めるのには無理があると言うものだ。トカゲが遊びに来たら話してやろうか・・いや止めておこう、爺さまに出て来られたら話がややこしくなりそうだ。

キヨさん

「明け六つ」の鐘を撞くが腰に力が入らない。山本は思い切り撞いて余韻を味わっている。庫裡の玄関先に打ち水をしながら、キヨさんがこちらを見ている。5日目ともなると、表情から感情が読み取れるようになってきたのかも知れないが、心配などはしていなかったようだ。いつものように優しく微笑んでいる・・・。

手分けして掃除と雑巾がけに汗を流すが、日課とはいえ空腹での作業はしんどい。やはり、口先だけの修行者には根性が無い。頭の中で朝飯の膳が呼んでいる。やっとの思いで掃除を終え、ご本尊に向かって正座し手を合わせ「昨夜の騒動」の謝罪と感謝の気持を伝える。

笑い声の絶えない、明るい賑やかな朝飯になった。目障りな奴が、痛い目に合い、弱った姿をさらけ出すのは爽快な気分なのだろう。ガキの頃から何度も味わっているので、対処方は身についている。へらへら笑って受け流すだけだ。「これから蜂が増えるから気を付けないと」とキヨさんが注意を促す。キヨさんは一度も刺されたことが無いと言う。「アブと蚊には、しょっちゅう喰われてるけどね」と腕を捲くる。話が途切れたので、昨夜の体験談？を持ち出そうかと思ったが止めた。若い娘でもいれば盛り上がるが、この雰囲気では無視されるに決まっている。馬鹿にされるだけだ。胸の内にしまっておこう。

先輩両氏は膳を下げて「じゃあ」と会釈して隣の書斎へ戻った。こちらは、食いすぎて動きたくないが、いつまでも片付かないので食器をまとめて台所へ。残飯がないので「洗うのが楽でいいわ」とキヨさんが笑う。「お茶を入れるから座ってて」食後のこの時間帯は便所が混むのを知っているのだ。膳を片付けて、卓袱台の脚を引き出す。キヨさんが番茶を運んで来た。・・・なんだろう・・まるで自宅にいるような居心地につつまれる。

「勉強は進んでるの？」番茶をすすりながらキヨさんと向き合う。実の母親とだったら、照れて逃げ出してしまう光景だ。朴とつな山本が「まあ・・何とかやってます」と答える。先輩たちとは全く違う行動に興味があるようだが、「おいしそうに食べてくれるよねえ」と目を細める。食事には苦労しているのだろう、先輩たちが残すと「気になってしまう」と眉をひそめる。話の端緒が出来たので「病み上がりと聞いたので・・・」とさりげなく切り出した。「ああ・・あれはね」といたずらっぽく笑う。

去年の夏休みにも和尚の知人の息子たちが受験勉強に来た、とのこと。顔色が曇った、思い出したくなかったのだろう、た

め息混じりに語り始めた。「初めはおとなしかったんだけど・・」「やたらに鐘を撞きまくり、太鼓を叩いて大騒ぎ・・障子は破るし」と、頬杖をついて湯呑みを回している。小西さんたちとは違う進学校で「見るからに真面目そうだったのよ」と、こちらを見つめる。何が言いたいか分かる。そしてキヨさんを窮地に追い込む事件が起きる。本堂にしまってあった、薙刀や刀を見つけ出しチャンバラを始めたのだ。どんな連中だったか想像出来る。同じ遊ぶにしても自分本位で見境が無く、他人の迷惑もお構いなし・・要するにガキの頃から遊びで鍛えられていないのだろう。頭から血が噴き出して大騒ぎに・・その前にも川に飛び込んで岩に顔をぶつけ血だらけになっている・・・が、今度は急を要する。応急処置をして村人に掛け合って何とか車を出してもらったと言う。その時のキヨさんの慌てふためくさまが頭をよぎる。樽見の病院までは２０キロ近く在る筈だ、しかもガードレールもない断崖絶壁の峠を越えなければならないのだ。悔しそうに語るキヨさんに口を挟めなかった。「車種はトラック？同乗したの？入院は？・・・」。和尚の連れて来た学生では強く注意も出来なかったろうし、馬鹿にして無視されたに違いない。面接した時のことを思い出した。初対面の我々に、キヨさんのことを「施設から連れて来て云々・・寺の下女として・・」等と見下して話す和尚のことだ、知り合いならばどんな言い回しをしているのか想像がつく。

キヨさんの心に重くのしかかったのは、村人の手を煩わせてしまい、そして村中から白い目で見られ罵声を浴びせられたことだった。しかも、血相を変えて飛んで来た和尚とその親からも村人の面前で叱責され、さらし者にされたのだ。フキンを掴んでいる指に力が入っている。唇がやや震えているが目に涙は無い。強い人だ、まだ屈辱に耐えている。

手作りの鯉のぼりが、軒下の竿に、てるてる坊主と一緒にぶら下がっている。どの窓も同じように、一匹だけではなく親子三匹揃っている・・・。同じ境遇の子供たちと楽しく暮らしていた施設に、一人のオジさんが入って来た。帽子を目深にかぶり眼鏡をかけているので表情が分からない。いつも偉そうにしている役人も一緒だが、小柄で背筋を伸ばしたオジさんには腰が低い。２０代後半の若き日の和尚だ。落ち着いていて頭が丸刈りなので歳よりも老けて見える。事務所で書類をめく

りながら、教官の説明を聞いて役人と何やら話し込んでいる。今度は誰が連れて行かれるのだろう、皆は分かっているのだ。「施設を出れば新しい親との幸せな生活が待っている・・」。そのように教官から聞かされている、だからいつも「お利巧さんにしてなければ選ばれないぞ・・」。だが新生活に馴染めず脱走して来たり、素行不良で連れ戻された仲間の話を聞けば、施設で成長していくのも幸せなことかも知れない・・と。しょっちゅう喧嘩はするが他人を見下したり弱い者いじめをする奴もいない。新しく入って来た小さな子が親を思い出して泣いていると、肩車をしてあげたり添い寝をして優しく抱いてあげる、キヨさんもそんな女の子だった。ガラス越しに三人がこちらを見て頷いている。「私の番だ」キヨさんは直感した。教官に呼ばれオジさんと対面、挨拶を交わす。何と言ったのだろう、全く馴染みのない名前？何？。ガラスの向こうから仲間がみている。小さい子はイスに乗って背伸びしている。羨望と惜別の眼差しが入り混じっている。オジさんはやや高慢なそぶりになって内ポケットから高級万年筆を取り出し、教官が差し出した紙いっぱいに大きく威厳のある文字を書いた。「玄暁」読める訳がない、一般の小学生より勉強は遅れている。特に国語は苦手だ。オジさんの口角が左側だけ微かに動く、キラッと光ったメガネの奥の眼差しは冷たい。そしてさらに「海蔵院清徳山願養寺　住職」と右側に書き足す。教官が口を出すのをためらっている。役人もさすがに呆れた様子だ。「げんぎょうです」読経で鍛えた声に威圧された。「これからは、げんぎょうさん、と呼びなさい・・・」

何も分からずに辺境の地、この越波に天涯孤独の僅か十歳の少女が連れて来られたのだ。
キヨさんは当時の事については詳しくは話さないし、こちらからも立ち入った事は聴かない。施設からのいきさつについても無言で頷いて、知らなかったふりをする。重い話だ。

その当時はどこから歩かされたのだろう、我々の比ではないに違いない。「お寺さんの子供になるんだ・・」未知の世界での生活をあれこれ聞かされ、名古屋とは比べ物にならない澄んだ空気、清らかな水に思いを寄せる・・・が、どこまで歩くのだろう・・・いつになったら着くの？すでに真っ暗だ・・・頼りない懐中電灯の灯りが足元を照らす。目に飛び込んで来るのは恐ろしい森の光景ばかりだ。耳を研ぎ澄ます・・和尚も口数が減ってきた

川の水音が近づいたり遠ざかったり・・・初めて聴くキジ・フクロウの鳴き声に怯える・・

番茶を足しながら、キヨさんは当時を振り返る。「遠かったわあ、あんなに歩いたこと無かったもの・・一人じゃ絶対に戻れないって分かったわよ・・」重い話だ。いたいけな子供が新天地への希望とは別に、この地で暮らす覚悟を決断したのだった。

和尚の家族構成は分からんが、本当に養女として迎え入れたのだろうか？村人にはどのように紹介したのか想像がつく。「身内の子供を引き取った・・」と紹介するならまだしも、「可哀相な子供を拾ってきた」みたいな言われ方では、この狭い同族意識の強い土地で、どんな目で見られていたのか想像出来る。階級社会に於いては、優秀な頭脳と正統な血筋が身分を保つ為には必要だが、そこには人間性や情などは存在しないのだろう。又、キヨさんにも本当の事を言わせたに違いない。「キヨ」と言う名前は「清徳」からとったのか？話しを続けるキヨさんの口が重くなって来た。溜息をついて目を閉じている。つらい思いが甦っているのだ。「寺の手伝いばかりでいっしょに遊べなくてね・・・親たちも、寺の子だから・・と、遠ざけていたみたいだし・・」当時は分校は在ったのだろうか？

越波に来て5日目だが、村人と寺の関係がうすうす分かってきた。ご先祖様の供養、自分たちの人生の終焉をやすらかに迎えるためには、なくてはならない存在だ。それ故、多額の寄進もするし備品なども大切にする。「思想」の世界「宗教観」が寺という形になっているのだが、仏事を取り仕切る住職は全くのよそ者だ。その家族も土地の住人が嫁がなければ、素性の知れないあかの他人なのである。日々、汗水を流して必死で暮らしている村人にしてみれば、たいして役にも立たない知識をひけらかし、偉そうに説教を垂れる住職に頭を下げるのは、しゃくにさわる、というものだ。崇高な聖職者であって欲しいと言う願望があるだけに、寺を見る目は厳しい。

自分が受けた和尚のイメージからすると、村人はあまりよい印象を持っていないようだ。尤もらしい理由をこねて村を見捨てて町へ行ってしまったと思っている。キヨさんには気の毒だが、うさばらしの標的にされたのだろう。３０年近く生活している訳だが和尚の家族とはいつまで一緒に暮らしたのだろうか？男と女の関係は？訊くわけにはいかないが、村人のあいだでは話題になった筈だ。

「だから・・ね・・今年も学生が来ると言われたから猛反対したのよ」生涯で初めて和尚に逆らったのだ。しかも涙を流して・・。さすがに和尚も、死を覚悟したようなキヨさんの訴えには負けたようだ。「そこまで言うなら・・しかたあるまい」取り合えず、あの「運動しか取り得のない高校の馬鹿ども」には速く知らせねば。プライドがあるのでそれらしい理由も必要だ・・。そして小西さんらと面会し、昨年の出来事を説明、了解を得ることに・・。同席した父親の県庁の課長も「そういうことなら・・・しょうがないだろう。二人とも楽しみにしていたのだが・・」。眉間に皺が寄る。優秀な息子の思いもよらぬ浪人生活だ、少しでも良い環境を作ってやりたい、しかも白井さんの親にも人脈を自慢してしまっている。こちらもプライドがかかっているのだ、「どうにかならんのかね」。和尚も相手の胸の内を読むのには長けている。「女中ごときに・・・去年の奴らは息子の高校よりランクは下だ」あきらかに無言の圧力をかけてきている。「まだ時間はあるし説得出来ると思うが・・」。

小西さん親子らが帰った後、飲み残しの冷めた輸入紅茶を飲みながら策を練る。首筋を蚊に喰われるが気にも掛けない。座卓のタバコの焦げ痕を見つめながら、名古屋の施設を思い出す。恵まれない環境から救い出してやった少女が、３０年の時を経て、この俺に逆らっている。何故だ！出自には一点の曇りも無いし、宗門での地位も申し分ない。郷土史を編纂し地元の名士でもある。知識人の階層とは付き合いが広い。身内には学習院の卒業生もいる・・・。

女房も含め村の女衆にも頼めるわけがない。屈辱だが、キヨさんに頭を下げるしかないのだ。自分さえも喰ったことが無い高級な菓子を持って行って機嫌をとることにした。が、手強い。

間を置かずに再び車を飛ばす。「今度の学生は浪人生だから本当に勉強をしにくるだけだ」
「心配だから刀剣などはみんな持って帰る・・会ってみたが真面目なのは間違いない、俺が保障する」そしてこれ以上無い譲歩案を口にした「今年で最後にする、もうキヨには迷惑をかけない」。あの「げんぎょうさん」が頭を下げている、チョッと哀れっぽくも見えるが気分が良い。キヨさんも納得しかけた。

「ただ・・」と、和尚が伏せ目がちに口を開いた。キヨさんが身構えた。「あと二人、修行したいと言う高校生がおっての・・」。耳を疑った・・「今時、修行！」ここら辺に滝なんぞは無い。「どうしようもない馬鹿か？」しかも素性も分からんと言う。振り回される光景が頭を巡る。断食するのなら食事の心配はないが・・・。経緯を聞くと「いきなり手紙をもらった」とのこと。

一通の手紙を思い出した。そのほとんどが「ご住職、あるいは玄暁殿」と書いてくるのに
それには「願養寺様」と書いてあって配達のおネエさんが「珍しいね」と渡してくれたのだ。心配事が興味に変わった。どんな少年たちなのだろう・・・。「分かりました」和尚に頭を下げた。拍子抜けした面持ちだが、すぐに安堵の色が浮かぶ・・・。梅雨空を見上げながら晴々とした表情でセドリックに乗り込むと軽快に走り出した。車の中では笑いが止まらない、この数日間の悩みが嘘のようだ。県庁の課長には電話を、あの馬鹿らにも手紙を出そう。もったいないが速達にするか・・・。

想像した内容ではなかったが、あの「仮病」はキヨさんの壮絶すぎる人生そのものだったのだ。笑顔に戻ったキヨさんが口を開く、「二人に会えて良かった・・何か予感がしたのよ」

礼を言って本堂に戻る。山本が大きく溜息をついた・・同じ事を考えているに違いない。
「和尚は何の為にキヨさんを連れて来たのだろうか？」山本が回廊に出て階段に腰を下ろした。「地元や県内でも施設は在

るだろうに・・・何故、遠い名古屋から？」僧侶の立場を利用すれば戸籍を調べるのは難しい事ではないだろうし、天武天皇の勅願寺の住職ともなれば公安並に何代も前まで遡って調査出来る筈だ。二人を結ぶ点と線とは・・・？。

二人とも昨日の騒動が吹っ飛んでしまった。山本はインキンの痒みなど忘れてしまったようだ、自分もだるさが消えている。交代で便所へ行く。書斎から先輩の声が漏れて来る。英語の短文を繰り返し読んで頭に叩き込んでいるのだが、同じ箇所で何度もつかえている・・。「大丈夫か！東大」

子供らが遊びに来ない。昨日の拝殿事件があったので親から禁止されているのだろう。蒸し暑いので障子を全部開けっぱなしにする。すぐにギンヤンマと虻が入って来た。遅れてスズメバチも我が物顔で旋回している。妙なもので憎悪よりも親近感を覚える。トカゲが入って来たが、スズメバチの羽音に気づいたのかすぐに帰って行った。覗いて見ると敷居と回廊の合わせ目に隙間があり、そこから尻尾が引っ込んだ。階段を昇って来るのは大変だろうと思っていたが、何のことはない本堂に住み着いていたのだ。

つまらん疑問でも答えが出るのは気分が良いものだ。流れに乗って苦手な物理に挑戦するが原理原則を理解していないので、糸口がつかめない。同級生の細江の顔が浮かぶ・・。授業中はバイト疲れで殆んど寝ているのだが、物理だけは学年で1・2番を争う頭脳だ。

国立2期校を狙っている山本も一目置いている。飛騨から出て来て岐阜の市内に下宿しているのだが、奨学金をパチンコにつぎ込み僅か3ヶ月でプロ級の腕前に・・・。台の傾きと釘の角度を瞬時に計算、打ち出す玉の放物線を関数で割り出せれば負ける事は無いらしい。一度、常連だと言う店に打ちに行った時に相当混んでいたので帰ろうとしたら、従業員が細江を見つけ事務所へ連れて行く。二人で中に入ると、恰幅のよい韓国人のオーナーが笑顔で細江に小遣いを渡した。「さくら打ち」でもしているのか、たいしたもんだ・・・。

卒業後に、短期間で耳を揃えて奨学金をたたき返したが、まさか博打の稼ぎで返済するとは、育英会も思っていなかったろ

う。

気が付くとギンヤンマだけが飛んでいる。蚊でも捕食しているのだろうか。外を眺めていると郵便配達のおネエさんが山門に現れた。そんな時間なのか、もうすぐ昼だ。寺宛ての郵便物は無いので入っては来ない。ポストも空のようだ。笑顔で手を振って参道に消えて行った。職業柄、いろんな事を見聞きしているだろうから、機会があれば話を聞いてみたい。山本はインキンの悩みから解放されたのか、一心にペンを走らせている。自分も物理は諦めて漢文を書き写す。貧弱な思考回路よりも記憶力を強化した方が良さそうだ。

美智江と直実

「わあ・・大きなお寺！」振り向くと、女の子が二人並んで山門に立っている。いや娘だ。
あどけない表情で幼さも残っている。中学生か？身なりからして地元の娘ではないようだ。昨日の毒がまだ残っていて幻を見ているのだろうか？いや、山本も顔を上げて見ている。石畳をこちらへ歩いて来るが、よく見ると・・「キツネとタヌキ」が化けているのに違いない。丸顔に目は二重、片方は細面でキリッとした目をしている。この際、爬虫類よりましだ。「コン子とポン子」に騙されたふりをしてやるか・・・。

二人ともが興味深そうに周りを見渡しながら近づいて来た。「池があるっ！」満面の笑みだ。
「キャアーッ！蛇！！」。as soon as 左手は回廊の欄干にかかっている！階段脇の石の上に身を翻して飛び降りた。まるで平行棒のフィニッシュだ。９点第は間違いない。しかも右手には床下から引き抜いた薪を握っている。茂みの中のシマヘビ

と目が合った。尻尾をいつもの石の上にたらしている。派手なアクションでそこら辺を叩く。阿吽の呼吸だ・・・ゆっくりと尻尾を引っ込めた。「きっかけを作ってあげたのよ・・」身をくねらせて床下に帰って行った。

二人は？と見ると山門まで逃げている。肩を寄せて両手のこぶしを口の前に置いてこちらを見ている。やばい！男殺しのしぐさだ。女はいつから身につけるのだろう不思議だ。

顔を見合わせて肩で笑っている。印象は良かった筈だが・・山門から去って行ってしまった。ん！山本はどうした？階段を上って本堂へ・・期待通りの光景が繰りひろげられていた。頭をかかえてうずくまっている。３度目だ、呆れるほか無い。思い切り笑った。

キヨさんが迎えに来るまで「長恨歌」を書き写す。山本の独り言が聞こえる。暗記しているわりには顔に締まりがない。ついに頭がいかれたか？いや、身を乗り出して誰かと喋っている。背中越しに境内を覗くと、何と先程の二人が回廊越しに山本と話しているではないか。イカン！先を越された。すぐに駆け寄る・・いや自然体を装おわねば、それに話に割り込むのは顰蹙を買うというものだ。運ぶ足に乱れは無い、欄間の間から顔が見えた。なかなか可愛いい、うまく化けたもんだ。

ドゴッ！・・・真っ暗だ・・・やはり昨日の夢の続きだ・・。今度は何が出て来るのか？いや、土の匂いがする。青春の汗を流したグランドにうつ伏せに倒れているのだ。「大丈夫

か！」加藤の声だ「悪い！止まれなかった」。謝ってはいるが声は笑っている、とんでもない奴だ。エースストライカーだけに我が強い・・。思い出した、県大会を前に「コーナーキック」の練習をしていたのだ。確かに、顎をひいてジャンプ・・ボールの芯にヘディング・・した筈だったが、後ろから馬力のある加藤に跳び蹴りを喰らい、木製のゴールポストに激突したのだった。軽い脳震盪だけに気分は悪くないが、誰も心配などしていない。ポジションを狙っている後輩は期待に声が弾んでいる。冷たい奴らだ・・・。

「どうか・・したんですか？」優しい声に現実に引き戻された。今までに経験した事の無い天使のささやきだ。「アホが太鼓のへりに頭をぶっつけたんだよ」勝ち誇った山本の声だ。無理も無い、最高の形での大逆転だ。起き上がったときには二人はすでに山門へ向かっている。楽しそうに笑いながら・・。そうか！向こうには蛇がいたので山本の方へ来たのだ。「昼ごはんが済んだら宿題を教えて欲しい」と言われたそうだ。「心配しないでお前は寝てろ」いつになく強気だ。「食事にしましょう」キヨさんが入って来た。「あの子たちは
鐘突き堂の下の家に来てるのよ」。息子夫婦が山を降りて岐阜の市内で燃料屋をやっていて週に一度、村人に頼まれた食料や衣類などの日用品を搬入、帰りには炭や薪を積んで戻るとのこと。たまに五月の連休や夏休みに客先や知人の子供たちを遊びに連れて来るらしい。

川魚の煮付けだ。さすが清流で育っているだけあって泥くささが無く美味い。昨日の拝殿騒動のお詫びにと、孫と一緒に夕方、蛇池で捕った魚をキヨさんに届けてくれたとのこと。
朝方にキヨさんの話を聞いているだけに、村人からの謝礼に嬉しそうな顔が目に浮かぶ。

若い娘の絶叫は、さすがに小西さんたちにも聞こえていたようで、山本の自慢話に耳を傾ける。
「中学生に宿題を教える」と聞いて目の色が変わった。「勉強は俺たちに任せろ」顔に書いてある。・・が、プライドがあるので口が裂けても言えない。味噌汁をすすりながら己の身を嘆いている「同じ屋根の下にいながら、あいつらは毎日楽し

そうだ、それに比べて・・。」

この際、タヌキだろうがキツネだろうが贅沢は言うまい、哺乳類には間違いないのだ。いつになく速めに飯をかき込んで席を立つ。先輩らの羨望の眼差しが背中を射抜く。キヨさんは優しく笑っている。口を漱いで身だしなみを整え本堂で作戦会議を始める。まずは机を真ん中に並べることに、向かい合って教えるかそれとも並んでしようか。障子は全て開放して下の家からも見えるようにする。いらぬ誤解は受けたくない。まさか、こんなに楽しいことが起きるとは、今までの苦労？が報われたようだ。理数系は山本が担当「遊びはお前に任せる」と主導権を誇示する。しかたがない、学力では勝てないのは分かっている。そして「トカゲに出て来ないように言っとけ！」厳しい口調での指令が出た。

程なくして二人が現れた。ノートを胸に抱いている。恥ずかしそうに体を寄せながら階段を上がって来た。「こんにちは」やや首を傾けペコリと頭を下げる、まるで少女漫画を見ているようだ。「い、いらっさい ど、どんぞ」舞い上がっているのか山本の声が上ずっている。自分は冷静に考えている。初対面の年上の、それもどこにでも転がっているような顔の男らに「勉強を教えて欲しい」等と考えるだろうか？この４日間の生活ぶりは村中に伝わっているだろうから下の家も例外ではない。子供らの相手をしているのも見ている筈だから印象が良かったのか？キヨさんや郵便配達のおネエさんから情報を得ているのかも・・。

とにかく自己紹介を始める。二人とも岐阜市内の繁華街に近い中学校の２年生だ。４歳年下か・・自分らは妹がいないので距離感が掴めない。美智江は物おじしない表情で喋る、恐らく兄がいるのだろう。直実は、ややはにかみながら顔を赤らめているが瞳は輝いている。我々も、何故「越波」に来たのか面白おかしく説明しながら自己紹介をする。何を言ってもケラケラ笑っている。緊張の糸がほぐれたようだ。歌が大好きな同級生でコーラス部に入っているという。少女が娘に変身を遂げる時期なのだろう、危ういが透明感に満ちた色気を漂わせている。彼女たちも、この辺境の地での思わぬ出会いに感情を昂ぶらせているのだろうか？想像もしなかった展開だけにとまどうばかりだ。

思わず自分の過去を振り返る・・・今でもそうだが、こんな女友達がいれば、自分も情緒溢れる憂いを含んだ男になっていたかも知れぬ。周りにいるのは、丈夫だけが取り得の女ばかりだ。大口を開けて馬鹿笑い、屁をこいても平然と笑い飛ばし人のせいにする・・情無い。いつぞやは、昼休みに正面玄関の屋根に2階の教室から降りて弁当を食っていた。1階の校長室の花壇には剪定された松の木が立っているので見えないと思っているのだ。最後尾の窓が1枚だけ屋根の上に位置しているのだが胸の高さはある。運動部とは言え前向きに飛び降りるには度胸がいる、後ろ向きに腕を支えられながら降りているがパンツが丸見えだ。小さなフリルがかろうじて純情さを残している・・・嗚呼。一首、詠めり「見上げれば 二階の窓に白妙の 下着くいこむ 我が友の足」

予想通り数学と英語の宿題を持っている。山本はすでに教壇に立ったつもりでいるらしいが実習に望む新米教師のように教え方がぎこちない。それでも、郡部の中学校とはいえトップだっただけあってポイントを的確に突いている。横からチャチを入れないで「なるほど、そこは大事だ」等とあいづちを入れてやる。方程式に集中している間に、感想文のノートを見せてもらう、恥ずかしがらない訳だ、二人ともきれいな字を書く。頭も良さそうだ。ひらがなを確認する「ぬ、ね、る・・」きれいに丸まっている。やはり人間なのだろうか、一人でニヤニヤしていると「おかしい・・ですか？」二人とも手を止めてこちらを見つめている。「さっき頭をぶっつけたのでネジが緩んだんじゃないか？」山本が思い切り蔑む。ひどい奴だ、男の友情も女が絡むと、あっけなく壊れることを思い知る。

小西さんがトイレへ行くふりをして廊下に出てはこちらを見ている。気になって仕方ないようだ。顔だけでも見たいのだろう。想定はしていたので背中しか見えないように座らせている。もっともそのうち何たら理由を付けて見に来ることは分かっている。

キヨさんがおやつを運んで来る、絶妙のタイミングだ。2時間も集中したので、宿題もそこそこ片付いた。彼女たちも勉強

だけを教えてもらいに来た訳では無い。楽しい時間を過ごしたい筈だ。麦茶とせんべいがキヨさんの気持ちを表している。書斎に碁盤が置いてあるというので取りに行く。二手に分かれて五目並べに興じる。もちろん相手を取替えながらだ。「勉強は止めちゃったの・・？」ばつ悪そうに小西さんが入って来た。村の子供らもそうだが彼女たちも「とっつきにくい」イメージを持ったようだ。居心地が悪かったのだろう「じゃあ・・」と言って戻って行った。

トランプはおろか花札も持って来ていない。こんな時は「しりとり」が一番の時間潰しだ。
もちろん彼女たちの得意分野である歌の題名や作曲家、歌手の名前などで花を持たせる。そして、自分の十八番のくだらない与太話と情けない失敗談に腹を抱えて笑っている。夕暮れが迫ってきた。先輩らが「暮れ六つ」の鐘を撞き始めた。感情がもろに表れているのか、いつもより余韻が短い。彼女らも帰る時間だ。半日だったが相手をしてもらったのが嬉しかったようで、寂しそうに「ありがとうございました」と声を揃える。階段の途中で振り返り「夕食が済んだら来ていいですか？」思いもよらぬ言葉だ。もちろんＯＫを出す。

気まずい空気が流れる夕食だ。先輩らもプライドがあるので、あえて話題にはしない。「中学２年生は難しい年頃ですね」などとこちらから話を振る。「まだ子供だもんなあ」と答えるが、つまらなそうに飯を食い早々に部屋へ引っ込んでしまった。キヨさんに事情を話す。「気に入られたんだね、よかったじゃない」喜んでいる。まずは風呂だ、１０分程のカラスの行水で本堂へ戻る。「まさか宿題は持って来ないだろう、話の続きが聴きたいのか？」
この雰囲気では「怪談話」が一番だが・・彼女たちの恋愛話でも聴いてやるか。

キヨさんがブタの蚊取り線香と、お盆にスイカを４切れ載せて持って来てくれた。何のことはない、キヨさんが一番喜んでいる。団扇を４枚並べてニコニコしながら庫裡へ戻って行った。回廊に座って二人を待つことに・・ドラマにでも出て来るような光景ではないか。
下の家の戸が開いたようだ、下駄の音が参道を上がって来る・・ん、一人だ、しかも婆さんだ。「書生さんたちは遊びに来

ているんじゃないのよ・・と強く言ってやりましたから」
何という結末だ・・が、しかたあるまい、よそ様の娘を預かっているのだ、何かあってからでは遅い。正しい判断だ。「泣いていましたけど、朝早く帰ってしまうので、鐘を一緒に撞いてやって下さい」申し訳なさそうに頭をさげて帰って行った。放心状態でスイカにかぶりつく・・夜空に星が煌めいている。こんな体験も悪くはない、立ち上がろうとした時、風呂に入っているのだろう湯を掛け合う音に混じって歌声が流れて来た。コーラス部だけあってよく通る声だ。唱歌、歌謡曲、ポップスと次々に流れて来る。彼女たちが、思いを歌に込めているのだろうか?こんな山の中で切ない気持ちになるとは・・・。突然の歌声に村人は驚いているに違いない。一時間近く歌って静寂が戻った。間をおいて「おやすみなさい」こちらも照れながら「おやすみ!」と返す。何のことはない遊ばれている。

普段よりも早く起きる。障子を開けると、彼女たちもすぐに山門に現れた。一緒に「明け六つ」の鐘を撞く。そして記念撮影、住所を教え合う。下の家から人が動く気配がする。別れが近づいたようだ。すると「私たちの歌を聴いて下さい」輪唱を始めた。物怖じしない娘たちだ。「静かな湖畔の森の影から・・・」山本が聴きたかった曲だ、続いて「カエルの歌が聞こえてくるよ・・」いやな予感がする。耳を澄ますと、微かにだがカエルの女房も歌っている、この際黙っていよう、雰囲気が台無しになってしまう。

車のエンジンがかかった。一緒に参道を降りる、おやじさんに挨拶をする。「無理を言ったみたいで悪かったね」笑顔で応えてくれる。彼女たちはもう泣いている。車に乗りたがらないので婆さんに睨まれている。気のいいおやじさんだ、車をゆっくりと走らせて手を振らせている。やがてカーブを曲がると姿が見えなくなった・・・。

「迷惑かけたね・・帰りたくないっ！て夕べ泣いてたのよ」婆さんが続ける。「今まで何人も来たけど・・初めてだね・・今朝もずいぶん早くから起きていたんだよ」。人里離れた山の中での思いがけない出会いが彼女たちを、より感傷的にしたようだ。自分らも楽しい時を過ごせたが、やや気持ちは重い。「ありがとうね」婆さんが頭を下げた。キヨさんがいつの間にか降りて来ている。「いい子たちだったね・・」

何とも言えない感情に包まれながら掃除を始める。二人とも無言だ・・・。それでも拭き掃除を終える頃には現実に引き戻されている。「・・まったく・・振り回されちまった・・」
だが「あの透き通る歌声は・・忘れられんな・・」阿弥陀仏に厚く礼を言う。さあ朝飯だ。

「行っちゃったね・・」小西さんがからかい気味に切り出す。住所を教えると「どこかで会えるかも知れんなあ」どうやら家が近所らしい。ポイントを稼いだつもりなのか笑みがこぼれている。こちらも気を使わずに飯が食えるので、軽い冗談も交えて話がはずむ。

「なんて歌がうまいんだろうね」と、キヨさん。「まさかシルヴィ-バルタンが聴けるとは・・・」先輩たちもラジオ講座を消して聴き入っていたとのこと。何のことはない、昨夜は彼女らの野外ライブだったのだ。森の動物たちや八幡神社に棲む魑魅魍魎、墓場の自縛霊までも魂を揺さぶられたに違いない。お盆を前に、出番の準備をしていた有象無象の亡霊たちも出鼻をくじかれただろう。

本堂に戻って昨日からの出来事を振り返る。「フィルムはちゃんと入っているだろうな！」
山本も記録を残したいらしい。こんな体験談は友人らに話しても信じる奴はいないだろう。
ましてや普段から冗談半分で世の中を渡り歩いている自分が、身振り手振りで伝えても、親でさえ鼻で笑うのは目にみえている。今頃、彼女たちは家に着いた頃だろうか・・・。
友達には羨ましがられ、親がハラハラしている姿が目に浮かぶ・・・。「頭がいいゴリラとオッチョコチョイの猿がいてね・・面白かった！」てな事を楽しそうに話しているんだろう・・・まあいいか、お互いさまだ。

それにしても・・越波は予想をはるかに超えた別世界だ。すでに6日目を迎えたが下界の情報は全く入って来ない。同級生や家族のことも頭をかすめることはない。なにしろ越波そのものが映画のセットみたいなものだ、登場人物や鳥、虫たちがそれぞれの役割をきっちりとこなしている。その中にいる自分たちも、台本を与えられてはいないが端役を演じさせて貰っているのだ。楽しくない訳がない。特別変わった事がなくても、澄んだ空気と
景色を眺めているだけで幸せな気分が満ちてくる。

陽が傾き掛けた頃、小西さんが首にタオルを巻いて庫裡から出てきた。昼飯を食いながら
「少し運動をしないと・・・」と話していたが、本当に実行に移すようだ。「初日だから橋まで軽く走って来るよ」日課に

するようだ。参道を下りて見送る。運動部の経験者ではないので走り方がぎこちない。歩幅が狭すぎる・・。彼女らの出現が心境に変化をもたらしたのだろうか？

落ち着いた雰囲気の中で夕食が始まった。「明日、蛇池に釣りに行こうよ」小西さんが提案する。走りながらあちこちを探索して来たようだ。キヨさんは、やや驚いた表情で小西さんにおかわりをよそっている。同年代の少年が寝食を共にしているのに、片方は環境の整った書斎でラジオを聴きながら勉強、方やもう一方は、ムカデやトカゲが走り回っている本堂で生活している・・。4人の世話をしながら、昨年の事もたまに思い出すようだ。今年の少年らは面白い、残りの数日もこの越波を充分に楽しんで欲しい・・。

キヨさんの思い出話

風呂からあがると、キヨさんが麦茶を出してくれた。表情から、何か話しをしたいのだと分かる。昨日の朝に色々とうっぷんや愚痴を吐き出したので、気を許しているのだろう。

「私も昔・・好きな人がいてね・・」なんとキヨさんの恋愛話だ。やはり彼女らに影響を受けているのか・・。相手が村の男衆ならば、まず偏見と戦わなければならなかっただろう。下世話だが興味がわく。「学習院の大学生なの・・・」山本と顔を見合わせる・・・思いもよらぬ相手だ。和尚の弟の同級生とのこと。「越波に何度も遊びに来てくれて、惚れてしまったのよ」キヨさんが何歳の時なのか、あえて訊かなかったが6日目にして初めて見せた幸せな笑顔だ。村の人間ではない彼女らに自分の姿をだぶらせたのだろうか。

「夏休みに、玄暁さんの弟と一緒に来たのよ。都会育ちの優しい人でね・・」学習院の大学生というからには大体想像がつく。「ここが気に入ったみたいで何度も来たの・・」思い出しては楽しそうにニコニコしていたが、少し表情が暗くなる。何と化粧はおろか紅をひくこともさせて貰えなかったという。山の中とはいえ、同年代の年頃の娘たちは、それなりに着飾って流行の髪型を競っていただろうに・・。和尚やその家族はどんな考えでキヨさんと暮らしたのだろうか？推測だが、キヨさんに、炊事や家事全般を身に付けさせ寺女として、女中のように生活させていたのではなかろうか？でなければキヨさんを一人残して、越波を去る事など出来ようか、せめて寺男を連れてきて夫婦として庫裡に住まわせるだろうに・・。或いは、そのような事があったのかもしれないが、キヨさんに訊くわけにはいかない。

「山歩きが趣味で、来る度に近くの山を登っていたのよ」「東京に戻ると必ず御礼の手紙が来てね・・」そして寂しそうにつぶやいた。「私は簡単な字は読めるけど、人が読めるような字が書けないのよ。そのこともちゃんと知っていてくれてね・・」・・・言葉が出ない。
読み書きなど教えるのはそれこそ和尚の人としての務めではないか。

「初恋みたいなものが経験出来ただけでも、仏様に感謝しているのよ・・」そして「あの子たちも、きっと初恋をしたんだわ・・」自分のつらい過去を消し去って、他人のことながら、幸せを喜んでいる。なんて心の広い人なのだろう。山本と黙って聞き入った。

「潮ノ岬では南南東の風、風力・・」天気概況が、玉音放送を聴いたであろうラジオから流れていた・・・。

本堂に戻ると「何だかなあ・・・」どちらからともなく重い口を開く。「とんでもない所に来ちまったのか・・・」。初めて岐阜の出張所で会った時の和尚を思い出す。「今までに出会ったた事の無い類の人間とは思っていたが・・」。火災により明治に再建されたこの願養寺は、どれだけの人生の一部始終を見つめてきたのだろうか。爽やかな春風のように消え去っ

た彼女たちは稀な存在だろう。その殆んどは、ごく普通の村人らの喜怒哀楽に満ちた日常の生活に違いない。しかしここは平家の落人の菩提寺なのだ。数百年前から脈々と受け継がれている因習や、奉られている白竜への信仰心は、本堂が焼け落ちても消し去ることなどは出来なかったのでは・・。

和尚もキヨさんもそして自分らも、その決して止まる事のない歴史の流れに身を漂わせているのだろうか？僅か６日間で、想像を超える出来事が次々に起こっている。村人に知り合いがいて、その家に泊まったのでは体験出来なかった事ばかりだ。寺という特殊な世界に身を置いたからこそなのだろう・・あと６日間か・・時の流れが早すぎる・・。

蛇池へ

ごく普通の一日が始まった。鐘を突き、掃除を終えると楽しい朝食が待っている。何はともあれ、食事の心配をすることがないのは最高の喜びだ。キヨさんは表情がすっかり変わってしまった。小西さんたちにもはっきりとした態度で物を言っている。自分の身の上や恋愛話し等、今まで誰にも話したことがなかったのだろう。いや話相手が一人もいなかったのだ。肩の荷を降ろし胸のつかえがとれたのだろうか。はつらつと動き回っている。「釣り道具は借りてあるからね」下の家の婆さんが喜んで貸してくれたとのこと。午前中はとりあえず机に向かい、昼飯の後で蛇池に行くことにした。先輩も計画を立てた手前、我々が同行するのが嬉しいようだ。釣果を期待するなら上流の堰堤が良いのだが、藪が深いので下りるのは大変だ。蛇池ならば淵もあるし、遊ぶにはもってこいだ。

郵便局員のおネエさんが何通もの手紙をポストから集めている。目が合ったので山本と二人で近寄って話しかけると「お盆

が近づいてきたので連絡が増えるのよ」と教えてくれた。彼女らのことを得意げに話すと「良かったねえ・・私も聴きたかったわ」笑って答えてくれた。柔らかな表情に気持ちが和む。会う人たちは優しい人たちばかりだ。住人がどんどん越波から居なくなっていくので、外部の人間に暖かく接するのかも知れない。

遠足に行く子供のように昼飯を食うのももどかしい。気持ちだけが先走っている。キヨさんが草餅や菓子を詰めた袋を用意してくれ、４人揃って釣竿をかついで山門を出る。下の家の婆さんに声をかけると「虻が多いから必ず焚き火をするのよ」と教えてくれる。彼女らのおかげで一気に距離が縮んだようだ。知人が一人も居ない地域に来て、住人たちとの交流はどのような形で実現するのか考えもしたが、やはり成るようにしか成らないもんだ。

歩きながら話がはずむ。キヨさんについては何も知らないようだし、いきさつにも興味は無いようなので、こちらも話さない。去年の騒動は聞かされていて「とにかく真面目に勉強に専念しろ」と強く言われたとのこと。二人とも「二浪はさせてくれないだろうな」と
口を揃える。我々のことは知らされておらず、来る途中に初めて和尚から車の中で聞かされたとのこと。「でかい方は無口で頭が良さそうだが、背の低い方はアホ丸出しでよく喋る・・小ざかしい奴だ」運転をしながら周囲を見渡している。「今のバスに乗るように手紙に書いたのだが・・おらんな・・」「時間に遅れたのか、馬鹿だから行き先を間違えたのか・・・」
「ひょっとしたら、崖から落ちたかも知れん・・・まあいいか親の顔も知らんし・・」

ご飯つぶの餌ではなかなか当たりが来ないので、河原の石をひっくり返して川虫を捕まえる。さすがに鮎はかからないが、ハヤやドンコは数匹釣れた。何度も針が引っかかるので潜って外すが、水から顔を出すたびに虻が襲って来る。急いで焚き火にあたるが、何が虻を引き寄せるのだろうか？肌が濡れることによって生じる体臭などに、吸血昆虫の神経が研ぎ澄まされるのかも知れない。

小西さんたちは、釣りはどうでもよく、一緒に遊ぶのが目的だったようだ。昨晩、話が出た時から山本とは「小西さんらもそろそろ生き抜きがしたいんだろうな」と理解している。身近に東大を目指している人間はいなかったが、勉強が出来ると言う事は苦労も多そうだ・・・無邪気に竿を振り回している姿を見ていると、ホッとする反面、気の毒にも思えてくる。

家庭環境もそうだが、子供の頃はどんな生活をしていたのだろうか？親が医者や上級公務員ならば、遊ぶ時間や友達も自由に選べなかったのに違いない。それに比べれば自分の周りには山本や細江の他は優秀な奴は少ないが、楽しい奴らばかりだ。小学生の頃から昆虫、特に「蛾」の研究に没頭し名和昆虫博物館の名和博士も舌を巻いた鷲見、弱いクラブなのにプライドばかり高い奴らの中で一人意地を貫き通したバスケ部の野澤など自慢出来る友人もいれば、酒屋の道楽息子やトヨタの代理店のドラ息子など、絵に描いたような馬鹿息子もいる。よかった、親に期待された事は一度も無い。

蛇池（じゃいけ）の由来はどこから来ているのだろうか？見たところ河原が広がっているだけなのだが、昔は大雨が降ると池のようになって、山から土砂と一緒に沢山の蛇が流されて来て、うようよしていたのかも知れん。キヨさんも西村先生も地元の人間ではないので、詳しい事は知らないようだが、それほど興味も無いようだ。子供らにも聞いたが何を言っているのかさっぱり分からん。

釣りをしたり潜って蟹を捕まえて遊ぶ。焚き火を囲んで草餅を食いながら取り留めの無い話で盛り上がるが、陽が傾き始めた。気が付いたが人も車も全く見かけない。帰り仕度をしながら、白井さんが「寂しさを通り越して不気味だよなあ」と口にする。ヒグラシの鳴き声がこんなにあてはまる光景は他にあるまい・・・。

晩飯のおかずは釣った焼き魚だ。先輩らもおかわりをするようになった。キヨさんも楽しそうだ。水に浸かったせいか心地良い疲れが出てきた。風呂からあがると二人とも朝まで爆睡した・・・。

イサム登場

8日目は静かに時間が流れて行く・・。先輩たちも昨日たっぷり遊んだので、気持ちを切り替えて机に向かっているようだ。分校の校庭で遊んでいる子供らの声が聞こえる。親に寺には行かないように言われているようだから、こちらから出向いて遊んでやろう。山本も賛成している。

昼下がりに老夫婦であろう二人連れが山門から入って来た。「立派な寺だ・・・」会釈しながら本堂に上がって来る。阿弥陀仏に手を合わせて何やら呟いている。無視する他あるまい。山本も知らん顔を決め込んでいる。しばらくして向こうから話かけて来た。友人が大河原に帰ると言うので一緒に車で大垣から来たとのこと。由緒ある願養寺を一度お参りしたかったのだそうだ。我々をどう思ったかは知らんが、参道に消えるまで二度振り返って合掌していた。

夕食時にキヨさんに老夫婦のことを話すと「檀家筋の人は庫裡にも寄るけどね、たまに寺巡りの人も来るのよ なかなか歩いては来れないけれど・・」。札所巡りについては、よく知らないがよほどの健脚でなければこの越波まで来るのは年配者には厳しい筈だ。台所の風景がいつもと違うことに気づく。蒸篭や大きめの鍋釜が、包んでいた新聞紙からのぞいている。年に一度の最大行事、お盆が近づいて来たのでその準備に入ったのだ。キヨさんが、てんてこ舞いの大車輪で動き回る姿が目に浮かぶ。「明日は、かまどの掃除とマキを多目に割ります」と切り出す。小西さんも「積んである薪を切り揃えるよ」と手伝いたくてしかたがないようだ。「ありがとう、お願いね」キヨさんが嬉しそうにうなずいた。

9日目の朝だ。やや蒸暑い、お盆が近いことを実感する。12日にはこの越波を去らねばならない。今日を入れて3日間しかないのか？勉強などしてる場合ではない。村の事をもっと知りたい・・・。拭き掃除は汗だくだ、山本もシャツを脱いでいる。洗濯はいつも風呂に入った時に済ませるが、朝飯の前に洗ってしまうことにする。飯を食いながら計画を練る。「午後からでいいわよ」キヨさんが気を使っている。子供らが午前中はおとなしく家にいるのだと言う。小西さんたちには勉強

もして欲しいのだろう。

あまり身は入らぬが、漢文を読んでいると時が経つのを忘れる。珍しくトカゲが顔を出した。幻想を思い出すと笑えるが、よく見ると愛嬌のある顔をしている。山本が「連れて帰るかあっ？」と大声で笑っている。

山門から郵便局のおネエさんと下の家の婆さんの話し声が聞こえる。何通か手にしておネエさんがこちらに向かって来る。庫裡に入ってキヨさんと麦茶でも飲んでいるのだろう、

しばらくして出てきたがハガキをヒラヒラさせている。いたずらっぽい目をしながらニコニコして階段を上がって来た。「来たわよ・・・ラブレター・・・が！」山本と廻廊に並んで正座する。おネエさんは一段下がって腰を下ろし、笑いながら手渡す「ハイッ！声を出して読んでね・・」彼女たちから、まさかの手紙だ。「素敵なお兄様たちへ・・・とても・・」

「ヒューヒューッ！」おネエさんが顔をやや赤らめて冷やかす。読んでる自分も半分照れる。覗き込んでいた山本が後半を読む。「・・・絶対、絶対、写真送って下さいね・・」

「青春・・だねえ・・」大きな溜息をついておネエさんが立ち上がり、スキップしながら山門へ。楽しそうだ、まだ冷やかしている。声には出さないが「ごちそうさま！」わざとらしく首を傾けて参道へ消えた。歌声を思い出しながら読み返す「山に棲んでる妖怪じゃないですよね？」泣いている彼女らに見かねたオヤジさんが「時々、姿を変えて現れるらしい・・」車の中の光景が目に浮かぶ・・・。面白いオヤジさんだ、黒津を過ぎる頃には彼女らも笑顔に戻って、歌い続けたことだろう。通いなれた山道とはいえ、横に泣き止まぬ娘二人を乗せて、あの峠を越えるのは気が滅入るに違いない。

昼飯はボリュームたっぷりのカレーライスだ、午後の労働を期待されているのが分かる。台所には食器類の入った木箱が並んでいる。洗うだけでも大変だ。食後のお茶もそこそこに庭に出る。庫裡の軒下や本堂の床下から切り株や薪を引っ張り出して作業を始める。力のいる薪割りは我々が受け持つ。先輩たちは、ぎこちない手つきながらもノコギリで伐採した枝木を

切っている。一昨日、釣りに行った時もそうだが、外で汗を流して熱中しているのを見ると、何か吹っ切れたのでは？山本も同じように感じている。

陽が傾き始めた、キヨさんが廻廊の欄干に並べた座布団や布団を取り込んでいる。「お茶にするからね！」マキを片付け始めるが４人で手分けするので、まとめるのも早い。

「さぼってないで、ちゃんとやれっ！」声の方を振り向くと、１２～３才の生意気な目をした子供がこちらへ歩いて来た。縄張りに入って来た見ず知らずの人間の力量と反応を確かめる態度だ。先輩たちの顔が曇る。苦手なタイプなのだろうが、我々にとっては最も好ましい相手だ。「あぶねえから向こうへ行ってろッ！」山本がマキを放り投げる。「当たらねえよ！」大げさに避けながらおどけている。「あらっ　お帰りなさい一番のりだね」キヨさんが麦茶を運んで来た。参道の左の川辺家の子供とのこと。「俺のはねえのかよっ」減らず口をたたいている。「いいから何か食い物を家から持って来い！」と命令すると「へんっ！」ふくれて帰って行った。イサムという６年生で思った通り甘えん坊の末っ子だ。

先輩が「もう来ないかな？」心配はしていないが、我々の対応に気をもんでいる。「なあに家にいても邪魔だし仲間もまだ帰って来ないから、又来ますよ」。しばらくして、何やら紙袋に入れて戻って来た。「母ちゃんが持ってけってさ」小ぶりだが、みずみずしい桃が６個出て来た。「なんだ、お前の分もあるのか？」山本がからかう。「あたりまえだろ！」虚勢を張っているが、相手をしてもらって喜んでいる。廻廊に座りキヨさんを囲んで、やや硬めの皮を剥く。食っている間に、車が２台通り過ぎた。そういえば昼前から、村のあちこちで、釘を引き抜く音や戸板を片付ける音が聞こえていたが、この越波は何年前の姿に戻るのだろう？空き家全てに灯がともるのだろうか？「帰って来ない家もあるからねえ・・」キヨさんが呟く。ゴミを片付けながら川辺家へお礼を言いに行っている。

イサムは自分だけしか帰って来ていないので心配そうだ。みんなが待っているところに迎えて貰うのが理想なのだが、この一日～二日のずれが子供らの再会に、喜びと不安を与えているのだ。それにしても、いつごろから毎年繰り返されているの

だろう。陸の孤島、辺境の過疎の集落、取り残される老人たち・・・そんな情報しか知らなかったが、子供らにとって年に一度の心躍らせる再会は、目の前にいるイサムと接していなければ感じることなど出来なかった。小西さんらが「暮れ六つ」の鐘を撞きに行く、イサムも一緒だ。その間にも2台、3台と車が登って行く。行き先を確かめていたイサムが跳び上がって喜んでいる。

まだ片付けの済んでいない居間で夕食が始まる。「5月の連休に帰って来れなかった家は、掃除が大変なのよ・・」キヨさんの表情が引き締まっている。明日からの一週間は、キヨさんにとっては、主役に躍り出る大舞台なのだろう。本堂に戻って廻廊に腰を下ろす。車が次々に家路を急ぐ・・自分たちが村を去る日が近づいてきている・・・。

布団に入り、一日を振り返る。もちろん彼女らの葉書が今日一番の出来事だ。「まったく・・若いっていうのは怖いもの無しか・・」二人とも会話が年寄りだ。「それにしても、俺たちは山の化け物かよ、せめて天狗と言って欲しかった」山本が続ける「朝からイサムが来るんじゃねえか？」「きっと、寝込みを襲って来るに違いない」山本も「キヨさんに、俺たちのことを確認していたから間違いないだろう・・」イサムにしてみれば境内は庭続きだ、庫裡の書斎へは無理だが本堂に来るのはわけないことだ。

早めに起きて、座布団と枕を中に並べて布団を盛り上げる。・・川辺家だろう、木戸がガタピシ音を立てている。障子の隙間から覗いていた山本が「来たぞ！アッあのやろう下駄を脱いで裸足になった・・」敵もさる者、遊びの心得を身に付けているようだ。我々と同種の相手だけに、心情や行動が手に取るように分かる。山本は正面右の演台の裏に、自分は左側の柱の陰にそれぞれシーツをかぶって待つことに。イサムが布団に跳びかかるか、布団をめくって呆気にとられた瞬間に跳び出す手筈だ。外はすでに明るいが本堂の中は薄暗い。

果たしてイサムがソーッと障子を開ける。目が輝いている。頭の中は我々が驚いている光景が浮かんでいるのだろう、ニヤ

ニヤしながら、忍び足で近づいて来て何やら考えている。
なるほど、両手で左右の布団を同時に引っ張るつもりだ。歯をくいしばって細い腕に力が入った。思い切り引いた・・、イサムが固まる、間髪入れずに「ウオッー」同時に白い化け物の登場だ。オサムの顔がひきつる・・泣きそうだ、「泣くな！」山本が笑いながら抱き上げた。「バカヤローッ！」べそをかいて強がる。「チキショーッ」蹴りを入れてきた。
やや落ち着くと、悔しさが出てきたのだろう布団に顔を埋めて涙を拭きながら拳で布団を叩いている。「クソッ！何で・・・」腑に落ちないようだ、思いきり笑った。

布団をたたみながら説明してやる「俺たちでも同じこと考えるさ・・」「本当に？」やっと笑顔が戻る。何にでも興味を持つ年頃だし、まさか故郷の越波に、予想もしていなかった我々がいたことに、胸が踊っているのが伝わって来る。「あの二人は・・？」。一つ年上で偶然この寺で一緒になったことを話してやる。「・・やっぱなあ・・頭良さそうだもんなあ」あきらかに挑発している。すかさず山本が布団をかぶせる。もがきながら喚いているが、喜んでいる・・嬉しくてしかたがないようだ。

昨夜のうちに仲間が帰って来たとのこと、イサムが自分の立場をニコニコしながら話し出す。中学生が二人、同級生が一人だが、どうやらこの3人には頭が上がらないらしい。外に出ると、「もう遊んでもらってるの！」キヨさんが掃除をしながら笑っている。イサムが照れているのが面白い。後ろから我々の腰辺りをこづく、振り向くと、無言で「さっきのことばらすなよ！」目が哀願している。山本と顔を見合わせて笑った。

明け六つの鐘を撞く、あと2回しか撞けないのか・・思いきり余韻を楽しむ・・「馬鹿力で撞くなよ！柱が動いてんぞ！」イサムがはしゃいでいる。案の定、鐘の中に頭を突っ込んでフラフラしながら出て来た。気が付くと、イサムの家も下の家も人が動き出している。お盆を前に、村の空気が変わってしまった。こちらも気を引き締めて掃除に取り掛かる。

「子供らの相手するの・・上手いよなあ・・」飯をかきこみながら小西さんが感心している。「真剣に一緒になって遊んでやるだけでいいんですよ・・・」山本も頷いて「特別なことなんか期待してないし・・楽しく過ごしたいだけでしょ・・」キヨさんが４人の会話を楽しんでいる。そして「この漬物はさっき頂いたのよ」イサムの母親が届けてくれたのだ。帰って来た村人たちも寺に寄進に来るという・・賑やかになりそうだ・・・。

帰省した少年たちと

本堂に戻り障子を全開にする。もちろんイサムの奇襲に備えてのことだ。下の家の婆さんが赤ん坊を抱いて歩いて来る。昨夜、泣き声が聞こえていたが家族が帰省していたのだ。

物置から箱を引っ張り出していたキヨさんが、手を休めて赤ん坊に話しかけている。今日から、この狭い谷あいの村で、お互いの無事を確認、再会を喜び、訃報に悲しむ光景が展開されるのだ。我々、よそ者を寄せ付けない、形容し難い熱を帯びた風が吹いている・・。

帰省の少年たち

イサムを先頭にガキ共が現れた。「デカとチビ！来てやったぞ！」相変わらず威勢がいい。

自分だけが面識があるので３人の前で優越感に浸っている。イサムから話を聴いているのだろう、警戒心は持っていないようだが、その目は興味津々だ。ペコッと頭を下げて本堂に入って来たが、元来ここは自分らの領域なので複雑な心境なのだろう。年長は陽一、岐阜市内の厚八中学の３年生、口数は少ないが不適な面構えだ。要（カナメ）は地元の根尾中学の２年生、見るからに純朴そうだ。正（タダシ）は岐阜市内の６年生、物怖じせず落ち着いている。同年ながらイサムが頭が上が

らない訳が判った。

やっと話の通じる相手が現れた。とにかく触れ合いだ。「ヨシッ！相撲をとるぞ！」男同士の交流は、力を誇示するのに限る。陽一が向かって来た、体格が近いので勝てると思ったのだろうが思い切り投げ飛ばす。イサムは山本が大好きなようで、持ち上げられてぶん投げられても、大喜びで喰らい付いている。正は堂々と力勝負を挑んでくる、性格が表れていて気持ちがいい。要は遠慮がちに最後に挑んできたが、横にしがみつき足を絡めて、しつこい相撲をとる・・。拝殿の掃除に行く村のオバさんとキヨさんが笑いながら本堂の我々を見ている。「あとで、麦茶を持ってくるから・・」。全員汗ビッショリで回廊に座り込む、キヨさんが戻って来た。「イサム！」陽一が声をかける。見事な力関係だ、正も一緒に庫裡からヤカンとコップ・せんべいを盆に載せて持ってきた。陽一はサッカーをやっているとのこと、こちらの話をしてやると「強い高校じゃん、分校でやろうよ」勝負を挑んできた。

全員で分校へ行く、初めて我々を見る村人が驚いているのが面白い。子供らも飛び出して来る。陽一が家からボールを持って来たが校庭が狭いので思い切り蹴れない。フェイント、チャージ、中学生では苦手なヘディングをやってみせるが、陽一も、

そこそこ出来るので大して驚かない。それでは、と裸足でのキックを見せる、失敗すると爪が剥がれたり、指先の皮がズルムケになる、度胸のいる高度な技だ。陽一の顔が尊敬に変わる。山本は要にトスを上げさせ、スパイクを披露してチョロチョロするイサムに思い切りボールをぶつけて楽しんでいる。正は子供らが怪我しないように気を配っていて、子供らもよく言うことをきく。

結局、村中の子供らを引き連れて寺へ戻ることに。小西さんらが顔を出したので、イサムが男の子らを連れて跳びかかる。白井さんも面くらいながら真剣に相手をしている。女の子らは久しぶりなので、山本にへばりついて離れない。どうもガリバーと思っているようだ。陽一と要は、受験やら、よそ者が越波のことをどう思っているかなど、何でも話したいようだ。気が付けば、たった数時間でしゃべり方が大人っぽくなった。「兄貴、午後から蛇池へ行こうよ」陽一は、明日は家の仕事があるので遊べないと言う。

頃合いを見て、キヨさんが子供らを送り出す。渋っているが、正に引率されて引き上げて行った。先輩たちも交えて話が盛り上がる。正が汗をかきながら戻って来た。仲間に入っていたいのだ。昼飯を食って寺に集合することを約束、正に「ムネキとタカシはいいけど、小さいのは連れて来るな、お前が遊べないぞ！」陽一が急に大人に見えた・・。

「みんな、嬉しいんだねえ・・あんなにはしゃいでいるの、見たことないわ・・」キヨさんが感心している。「相撲なんか取ったの・・いつ頃だろう・・」白井さんもまんざらでもないようで食が進んでいる。食事の間にも村人が「白米」「小麦」など運び込んで来る。キヨさんが字を書かないのを知っているのだろう、自分で品名・数量・名前を書いた紙を持参している。キヨさんも臆することなく、礼を言って廊下に順に並べている。

案の定、イサムが出て来た、というより待ち構えていた。早速、山本の背中に飛びついている。よほど心地良いのだろうが、まるで猿の親子のようだ笑いがこぼれる・・。時間通り、陽一が子分を引き連れて現れた。水中メガネを刃先に引掛けたモ

リを肩にかついでいる。色気づく年頃だ、短パン姿も決まっていてなかなか格好いい。要も正も水中メガネを頭に載せてタオルを首に掛けている。タカシとムネキは一緒に遊べるのが嬉しいのだろう、正の指示に従っている。小西さんたちは釣竿を、山本はスコップをかついでいるが、バケツを持ったイサムがくっついて離れない。自分はキヨさんが用意してくれた菓子とマキをそれぞれ袋に入れて山門を出る。

入道雲から千切れた綿菓子が、どこまでも青い空に一つ浮かんでいる。山肌の見える植林の杉の木は、真っ直ぐに逞しく育っていて等間隔に影を作っている。道路に迫る高屋山の木々は黒に近い緑色で幾重にも重なって、人を寄せ付けない不気味さだ。目の前の根尾川は何千年もの間、時には怒り狂い、又ある時は命の源となって人間を含む全ての動物たちに安らぎを与えている。凛として流れる様は筆舌に尽くしがたいが、余りにも清く美しい・・。

町で暮す、よそ者の我々にしてみれば、この大自然の中で何も考えずに遊べる事等、夢の中の幻想の世界だ。しかもこの地で生まれ育った子供たちと一緒に、同じ時間を過ごせるのだ、どんな遊びをするのだろう興味は尽きない。

蛇池（じゃいけ）に着くと、決まり事なのだろう、糸を垂らすのは上流の小さな渦を巻く淵で相当深い。淵の水が動き出す位置に大きな岩が立ち塞がって流れの向きを変えている。透き通った緑の水中に一抱えは有りそうな、苔むした岩が居座っていて周りには魚影が濃い。どうやらここが陽一の漁場のようだ。やや下った流れの速い瀬は腰までの深さが在り子供らは早速飛び込んでいる。陽一の指示通り両方が見渡せる河原に荷物をまとめて焚き火の準備を始めることに・・。

小西さんたちは石をひっくり返して川虫を集めているが、要の手際よさに助けられてすぐに木の葉の皿がいっぱいになった。正はタカシらの面倒を見ながら、イサムと一緒に浅瀬に石を並べて仕掛けを作っている。ドンコなどハゼ科の魚を追い込んで捕まえるのだ。陽一が河原の草を潰して水中メガネの内側に塗りこんでいる。焚き火にマキをくべて体を温めると右手にモリを掴み静かに川の中に足を踏み入れた。

山本と二人で陽一の動作を注視していたが・・想像を超えた行動に出たのだ。モリにはゴムチューブなどは付いていないので、岩の下や木の根に潜む魚を撞くものだと思っていたのだが・・。頭が出る深みまで静かに進むと、腰の位置に転がっている岩と川底の間に足先を入れ、体を沈め左手で岩を掴み体を固定したのだ。そしてモリを岩の上部のへこんでいる所に据えると頭を下げて静止状態に・・。

いつの間にか正も要も横に来て息を殺している。「陽一さんしか出来ないもんなあ・・」
モリの先３０センチの距離に魚が流れに逆らっている・・その瞬間、陽一の右腕が伸びた！銀鱗が躍る・・手の平サイズの鮎だ。ゴムの反動を利用したモリでも、泳いでる鮎を撞くのは至難の業だ。余りの見事さに息を呑む。やや誇らしげに静かに水から上がって来た。あくまでも漁場に敬意を表している。日常の生活は、町に比べれば不便なことも多いに違いないが、この越波で生まれ育った陽一たちは、自然から与えられる豊かな恵みに感謝しているのだろう。冷えた体を焚き火で温めると、再び水の中へ・・冷たい谷川の中で静止するので体はすぐに冷える。８月の炎天下とは言え体力の消耗は激しいようだ、陽一の唇は紫色になっている。５回の漁でモリを置いた。限度が分かっているのだ。

「兄貴たちもやってみる？」水中メガネとモリを借りて、指示通りやってみるが、思いのほかモリと腕に加わる水流の力が強い。ましてや体を固定するのはすぐに出来るものではない。期待を込めて腕を思いきり伸ばすが、魚にかすりもしない。動き出しの気配を悟られているのだ。山本も挑戦するが、魚にからかわれて全く手に負えない。小西さんらも改めて陽一の技量に驚嘆している・・。焚き火の周りに腰を下ろし菓子を食いながらイサムたちを眺める。はしゃぎながら時折こちらを見ているが、自分たちの遊びに付き合ってくれているのが嬉しいのだろう、笑顔が輝いている・・。

小西さんたちは残っている川虫を持って淵へ戻って行った。陽一は小西さんたちが苦手なようだ。何だろう？我々とは違う波長みたいな物を感じているのかも知れない。「兄貴たちは何故越波に来たの？」よほど不思議に思っていたのだろう。無

理もない、小西さんたちのように和尚と縁が無ければ、わざわざこの山奥の寺に来て、しかも本堂に寝泊りする者などいなかったのだ。いきさつを話すと驚いている、と言うより呆れている。陽一も要も、町の学校へ行って初めて、歴史や地理で自分の故郷「越波」のことを知って複雑な気持ちになったと言う。権力闘争に負けた平家の流れを受け継いでいること、「落人の集落」と言う侮蔑するような名称。「おっぱ」と言う、からかわれやすい地名。自己紹介した時の教室の様子が想像出来る。思いやりの無い教師ならば、救いの手など差し伸べなかったろう・・。

「今晩、行っていい？」残された時間がないので、まだまだ話したいことがあるようだ。

河原に作った小さな生簀の魚をバケツに入れ替える。陽一が獲った鮎や山女、小西さんたちが釣り上げたハヤ、アマゴそしてオサムと正が奮闘したドンコ、カジカなど結構な量だ。山に囲まれているだけに陽が翳りだすと日暮れが早い。皆楽しそうにぞろぞろ歩く、車を避ける心配も無いし大声で喋っても注意される事も無い。１０歳から１９歳までそれぞれが同じ空気を吸っている。今まで経験した事の無いゆるやかな時間の流れが心地よい・・。

寺に戻って獲物を小分けにする。年寄りだけの家へ配るのだ、陽一が指示している「喜んでくれるんだよ」町へ出て行ったからこそ理解出来るのだろう、残らざるを得なかった年寄りたちの心情が・・。心根の優しい少年だ、置かれた環境が「人」を創るに違いない。

夕食が豪華になった。精進料理にはほど遠い「肉」が並んでいる。「食べないと傷んじゃうからね」村人からの寄進なのだが、キヨさんは、どこか吹っ切れているようにも見える。あまりの忙しさに、細かなことは考えていないようだ。「あの子らも、玄暁さんがいたら
寺には寄り付かないけどね・・」子供らと一緒にタヌキやキツネも交えて楽しく遊ぶ山寺の、やさしい和尚さんは民話の世界の話なのだ・・・あたりまえか・・。

陽一と要、正も付いて来た。話声に気づいたイサムが口をもぐもぐさせながら階段を登って来るが、話し込みたい陽一に邪険に扱われている。「オバさんからお茶を貰って来い！」正も気を利かせて一緒に庫裡へ向かった。山本が切り出す「俺の実家も田舎で川遊びばかりしていたが、陽一の腕前は凄いぞ・・初めて見たよ」「毎日潜っていれば出来るんじゃないかな・・」謙遜しているが言葉に自信が溢れている。要は口数は少ないがニコニコしながら首を振る「誰にも出来ないよ・・」

イサムらが戻って来たので車座で話を続ける。「越波」の由来を聴いてみるが、面白そうな話は出て来ない・・と言うより元々興味がないようだ。イサムが待っていたように口を開く。「大蛇が山を越えて来たからさ、洪水が起きて・・」「又それかよ」正が笑う。陽一が続ける「年寄りの昔話もみんなムチャクチャだもんなあ」。要が思い出したように話を紡ぐ「中学校で習ったけど、越前の方からも木曾義仲に追われた源氏の一族が温見峠を越えて、ここら辺に集落を作ったらしい・・って」。「それって大河原、上大須かなあ徳山村も奥の方は凄いらしいし・・」陽一も頷く。イサムの目が輝いた「今でも山の奥で源氏と平家が戦ってんだぜ！」「向こうへ行ってろ！」陽一が呆れて追い払う。

陽一が進学の話を持ち出す「工業に決めてるんだけど・・兄貴の高校もいいよなあ」我々と接しているうちに、憧れを抱いたのか？「どこに行っても友達は出来るさ、俺たちだって中学はバラバラだし・・それに気の合う奴は必ずいるもんだ」。山本が頷いて「目標が在るんだったら向かっていくだけだよ」。要は勉強が嫌いだから、手に職を着けたいようだ。

山本が目で合図をするので振り返ると、うろうろしていたイサムが机の前に立って本を開いている。挟んであったハガキを読んでヘラヘラして踊り出した。「・・お兄様たち・・だってよう！女からラブレター貰ってやんの！」敵の弱みを握ったので嬉しくてしかたがないようだ。すかさず「漢字、全部読めんのか！」山本がけしかける。「まだ習ってねえ字も在るし・・」しょんぼりしてハガキを持って来たので、皆に読んで聴かせる。面白いもんだ、自分たちのことではないのに顔を赤らめて照れている。「何なの？」興味津々で陽一が訊いてきたので、いきさつを説明してやる。「兄貴たち・・すげーじゃん、かわいかった？」

勝手に好みのタイプを思い描いているのだろう、４人とも目が輝いている。「ここには可愛いのはいねえもんな・・」陽一がつぶやく。男はガキの頃から、こと女に関しては遠くの高みばかり見ているのだろうか・・？

「俺ん家だって名古屋の女子高生が来るぜ！」とイサムが叫ぶ。せっかく注目を浴びたのに話が逸れてしまったので悔しい思いをしている。「兄貴たちは、ここに来てどう思った？」恐らく陽一が一番訊きたいことなのだろう、要たちもこちらの顔を覗き込む。越波から外へ出た時から、いつも好奇の目に晒されているのだ。気持ちの通じた信頼出来る我々の真面目な答えを期待している。「確かに・・想像を超えた凄い所だよ・・能郷から歩いて来て感じたさ」山本も同調する。「だからこそ、陽一たちの先祖は凄いと思うぞ、都から逃げたんじゃなくて家族を守るために、命がけでここに辿り着いたんだからな」・・４人とも思いを巡らしている・・。「途中で死んだ人もいるだろうし、子供を負ぶって女の手を引いて、道なき道を月明かりを頼りにだぜ・・考えられない度胸だよ逞しいよなあ・・」イサムも神妙に聴いている。安心したのか陽一が「そうだよなあ・・ん！」自分自身を納得させている。

実は、陽一たちが来る前に山本と打ち合わせておいたのだ。一番聴きたいのは「越波」についての意見だろうから「気落ち」しないように話してやろう・・と。「言葉を選んで話したのでは不信感を覚えるだろうから、和尚をたぶらかしたようにお前にまかせる！」まるで詐欺師扱いだ。

そして今日までの出来事を話して聴かせる。４人とも大笑いだ、「それは猿だよ！」謎の訪問者には驚きもしない。シマヘビを捕まえたことを話すと「神様なんだからいたずらするなよなあ」イサムが口を尖らせる。「マムシは殺してもいいけどさ！」正も頷いている。
拝殿の床板をぶち抜いてスズメバチに刺された話になると「俺たちがやったら、木に吊るされるな」要も陽一に同調している。みんな目を輝かせて話を楽しんでいたが、我々二人が太鼓に頭をぶっつけた様子を聴いて、泪を浮かべて大喜びしている・・。

お開きにするには良いタイミングだ。コップをかたづけながら「要！あれを見せてやれよ」陽一が促す。・・・？何が始まるのか・・イサムも正もニヤニヤしている・・。要が柱に抱きついた・・いや、両腕を廻しているが尻を浮かせて腰を引いている、両脚は柱にからませないで、膝を胸に引き寄せているのだ。そして、自分が正対している柱の面を歩くようにいとも簡単に柱をのぼっていく。まるで腕の長いリスのようだ。柱は円柱で磨き込まれているから滑るはずだが・・。山本とともに口を開けたまま、天井に着いた要を見つめる・・。信じられない光景だが唖然とする。降りて来る時は足の裏で柱を両側から挟みながら・・汗ひとつかいていない。イサムを見つめる「俺は出来っこねえよ！」正も首を振る。

帰りぎわに階段を下りながら、陽一が「明日は朝からクルミを取りに、山に行けばいいよ」
我々の最後の日をもてなしたいのだ。要にいろいろと指示している。「じゃ・・夜に又来るよ」一緒に遊びたいのだろうが、要たちに気持ちを託している・・立派なガキ大将だ。

コップを下げに庫裡へ行くと、キヨさんが磨き上げた食器類を揃えている。廊下の供物も山のように並んで見事なもんだ、次々に帰ってきているのだろう。明日の計画を打ち明けると「おむすびを作るからね・少しでも一緒に遊びたいんだねえ・」子供らが羨ましいようだ。本堂へ戻って、陽一や要の特技が話題に・・「もっと凄い奴もいたんだろうな」

余りにも充実した一日が終わろうとしている・・。ん！下駄の音が近づいて来る、障子を開けると、パジャマに着替えたイサムが入って来た、しかも枕を抱えている「母ちゃんが泊まって来いってさ！」親に頼み込んだのに違いない。いいだろう、イサムを挟んで床につく。童話のような話を聴きながら・・眠りに就いた。

クルミとり

寝相の悪いイサムに蹴飛ばされて目が覚めた。山本は掛け布団を巻きつけて背中を向けているので、イサムはこちらの布団に潜り込んで来ている。外は既に白んでいるので、そっと起き出して回廊に腰を下ろす・・。日常になっていたので気付かなかったが、ニワトリが鳴いている。明日はこの越波に別れを告げて現実の世界に戻らなければならないのか・・・山本が起きてきた。「遊べるのは今日が最後か・・天気は良さそうだし、目いっぱい楽しもうぜ」イサムはまだ布団に丸まって寝入っている。

時間があるので先に掃除を始める。障子を全開にすると、さすがに外気を感じたのだろうイサムが目を覚ましたが、ボーッとして布団に転がっている。ご本尊の裏の廊下を拭き掃除をしながら山本に「今晩お化け大会をやろうぜ」と耳打ちする。「陽一らも喜ぶんじゃないか、自分たちだけではそんな事できないだろうから・・」「遊んでくれたお礼に楽しませてやろう、小道具には事欠かないし・・」山本は長持ちの中に隠れるつもりだ。イサムがあくびをしながら近づいて来た。相変わらず山本にへばりついている。口には出さないが別れが迫っているのを感じているのだろう。

「明け六つ」の鐘を撞く・・明日突けば下界に帰るのか・・・だんだん神妙な気持ちが湧いて来る。イサムは鐘の中に立ったりロープにぶら下がったりして、はしゃいでいるが時折り寂しそうな顔になる。「１０時に弁当を持って分校に集合するぞ」イサムが皆に伝えに行った。向いにそびえる屏風山の何処ら辺まで連れて行ってくれるのだろうか・・楽しみだ。

貰い物が増えているのだろう、いつになく変化に富んだ朝食だ。寄進された物も出ているようだが山菜などの炊き込み飯は初めてだ。今日の予定を説明しながら先輩たちを誘うが、小西さんは「盆明けの模擬試験が気になるので行かないで少し頑張る」と言う。白井さんは「クルミが木になっているのを見たいよ・・」小西さんに比べると口数が少なく、いつも遠慮がちで弱々しい白井さんの以外な発言に山本も箸を止める。「今更、半日詰め込んでも・・」口には出さないが白井さんは余裕で汁椀に目を落としている。どうやら白井さんの方が順調にカリキュラムをこなしているようだ。「今晩、お化け大会をやろうと思います」二人とも大賛成だ。キヨさんは「全く・・」と言いながら半分呆れてケラケラ笑っている。

イサムが迎えに来た。藪に入るので長ズボン姿で長靴をはいている。４人分の弁当と魔法瓶を袋に詰める。袋はキヨさんが納戸から引っ張り出してきたのだが、おそらく修行僧が行脚の時に首から掛けていたのだろう、年季が入って薄汚れている。小西さんが山門まで見送りに来た。「あの人は行かないの？」イサムが不思議がる。「脚が少し痛むらしい・・」白井さんは気づいていたようだ。「そう言えば、座る時に顔をしかめてたなあ」山本が続ける「急に走ったりしたからか？」日頃から運動をしていないので筋肉痛になったのかも知れないが、近いとは言え山の上り下りは相当こたえる。賢明な選択だ。

分校に要・正・タカシが待っている。そして、ムネキも校舎から出て来た。総勢８人の探検隊で、イザ！出発だ。連れて行って貰えないのは判っているので、子供らはつまらなそうに鉄棒にぶら下がっている。村人たちが「何事か？」と見ているが、要らが一緒なので安心しているようだ。家の手伝いで汗まみれの陽一が顔を出した。「暮れ六つにお化け大会をやるぞ」と告げる。それを聴いたイサムらも大騒ぎだ。「２時頃には戻って来いよ」要にアドバイスしているが行きたくてしかたないのだろう、すぐに家に戻って行った。

要たちにしてみれば自分の家の庭みたいなものだ、けもの道を苦も無く歩いて行く。南斜面なので樹木が生い茂って良く育っている。日差しも強いのでヤマヒルは余り出ないとのことだが、蛇がいたるところいる・・。シマヘビ・青大将・ヤマカガシ、もちろんマムシもとぐろを巻いている。そして突進型のカラスヘビもお出迎えだ。要らは慣れているので驚きはしないが、マムシだけには注意しているようだ。枝に巻きついている青大将を見つけると尻尾をつまんで楽しんでいる。カブトムシやクワガタもそこらじゅうの木にへばりついている。ばかでかいムカデが我が物顔で走り回って、静かに寝っころがっているヘビに嫌がられているのは滑稽だ。爬虫類は確かに多いが猪、鹿などにはお目にかかれない。寺の裏手の高屋山の方が山深いのでキツネ、タヌキ、猿が生息しているらしい。その願養寺が木々の間から見えるが、不気味なほどの森のなかに埋もれている。自分たちがそこで寝泊りして来たのが不思議に思えてしかたがない。山本が呟く「今夜寝れば終わりか・・それにしても４ヶ月後には雪に埋もれてしまうとは・・想像出来んなあ」緑に囲まれた箱庭のような村を見渡しながら「ダムの為に水没しなけりゃいいが・・」二人とも感傷にひたる・・。

要の計画では稜線に出て景色のいい所で昼食、山を下りながらクルミやキノコを採り、虫も集めるとのこと。なるほど弁当の入っていた袋を空にして入れ物にするのだ。しばらくして稜線に出た。高度があるので流れる空気はやや軽く感じる。ムネキやタカシの体力に合わせるのでペ-スは遅い。頂上まではだいぶ距離がありそうだ、澄み切った空が、気持ちを湧き立たせてくれるが、断念して握り飯をほうばる。みんな梅干やたくあんがおかずだが、弾ける笑顔と笑い声が何よりのご馳走だ。正たちは途中で汲んできた湧き水で喉を潤している。寺で飲む高屋山の水もうまいが、この山の水も格別だ。

どの方角を見ても連なる山しか見えない。頂上まで行けば遠く日本海が見えるのだろうか？能郷白山の稜線越しに琵琶湖の光る湖面を目にすることは・・。勝手な想像をしながら森の中へ引き返すことに。クルミの木が群生している斜面に案内されたが、思ったほど大木ではない。せいぜい５～６メートルの高さで幹の太さも直径２５センチ位だろうか。
梅よりやや大き目の緑色の実がなっている。さっそく要が登って木を揺らす、面白いほど落ちて来る。どうやら無理に若い

実を採るのではないようだ。正らも手頃な木に登って揺らしているので、自分も3メートル近くの高さまで登り大きく揺らす。調子に乗って揺らせすぎたので谷側にしなった時に見事に折れた。イサムは大喜びで「猿も木から落ちる～う」隣の木で揺れを楽しんでいる。潅木が茂っていて怪我は無かったが、なんとも情けない。

みんなで落ちたクルミを拾う。それぞれの袋はいっぱいになった。要は用意してあった別の袋に栃の実やキノコを入れている。タカシとムネキは正とイサムが捕ってくれたカブトムシとクワガタを、しょって来た虫かごに入れて貰っている。待っている子供らのお土産だ。この谷あいの小さな集落は、言ってみれば一つの大家族みたいなものではないのだろうか。年寄りを敬い、幼い子らにも気を使っている。家族が生活の為に村を出るのは苦渋の決断だが、ついて行く子供らにとっても、その心境は複雑なはずだ。それゆえにこの故郷に戻った時には思い切り甘えもするが恩返しも忘れないのだろう。町でのんびりと暮らす我々のような者には理解出来るわけが無い。

「初めて見たなあ・・クルミがなっているの」秀才肌の白井さんが嬉しそうだ。一緒に来たことを喜んでいる。自分も植物図鑑で知ってはいたが、まさか木に登ってこの手で実を採ることなど、考えもしなかったので思わぬ体験に感謝する。山本は実家の裏山で少しは採れるので驚きはしていないが「青い実を採ることはないな、地面に落ちて果肉が腐った物を拾うだけだよ」我々が素直に感心する様子が嬉しかったのだろう、要たちも恥ずかしがらずに本音を言う。「分校の遠足で樽見に行って、初めて田んぼを見た時はビッ

クリしたよ」イサムも正も頷く。「お米をああやって作るなんて・・」

「俺についてきなよ」イサムが偉そうに言いながら先頭にたって山を下る。セミの声がやかましくなって来た。熊笹を掻き分けブナの大木の根っこに足を取られながらやっと林道に出た。森に隠れていた分校の屋根が谷川の向こうに見えてきたのでもう少しだ。たいした距離ではないが森の中を歩くのは相当疲れる。

我々の話声や姿が見えたのだろう、子供らが分校で待っている。タカシたちが虫かごからカブト虫やクワガタを出して説明を始めた。「これがノコギリ、ミヤマ、ヒラタ，カブトのメスで・・」要がキノコやトチの実を家に置きに行った。すぐに戻って来て「さあ、これからが大変なんだよ」何をするのだろう?要に言われたとおり寺に戻ってバケツを取りに行く。山本も白井さんも皆で蛇池に向かっている。後ろからの眺めは何とも微笑ましい。でかい山本の周りにイサムたちがまとわりつき、おとなしい白井さんの両側のムネキやタカシも何やら盛んに話しかけている。顔の表情は見えないが皆楽しそうだ。期待していた民話の世界が目の前に広がっている。しかも自分も一緒にその絵本の中に描かれているのだ、何とも言えない穏やかな雰囲気が心地良い。

両側に森が迫り、右を流れる谷川に狭い坂道が近づいている。視界の殆んどが山また山だが、前方がやや開けて河原が広がる蛇池に出た。「さあ、始めるぞ」要が袋からクルミを取り出すと、水際の平らな大きめの石の上でクルミを踏み潰す。果肉を川に流しザラついた石で残っている果肉を削り落とす。洗うと見覚えのあるクルミが現れた。なるほど、青い実を採ると大変なのが分かった。イサムらは体重が軽いので、思い切り石に投げつけて実を潰している。手が荒れないように川で洗いながら、水と角ばった小石を入れたバケツに放り込む。木の枝でかき回すのは正の役目だ。柔らかくなった果肉を擦り落とし水で洗う。一時間程かかって３００個以上のクルミの種でバケツがいっぱいになった。「さあ、寺に戻って遊ぶぞ！」陽はまだ高いが「来た時に比べると太陽の位置が変わったなあ」山本が汗を拭いながら呟く・・。

本堂に小西さんも顔を出した。皆でクルミを分ける。村には駄菓子屋など無いので、ムネキらはビー玉遊びを知らないという。カッチンや目ガッチなど教えてやると大喜びだが、我々に勝てる訳が無い、山本も容赦しないで目ガッチでどんどん巻き上げていく。瞬く間に手持ちが無くなってベソをかきだした。大人げないがバクチの怖さを身に沁みて教える。イサムと正が庫裡から麦茶の入ったやかんとコップを持って来た。「俺たちは明日帰るから今夜の肝試しが最後だぞ・・」要たちが複雑な表情を浮かべる。数時間後には別れなければならないのだ・・イサムが一番淋しそうな目をしている。「あと2時間で暮れ六つだが小さいのは連れて来るな、本当に怖いからな」やっと表情が和らいだ。「へ～ん、怖い事ねえよ」イサムが強がる。クルミを返してあげてみんなを送り出すと「仕掛けを考えておいたよ」小西さんが嬉しそうに話出した。山本が「え～勉強しなかったの・・」からかい気味に茶化す。「こんな楽しい事は、そんなにあるもんじゃないよ」早速あれやこれやアイデアを出し合う。最後の夜だ、阿弥陀如来も大目に見てくれるだろう・・・。

隣接の八幡神社も細工をしようかと案も出たが、寺とは違う『畏れ』のような近寄り難い『気』が漂っている、止めよう。仏像には何故か人間臭さを感じるが、神様には冗談が通じそうもない。ましてや拝殿の床をぶちぬいている、目を付けられているのは間違いない。それに石段の周りにいるマムシに噛まれると大変だ。寺の灯りを消すだけでも充分恐ろしさは演出出来る。ひとりづつ回廊から廊下を一周させて、仕上は怪談話で締める事に決定。晩飯までには家に帰してあげよう、小1時間もあれば充分だ。

最後の夜のお化け大会

さっそく小道具の制作にとりかかる。小西さんが考えた仕掛けは、欄間の隙間に釣り糸を垂らしバチを縛り揺れを利用して

『きんす』と呼ばれる大きな鉢型の『りん』を鳴らすのだ。演台の横に座った小西さんが背中に手をまわして操作するという。ニコニコしながら「実はもう作ってあるんだ」実演してみせる。「クワ～ン・・」なかなか不気味な響きだ。バチの縛る位置を何度もやり直したそうだ。白井さんが「欄間の彫り物の隙間にどうやって糸を通したの？」自分も山本もそこが訊きたい。小西さんが得意げに解説する、「初めはオモリの鉛に糸をからませて投げたんだが何度やっても駄目でね、床下の木の枝を思い出して枝先の小さな又を利用したら一回でＯＫさ」情景が浮かんだのだろう「良かったね成功して」白井さんが呆れて笑う。

「・・♪ いい物を見つけたんだよ・・♪」嬉しそうに小西さんがみんなを手招きする。一緒に物置へ行くと、大きく裂けた提灯と破れた番傘が並んでいる。お化け屋敷の定番だ、さっそく本堂に吊るしてみる。相当古いだけあって見事な不気味さだ。番傘はやや開き気味にして骨の間に小枝を差し込み、閉じないようにする。そして「俺の作品を持ってくるよ・・」小西さんが書斎へ何かを取りに行った。目の形に切り抜いた紙を2枚と、６０センチほどの長さの脚の形に切った紙、そして赤い布切れを持って戻って来た。半開きの目にはまつ毛がしっかり描いてあり白目の部分には血管が走っている。自慢したいのを押えながら説明が始まった。「手頃な巻紙があってね、墨で描いたんだよ。赤い布はキヨさんの使い古しの・・」３人とも息を呑む、山本は顔がひきつっている、白井さんは目が点だ、同じ事を考えているのだ。「タスキを分けて貰って・・」良かった！安堵の空気が流れる。「血管は布をほどいた繊維をご飯粒で貼り付けたんだが難しかったよ」・・すでに芸術家気取りだ・・。３人は口には出さないが確信している。『二浪は間違いない！』そして長めに切った赤い舌と目を一枚づつ提灯と番傘に貼り付けて出来上がりだ。近くで見ると滑稽だが、ここは本当の山寺だ、正面の回廊の両脇に吊るしてみると異様な気配が漂って来る。もちろん万が一を考えて提灯にローソクの灯は燈さない。作った本人が『番傘の一本脚』のあまりの出来栄えに驚いているのが何故かおかしい。

本堂の中を見渡す、もう一工夫欲しいが、ご本尊の額に三角に切った紙を貼り付けるのはあんまりだ。山本が「あれはどうだ」と右側の仏像の奥の白い布が掛けてある椅子を指差す。和尚が読経の時に座る椅子だ。見事なまでに磨き上げられた鮮

やかな朱色が周囲を圧倒している。肘掛や背もたれの手の込んだ曲線が威厳の象徴なのだろう、姿勢を正した和尚の姿が目に浮かぶ。さっそく引っ張り出して小西さんが細工した『きんす』の横に並べ、かけ布団を丸め裾を広げて座らせる。そして丸い団扇を差し込むと、みすぼらしい、なで肩の庶民的な大僧正の登場だ。気のせいだろうか、阿弥陀如来の口元がゆるんでいるようにも見える。

時間が迫って来た、山本は長持ちの中へ、白井さんは仏具やお膳を取り出した大きな木箱に潜り込む手筈だ。小西さんは照明係りだ、自分は進行役と怪談話を買って出る。小西さんと暮れ六つの鐘を突きに外へ出ると、6～7人が山門にたむろしていて、提灯と番傘を指差して大喜びしている。初めて見る顔もあるが、陽一がいるので統制がとれている。この際だ、皆で一緒に鐘を撞く。見渡せば殆どの家に灯りがともっていて、家族の団欒が聞こえてきそうだ、越波に来て初めて見る、希望に満ちた幸せな情景が広がっている・・。

いつの間にか、ひぐらしから草むらの虫の鳴き声に代わっている。夕闇を待ちかねたコウモリが飛び交い、庫裡の上に雲間から顔を出した無表情の満月を横切る・・妖気漂う『魔』の時空が密かに忍び寄ってきたようだ・・。そして緑溢れる森に埋もれ、色とりどりの野菜や草花に囲まれた願養寺は、切り紙細工の影絵の世界になってしまっている。風も息を殺して動かない・・・湿気を帯びた得体の知れない、漆黒のとばりがゆっくりと降りてきた・・。

皆を引き連れて本堂へ向かう。イサムは、山本らがいないので隠れていることをすでに察知していて、周りに注意を払っている。階段を上がると提灯と番傘に笑いが絶えない・・。

「小西さんが作ったんだよ」説明してやる。「うまいよなあ・・」皆が賞賛の声をあげた。小西さんの顔がほころんでいる、無邪気な少年時代に戻ってしまったようだ。

障子を開けて薄暗い本堂の中へ入り、皆を座らせる。小西さんが右側の阿弥陀仏の電気を点けた。皆が一瞬、目を丸くして

息を呑む、そして柵まで駆け寄る・・。転げまわって喜んでいる、「びっくりした～本物かと思ったよ」と陽一。「団扇が頭かよ」イサムが笑う。「俺と山本が作ったんだよ」すかさず「バチが当っても知らねえぞ！」みんなが声を揃える。

手順を説明する。陽一や要は一人で、イサムやムネキは二人で本堂を一周だ。さっそく陽一が懐中電灯を手に回廊に出た。障子に影が映る・・角を曲がり突き当たりの戸を開け、廊下に入った。鼻歌が聞こえて来る・・角を曲がって真裏に来た。そろそろ出て来るであろう山本らを警戒しているのが想像出来る。「ヒョエ～ッ！」白井さんの声だ、弱々しい幽霊の登場だ、続いて「ウオ～」野太い声で山本が叫ぶ。陽一が楽しそうに相手をしているのが伝わって来る。そしてニコニコしながら戻って来た。何が有ったか皆には内緒だ、続いて要も・・喜んでおどけている「怖かった～」イサムらは二人なので、大きな声でしゃべりながら勇気を奮い立たせている。そして「ここにいるのは分かってんぞ！」木箱や長持ちを蹴飛ばしている。それでも山本らがシーツをかぶって登場すると「ワ-ッ」と逃げ出して来た・・。それぞれが楽しんだようだ。「こんな事、出来ないよなあ」陽一と要が一番喜んでいる。

汗びっしょりで山本と白井さんが戻ってきて輪に加わる。「怖くなかったぞッ！」イサムが山本にからみつく。小西さんが電気を消しに行った。本堂の中は真っ暗だ、障子にいつもの影絵が映し出される、初めての光景にムネキは固まってしまった。そして輪の中に置かれた火鉢に固定した百目ロ-ソクに火を・・。影絵は消えて、今度は自分たちの巨大な影がおぼろ

げに四方八方に投影された・・。揺れる仄かなロ-ソクの炎がそれぞれの顔に奇妙な陰影を作っている。

舞台は整った。小西さんが演台の脇に移動する。飽きないように3話も聴かせれば充分だろうが内容が問題だ。平家関連の『耳なし芳一』や『雪女』などは遠い幻想の世界ではない、身近すぎる・・ましてや『山の中に一軒家があって・・』となれば皆、自分の家を想定しまうだろう。『のっぺらぼう』と『座敷わらし』を現代風にアレンジして演じることにした。最後は、怪談とは言えないが十八番の驚かせる話でお開きにしよう。

「クワ〜ン・・・」驚いたイサムが振り向いてキョロキョロしている、正はムネキとタカシを両脇に寄せて平静を装う。陽一らはこれからの展開に興味深々だ。『のっぺらぼう』の正体は女房の厚化粧と言う結末に、『座敷わらし』は酔っ払って隣の家に入り込み、気が付くとその家の子供が無言で見詰めている・・とのオチだ。脚色が効いて半分は面白いのだろう、皆安心して聴き入っている。小西さんも所々で効果的に『きんす』を鳴らす。そして最後は残虐な強盗を刑事が追い詰める話だ。話している自分も口が滑らかになって来た。まるで商店街主催の落語会にしか声のかからない、たいして面白くもないのに自分の話芸に酔い痴れる前座の噺家のようだ。そして話は佳境に・・取り調べ室で『しら』を切る犯人を無言で見つめる刑事・・皆は自分自身を犯人に置き換えている。数秒の静寂・・そして陽一を見つめながら・・ゆっくりと指をさす・・「犯人は・・・お前だァ！」小西さんが驚いて糸を離した・・『きんす』の中でバチが踊って不気味に鳴り響く。やや間をおいてイサムもムネキもタカシも絶叫している。大声で泣き出した・・。陽一も要も胸を撫で下ろしている「びっくりしたあ・・」その時、村の数軒の家の戸が開く音が・・。我が子を案じて下駄の足音が近づいて来る、皆走っている。小西さんがすぐに電気を点けて山本が障子を開ける。もちろんイサムの母親が一番乗りだ、下の家の婆さんも山門に現れた。イサムらはまだ泣き止まない・・陽一と要がムネキらを立たせてなだめている。親たちは提灯と番傘に見とれている・・「なんと・・まあ・・」「これはいったい・・」そして正が母親を本堂に引き入れる「権現様だよ」・・絶句している。どのように反応したらよいのか迷っている。

「すみませんでした」とりあえず子供らを泣かせてしまったことを謝る。

それぞれが家路についた。山門から出た頃には皆泣き止んでいる。陽一が思い出したように戻って来た。「明日はいつごろ帰るの？」「昼前には出発するつもりさ」・・後姿が寂しそうだ、肩が落ちている。

「夕食にしましょう」キヨさんが入って来た。「よく考えたねえ・・これはいいわ！」茶化された『げんぎょうさん』に大喜びだ。全て元通りにして最後の夕食が始まった。
手の込んだ心づくしの料理が並んでいる。忙しいだろうに・・キヨさんの気持ちが伝わってくる、山本も神妙な面持ちだ。

「明日は親たちが苦情を言いに来るかもなあ・・」「朝飯食ったら早めに逃げるか」小西さんが「俺たちが謝っておくよ」思いがけない言葉だ。和尚はいつ来るか分からんが、仏事を終えた和尚と一緒に帰る予定だそうだ。「お昼のおにぎりを作っておくからね」キヨさんの気持ちが嬉しい・・。本堂に戻って荷造りを終え、最後の風呂に入る。「明日は鐘を突いて掃除して・・修行の終わりか・・」

阿弥陀如来に『非』を詫びる・・表情に変化はないように見えるが・・薄目が開いている。
両側の仏像にも手を合わせ『礼』を言う。呆れているのか知らぬふりを決め込んでいるようだ。ドッと疲れが出て来た・・深い眠りに落ちた・・。

越波、去る時

爽やかな朝・・ではない、やや蒸暑い朝を迎えた。どうやら昨夜と同じ霊気が漂っているようだ。地獄の釜の蓋が開いたのだろうか・・亡霊たちが這い出して来ている気配がする。
いや、自分の気持ちが浮ついているのだ、越波に来て初めての感覚に戸惑う。山本はすでに起きていて両手を頭の後ろに組んで天井を見つめている。同じ事を思い出しているのだろう「あんなに泣き出すとは・・しかし面白かった・・あとは帰るだけか・・」

最後の掃除だ、いつもより念入りに時間をかける。ついでに阿弥陀如来もきれいにしよう。
普段は花を供えながらキヨさんがやるのだが、感謝を込めてご尊顔を拭く。雑巾で拭いたのが気に障ったのか口がへの字になっている。どうやら嫌われているようだ。回廊を掃き出しながら、集めたホコリをトカゲの住み家に押し込むが反応が無い。二日間イサムらと遊んでいたので姿を見なかったが、へそ?を曲げたのかも知れない。

気合を入れて鐘を撞く、何度も撞いたので間合いに迷いが無い。山本は惜しむように余韻に浸っている。イサムが顔を出すかと期待したが来ないようだ。村の人たちは鐘を聴きながら苦々しく思っているのかも知れない、山本も同調する。「なるべく早く帰ろうぜ・・和尚もいつ来るか分からんし説教されたくねえよ」

いつもと違う気持の落ち着かない朝食だ。この時が来るのは分かっていたのだが、箸の運びに表れている。小西さんらもどこかよそよそしい、と、「あっと言う間だったねえ」キヨさんが切り出す。毎年の事とは言え、やるべき準備はまだまだ残っている筈だ、感傷的になどなっていられないのだろう、笑顔に救われる。「・・でも、おかげで楽しかったなあ・・」「いい思い出になったよ・・」両氏の本音だろう、顔つきが変わってしまっている。

本堂に戻り阿弥陀如来に手を合わせる。キヨさんに宿泊料を渡しトイレを済ませ、小西さんたちに声をかける。現金なものだ、男同士なので連絡先など興味が無い。フィルムはとっくに使い切っているので記念撮影も無し『一期一会』そのものだ。八幡神社にも挨拶に行く、賽銭は無用だが拝殿の件については詫びを入れる。

小西さんらが回廊に出て来た。「じゃあ・・」軽く会釈して、来た時と同じ格好で階段を下りる。トカゲとシマヘビは姿を現さない・・やはり爬虫類との友情は芽生えなかったのか。

キヨさんが山門から下りて行った。道路で見送ってくれるのだろうが涙は見たくない。寺は村外れにあるので村人には気付かれないが、車と違って、歩くのでしばらく姿は見える。
何回振り返って手を振ればいいのだろう。気が重い。転校を経験しているので見送られるのも迎えられるのも苦手だ。

山門で振り返る、「元気でなあ・・」二人が手を振っている。目を凝らすと小西さんの足の間に見える敷居の隅でトカゲが手を・・見えるわけが無い。脇の草むらが揺れている・・カエルの女房か？・・バッタが跳んだだけだ。・・みんな幻だったのか・・

前を向くと、呼びにいってくれたのだろう、下の家の婆さんと赤ん坊を抱いた奥さんが参道の右側にキヨさんと三人で並んでいる。左側の川辺家は動きが無い、まだ7時すぎだイサムは寝ているんだろう。

愛くるしい、赤ん坊の透き通るような瞳に救われた・・涙の無い笑顔の別れだ。「冬以外はいつ来てもいいのよ」やさしい婆さんだ。「返事は書かないけど手紙は頂戴ね」いつものキヨさんにホッとする。「じゃあ・・ここでお別れします。お世話になりました・・」二人で頭を下げる。

奥さんが赤ん坊の手を持って振っている・・。しばらく歩いて振り返るとまだ姿が見える。
「もういいですよ・・」の意味を込めて深くお辞儀をする。察してくれたのか、顔を上げると三人は視界から消えていた・・。深くため息をつきながら「さあ、のんびり帰ろうぜ！急ぐ旅じゃなし・・」

「バカヤロー！」イサムの声だ。振り向くとパジャマ姿で何やら叫んでいる。「ほんとうに・・だぞう・・」・・「？・・又なあ～」大きく手を振ってやる。しゃがみ込んでそこら辺に石を投げ始めた。泣いているのか顔をあげない・・。「・・一番なついていたもんなあ・・」山本も寂しそうだ。蛇池の手前の道路が曲がる所で振り返る・・まだ下を向いたままだ、別れを信じたくないのだろう・・。

橋を渡り黒津への林道に出た。ここから先は現実の世界への帰り道だ、後ろを振り返る。山本も夢のような時間を思い返しているのだろう。「来た時は・・思いもよらなかったよなあ、あんなにいろんな事が起きるとは・・この橋から始まったのか・・」「まったくなあ・・」ずた袋を担ぎ直し、もう一度振り返る・・？・・橋も、歩いて来た道も消えてしまっている。対岸の高屋山の不気味な森が越波への入り口を閉ざしてしまった・・。全ては、夢、まぼろしだったのだろうか・・・。

「郵便局のオネエさんは黒津から来てるって言ってたよなあ」平坦な道が続くので、なんやかや言いながら、のんびりとてれてれ歩く。黒津の集落も人影が目につく。軒や入り口には『お迎え』の縄などが飾ってある。明日は盆の入りだ、黒津も越波も迎え火をたいてご先祖と再会するのだ。中には逢いたくもない嫌われ者の先祖もいるだろうが断るわけにはいくまい、早く帰ってくれるのを祈るばかりだ。

大須も含めて皆が願養寺に集合するという、俺たちのやらかした事は当然耳に入るだろう。キヨさんの申し訳なさそうな姿が目に浮かぶ。そして、法要が始まって和尚の読経が流れる・・。威厳を見せ付けて一人悦に入っている・・。陽一たちが大僧正を思い出して笑いをこらえている・・。事情を知った和尚が激怒、小西さんらを問い詰める・・。『やはり、あいつ

らを来させるんじゃ無かった・・』己の未熟さを思い知る・・。『わしも、まだまだ修行が足らんのか・・仏の道は遠い・・』出張所に呼び出されるかもなあ・・。まあ・・いいか、ガキの頃から謝るのは馴れっこだ・・。

そして国道へ出る・・イサムは何が言いたかったのか？「峠に出る幽霊のことだろう」山本が思い出す。「そう言えば泊った時に言ってたなあ・・道案内する女について行くと断崖から落っこちるとか・・」「イサムの話は面白い、もっと聴いてやりゃよかった」

相変わらずセミの鳴き声がやかましい・・別れを惜しんでいるのか、二度と来るなと言っているのか？山本に問うと「後に決まってんだろう」そりゃそうだ・・。急ぐ事もないがこのまま行けば来た時のバスに間に合うかも知れない。駄目だったら樽見まで歩くのも面白いだろう・・時間はたっぷりある。

胸躍らせて来た時は後ろなど振り返らなかったから・・目の前に広がる景色は、始めて見る新鮮な眺めだ。道が右に左に曲がり始め、峠の祠が視界に入って来たが距離はまだありそうだ。登っているので汗ばんで来ている。峠に着いたら一休みしよう、汲んできた水筒の水はまだ冷たいはずだ。

一台のカローラが下って来た、道が険しいのでノロノロ運転だ。右端へ寄ると、わざわざ止めて窓を開けさせて会釈を・・家族連れなのだろう、常識をわきまえた、優しそうなご主人がハンドルを握っている。助手席の男の子は口の周りがアイスクリームでベタベタだ、後部席には、おしゃまな女の子が乳飲み子を抱いた母親に寄り添っている・・。帰省なのだろうか、どこまで行くのだろう・・ひょっとして猫峠を越えて大河原の集落か？「気を付けて・・」全員が笑顔で手を振っている。家族を思いやる丁寧な運転だ、無謀運転の代名詞『三河』ナンバーだけに何故か笑える。

やっと倉見峠に着いた。とりあえず無事に戻って来れたので地蔵尊に手を合わせる。賽銭は・・止そう、無駄遣いはよくな

い。汗を拭いながら谷を覗く・・女の幽霊が崖の途中の岩陰に潜んでいそうだ・・。山本も「イサムの話も信憑性があるな、ここを夜一人で通ったら俺も着いていくだろう・・」ここからは下るだけだ、現実の世界が近づいて来た。

セミの声がはしゃいでいる・・いや、結構距離があるが左に大きく曲がった先に動いている子供らの声だ。木々の間に見え隠れしている、小学生の遠足か？１４～５人の団体だ。この暑いのに楽しそうに歌いながら急坂を登って来る。

さあ！帰ろう！バスには間に合いそうだ。腰をあげる、この先を曲がれば現れる筈の子供らと対面だ・・。？！！！・・二人とも脚が止まる。何と現れたのは美智江らよりちょっと大人の女の子たちだ。谷底を覗きながら騒いでいた彼女らも黙ってしまった。揃いの水色のジャージを着ている。首からタオルを掛けているので『学園』の文字しか見えない。高校生なのか？とりあえず声をかける「あ・・こんにちは・・」皆、うつむきながら声を揃える「こん・・にちは」蚊の鳴くような声だ。うぶな感じだ、１年生か？それぞれのお気に入りのマスコットがバッグにぶら下っている。やや離れてオレンジ色のジャージが５～６人、興味深そうにじろじろ見つめながら「・・ちわ」ばらばらだ、小首をかしげるのもいる。さらに遅れて緑色のジャージが５人、だらしなく歩いて来た。面倒くさいのか挨拶もしない。「フンッ！」ふてぶてしい素振りだ、アゴだけ突き出しているのもいる。３年生に間違いない。白いジャージは引率の教師か？にこやかに軽く会釈を返してくれた。親しみのある優しそうな女性だ・・。

期待したが誰も振り返らない・・。かすかに声が聞こえた「・・リラと・・ルみたい・・」
笑いながら隣の子と肩を寄せているのもいる・・。山本と顔を見合わせて苦笑いだ。
「それにしても可愛い子だったなあ・・」先頭を歩いていたポニーテールの子だ。山本も気になったようだ。「デビューした頃の吉永小百合みたいだ・・フィルムが在れば・・」！そうだ・・磯野に頼もう。イメージを言えば描いてくれるだろう。美大志望だけに絵はうまい。なにしろ電鉄会社の定期券を、罫線の入った普通のノートに色鉛筆だけで偽造したほどの腕前だ。ちょっと汚した定期入れに入れると見分けがつかなかった・・。山本が顔をしかめる「止めとけ、あいつはヌードを描

くに決まっている・・」それもそうだ。

「だけど・・」と山本「今のが幽霊じゃないか？こんな山の中にあんな可愛い子がいるわけが無い」確かにそうだ。振り返ると・・誰もいない！崖の中ほどの岩の割れ目から奇妙に這い出した松の木の間から崖っぷちの祠が見える・・。ここで命を落とした何代も前からの女の子らが、それぞれの集落に帰って行くのだろう・・そう言えば足音は聞こえなかったし苦しそうな顔もしていなかった・・。気が付くと・・それまで静かだったセミが鳴き出した。

能郷のバス停に着くまでは、何が起きるか分からん・・まだ夢の世界が続いているのだ。

「あら！生きてたの・・？」オバさんが笑っている。「ちっとも帰って来ないから・・心配はしてなかったけどネ・・どんなとこだった？」かいつまんで大げさに脚色して話す。
笑いながら「不思議は事なんか、ここに住んでりゃいつものことよ・・」一服していた運転手が「君らか？変わった高校生と言うのは・・」同僚から聞いていたようだ。

「さっき、女の子らとすれ違ったけど・・」「ああ・・名古屋の女子校だよ、ここんとこ毎年来てるかな・・5月に来たり・・先生が越波の人で、実家で合宿・・とか言ってたわ・・」何と、イサムの話は本当だった。「そのことを叫んでいたのか・・」山本が笑う「あのやろう俺たちが引き返すと思ったのか・・まったく！」二人とも同じ事を考えている・・「まだ追いつける・・もう一日泊ろうか・・」

そうか！先生はイサムの歳の離れた姉さんか、面影があったので親しみを感じたのだ。
「まったく、よく喋る娘たちだよ、朝早いから初めのうちはカーカー寝てたけど、乗客が減ってからは笑って、食って・・ありゃ先生も大変だな・・」

「異常、ありません」足回りの点検を終えた若い車掌が呼びに来た。運転手がコップの水を飲み干す。ボンネットを閉じて、さあ出発だ！オバさんに「あの饅頭と羊羹、うまかったよ」礼を言う。「そうかい又、持ってきな・・どうせ・・」分かっている・・。紙袋に入れてくれたので笑顔で在り難く頂く。

最後部の座席に座り、振り返るがオバさんの姿は無い。あたりまえか、何にも買ってない。
バスはのんびりと走り出した、蒸し暑いので窓は全開だ、樹木や草花の香りが山側からの風に乗って入って来る。「今のうちに、食おうぜ！」山本が袋から紙包みを出す。おむすびが四つ並んでいる。粟や稗が混ざっているが米の分量が多い、麦混じりの方も同じようだ。檀家との会食は大丈夫なのだろうか？しょっぱい梅干と、たくあんの歯ごたえがキヨさんを思い出させる・・。

「ん！」新聞紙をたたんでいた山本が床に落ちている二つ折りの紙切れに気付く。何だ？『ありがとう』不ぞろいだが気持のこもったキヨさんの字だ・・。「礼を言うのは・・俺たちの方だよなあ・・」「あんなに心配かけて・・」二人とも顔が曇る・・。バスが左へ大きく舵を切った。前の座席を掴もうとした時、指の間から紙切れが・・蝶のように窓から逃げて行く・・目で追うが、しばらくして・・根尾川に消えた。夢の世界に別れを告げる・・。

お盆の日々

青々とした田んぼが広がってきた・・。「イサムたちが初めて目にした光景だ・・どんな気持だったろう・・」山本が呟く。

二人とも半分ボーッとしながら窓の外を眺める・・焦点は合っていない。路線バスだけに乗り降りが頻繁だ、乗客を眺めていると現実の世界に帰ってきたことを実感する。越波はすでに遥か彼方の過去の世界に姿を消してしまった。

友達は皆、どうしてるだろう？「組み合わせに恵まれたから、いいとこまで行けるかもな」加藤が張り切っていたが、仲間割れしなかったか？弱小バスケットクラブを率いる野澤は・・口先ばかりの奴らに足を引っ張られていないだろうか？仲の良い女子は・・又、会場を間違えて不戦敗か・・反省会と称して柳ヶ瀬の『ねの日』で大盛りナポリタンを食いながら何でも人のせいにしてるに違いない。ばくちでコツコツ貯めて１０段変則のドロップハンドルを買い「日本一周をして来る」と言っていた細江はどこらへんを走っているんだろう。日本海が好きだと言っていたが、東尋坊には立ち寄ったのか？浴衣姿で腕組みして下駄を脱ぎ、大地と会話しながら目を閉じて海鳴りに聴き入る文豪気取りの観光客の背中を、そっと押してはいないだろうか？「まったく、お前はろくな事考えない・・」山本が呆れて続ける「９月になったら物理を教えてもらう約束だから何かあったら困る・・」

岐阜の市内に入って来た。「フィルムを出して行こう」途中下車してカメラのタナハシへ寄る。お盆に入るので仕上がりは１６日の午後だ、２時過ぎの岐阜はいつものように蒸し暑い。
山本の下宿で別れる、「晩飯、食いに行くぞ！ヒロ子さんに言っといてくれ」まだ越波の続きだ、下宿のおばさんは親戚らしいがお盆で実家に帰ったらしい、しかたあるまい、いつものことだ。

母親が呆れている「どこに行くかちゃんと書いて行きなさいよ・・『山の中の寺』だけでは皆に説明できないじゃない・・しかもいつ帰って来るか分からんし・・」どうやら毎日のように誰かが来ていたらしい。荷物をかたづけていると、大田が来た。留守中の出来事を色々と話してくれるが・・呑み込めない・・頭の中が混乱している。まるで浦島太郎状態だ。山本が来たので、一緒に越波の出来事を詳しく聴かせるが、美智江らの話は全く信用していない。そりゃそうだろう。土産代わりに羊羹と饅頭を食わせる・・やっぱりまずそうだ、顔が歪んでいる・・残りは捨てる・・。

「わざわざそんな処へ行かなくても・・」母親がせせら笑う「山本君の実家と変わらんでしょうが・・」山本が箸を止める「おれん処は家の前をバスが通るよ・・まいったなあ・・」
どうやら野澤に聴いたらしい。「バスケットの試合を観にいったら、竹かごを背負って逃げる奴に皆で芋や玉ネギを放り込んで・・審判は軍配をもった行司が・・」メチャクチャな話だ、確かに和名は『篭球』と書くが・・村の運動会じゃあるまいし。山本が呟く「あいつは中学の時、俺の学校にコテンパンに負けたからなあ・・まだ根に持ってるのか・・」

母親にしてみると、息子の友人関係は面白くてしょうがないようだ。明るい性格なので、皆から慕われていたが人物評価は結構厳しい。山本や加藤は口数が少なく賢く見えるらしい。細江は来る度に景品を持って来るので評価は高い。大田はいつまでたっても電話番号を覚えないので馬鹿扱いだ。５７３５を５７１２と勘違いしている「まったく・・九・九を言えばいいのに、何で足し算するかね・・」野澤については、「ちゃんと靴を揃えて・・礼儀正しい、箸の持ち方もきれいだし・・」聞いていた山本が反論する。「おばさん！あの黒ぶちメガネに騙されたらいかんよ、何を考えているか分からん奴だ・・」
「でもね、仔猫を貰ってくれた時も果物をお礼にくれたのよ・・元気で可愛がってもらってるんじゃ・・」
山本が続ける「いや！今頃は牛馬の如くこき使われて・・檻の中ではハツカネズミのように発電機を廻しているかも知れんよ・・」山本の悔しさが可笑しかったのか飯を大目によそってやっている。「確かに、繁忙期は猫の手も借りたい・とは言ってたわね・・」

「そのキヨさんはいくつぐらいの人？」興味があるのだろう「おばさんと同じくらいで４０過ぎだと言ってたなあ、顔はふけていたけど・・」二人とも今朝の出来事がずいぶん前の事のように思えている。不思議な感覚だ・・。「お盆に帰らなくてもいいの？」母親が尋ねる・・。周りの家は提灯を下げて玄関先など掃除されて、いつもよりきれいだ。切花が束になってバケツに入っている。

「明日の昼に帰ろうかな・・一緒に来ないか？」「かまわんが・・迷惑じゃないのか？」山本がうろたえる「お前の口から迷惑という言葉が聞けるとは・・」失礼な！人を何だと思ってる・・。

飯を食ってる間にも電話が入って来る。中学の同級生や修理屋の馬鹿息子たちだ。面倒くさいので「明日の午後に連絡する・・午前中はお迎えの準備で忙しい・・」我が家は地元ではないのでお盆のしきたりは無い。とりあえず逃げることにする。

山本にしてみれば証明したかったのだろう。今のままでは分が悪い、そのうち尾ひれがついて『四角い穴の開いた硬貨を使ってる』だの『のろし』で合図を送っている等と言われかねない。バスは武芸川を遡って行く・・。岐阜の市内よりは緑に囲まれているので気温は少し低いようだ。確かに普通の農村の光景が広がっている。バスを降りると「よく見てくれ、まだまだ奥に集落が在るんだ！」小さくなったバスが見えなくなるまで優越感に浸っている・・。

途中の肥溜めが目についた。越波の便所を思い出す・・カエルも・・。トタン屋根からノート？がぶら下がっている。「あれでケツを拭くのかよ？」笑いながら「あそこの爺さんの商売というか道楽というか・・」相当な達筆で、古い障子紙を束ねて帳面を作り、綴紐もこよりを自分で作るとのこと。「・・で・・何を・・」「古文書だよ、財宝のありかや秀吉の正体やら、歴史研究家が喜びそうな内容で、半年ぐらい吊るしておいて物置や屋根裏にしまっておけば出来上がり・・と言うわけだ」「後は骨董家を呼んで、こんな物が出て来た・・」

山本が歴史を真に受けない意味が分かった「記述なんぞは、時の権力者が都合よく書き残すもんだ・・」確かに・・言われりゃその通りだ。

優しそうな家族だ。よく似てる兄さんも姉さんも頭が良さそうだ、突然の訪問にも嫌な顔をしない。名前は出せないが馬鹿

な奴の家に言った時を思い出す。母親は多少まともな事を言っていたが、鴨居に飾ってある先祖までふざけた顔をしていた。飼い犬だけが賢そうに見えたのを思い出す。

夕食まで近所をぶらつく・・神社や中学校へ行ってみる。野澤の言う「篭球大会」を思い出す。イカン！笑いがこみあげてくる。本当のことではないのだろうか？死んでも山本には言えない。

さすがに盆の入りだ、家々の庭先には他府県ナンバーが並んでいる。山本も実家にはめったに帰らないので近所の人と丁寧に挨拶を交わしている。子供のころから好かれていたようだ。武芸川の土手に腰を下ろす。夕日を眺めながら「あの山の向こうに越波があるのか・・」
あえて話題にはしなかったが、やはり思い出してしまう。

「子供らはがっかりしたろうな・・」「先生にも挨拶したかったし・・陽一も要も・・郵便局のオネエさんにも・・」もう、和尚は寺に入ったか？キヨさんが、緊張して休みなく動き回っている光景が目に浮かぶ。

のんびりと二日が過ぎた。おやじさんが「川で魚を突こう」退屈しているのを察して誘ってくれる。越波での生活が余りにも強烈で濃密だったので、のんびりするのも決して退屈ではなかったのだが・・。夕闇が心地よい、カンテラのカーバイドが郷愁を誘う、寝ているフナなどをモリで撞くのだが加減しないと岩で刃先が潰れる。ゴムで引くので面白いように突ける・・山本も陽一を思い出しているようだ。「やっぱり、あいつは凄い！」

盆の最中に殺生は・・おやじさんが笑って「ちゃんと手を合わせて食ってやればいいんだよ」おおらかなもんだ。しこたま酒を飲まされて朝まで爆睡だ・・。

１５日は、朝から二日酔いだ。一緒に最終のバスで帰ることにしていたが、昼過ぎまで気分がすぐれない。おやじさんたちは、しきたり通りに盆の行事を進めながら山本に何やら声を掛けているが本人は生返事だ。

おばさんと姉さんが野菜や漬物を袋に詰めて、嫌がる山本に無理やり手渡して「元気でね・・」そんなに遠い距離ではないが末っ子の身を案じている。

幻想的な盆提灯に照らされた庭先まで見送られ丁寧に礼を言う。同じ型のバスに乗ったので能郷のオバさんを思い出した。揺られて武芸川を去る・・夜とは言え、いつもの蒸暑い岐阜に入る頃・・山本が切り出す「もう一回、行かねえか」同じ事を考えていたのだ・・。

明日、写真を取りに行って・・夕方なら和尚も出張所に戻ってんだろう、余り長居はしたくないだろうから・・とりあえず電話で謝ることにして「だめだったら黙って行こうぜ・・」

家には帰らずに山本の下宿に泊まる。頭の中はすでに越波へ飛んでいる・・。真剣に勉強しよう、誰もいないから本当の修行だ、余計な物は持って行くのはやめよう、カメラもいらないだろう・・あれ以上のことは起きやしまい。ただハガキはたくさん持って行こう往復２回はやりとり出来る筈だ。何より郵便局のオネエさんと会話がしたい・・。

家へ帰る前に写真を取りに行く。良かった！失敗はないようだが、意味のない風景が多過ぎる・・。荷造りした山本と夕方に家へ帰る。「みんな、怒ってたわよ！まったく・・明日来るらしいから・・」母親に苦情を言われたが空返事だ。美智江に手紙を書いていると大田が入って来た。事実と知って押し黙っている。大田を送り出しながら近所のポストへ投函する。さあ和尚へ電話だ・・。

やはり帰っていた、奥さんが取り次ぐ・・嫌な間合いだ・・「おう！・・君か？」晩酌中なのか・・お盆が済んでホッとしているのか？声に凄みが無い・・横で山本が息を詰めている。「いろいろ・・お世話になり・・」「おう・・ご丁寧に・・」やはり酒が入っているようだ。「実は、又・・お邪魔したいと思・・」「なんだ、そうか気に入ったか・・いい所だろ」やりとりを聴いていた山本がこぶしを握る！「ただ・・あんまり村人を驚かせるなよ・・
そうか・・気に入ったか・・好きなだけ居ればいい・・住んでもいいぞ」「ありがとうございます・・」「そうか・・気に入ったか・・」礼を言って受話器を置く。

あまりの展開に拍子ぬけする。「どうなってんだ？・・」二人で声を揃える・・そして同じことを考えている「もっといりゃあ良かった！」晩飯を食いながら母親に伝える・・。
呆れている「私は知らないよ・・」

明日は早い、むさ苦しい部屋でビールを飲みながら横になる・・胸のつかえが取れたので死んだように寝た・・。

再び越波へ

《越波へ行く・・帰りは分からん》いつもながら親不孝息子の書置きを部屋のドアに貼る。
家族はまだ寝ている・・音を立てずに外に・・隣家の婆さんと出っくわす「シーッ！」まるで夜逃げだ。バスターミナルは帰省のUターン客と盆明けの通勤客で結構混雑している。世の中は通常の時計の針が動き出しているのに、能天気な高校生が二人ズタ袋を担いでへらへら笑っている・・見るからに頭が悪そうだ。他人の目は構うまい「俺たちだけの別世界へいざ

出発だ！」

２度目だけに行動には余裕がある、母親の忠告通り『鮎菓子』を買う、もちろんキヨさんへのお土産だ。そして逸る気持ちで始発バスに乗り込む。道草をしなければ昼過ぎには越波に到着だ。「電話をしておく」和尚が言っていたのでキヨさんは昼飯を用意してくれているだろう。

後ろ髪を引かれる思いで越波を去ってしまったが、僅か一週間で又訪れるとは・・何が俺たちを引き寄せるのだろう。日常では想像もつかなかった出来事の連続で毎日が楽しかったのは間違い無い。テレビなどとは無縁の大自然に囲まれての生活は余りにも充実していたが、やはり初めて出会えた人々の優しさが一番心に残ったのだろう。過酷な運命に翻弄されながらも暖かく接してくれたキヨさんにはもっと恩返しをしたい。西村先生や郵便局のオネエさん、下の家の婆さんともっと話がしてみたい。子供らとも遊んでやらねば・・花札は持って来たはずだ、それに好評だった冷たいコーヒーも飲ませてやろう。

岐阜市内のギラつく太陽から逃げるようにバスは進む・・北へ西へ・・。そして根尾川に沿って山あいに入って来た。やはりお盆を過ぎると空気が変わってしまうのだろう、窓から入って来る風は爽やかだ。「この前より遅くねえか？」山本が時計を見ながら呟いた。前回はあれこれ想像しながらバスに揺られていたので時の経つのが早かったのだ。二回目ともなれば、この先の光景は全て頭の中に焼きついている。「・・う～ん、そうかもな・・」

「おやまあ、又来たのかい？名古屋の子はもう帰っちゃったよ！」オバさんにしてみればからかい易い小僧らなのだろう、好き勝手なことを言っている。こちらも調子を合わせる「え～がっかり・・帰ろうか・・」笑いながらアイスキャンディーをほうばり、ネスカフェやお菓子を買い込む。「そんなに・・いい所なのかい？」新顔の運転手と車掌も話しに加わる。「親戚でもいるのかね？」「実は・・」いきさつを話すと「寺の本堂で寝泊り・・？何と物好きな・・しかも歩いて行くんだろう？」いいのだ自分らは好きでやっているのだ。

「ヨシッ！」腰をあげる、「途中で食べな・・」オバさんがせんべいと飴をくれた。「気を付けんだよ・・」振り返ると手を振っている。「ありがとう・・又来るね・・」二人で大げさに手を振る。「又、饅頭と羊羹かと思ったぜ・・」笑いがこみあげてくる「やっぱり何か買わないと手を振らねえんだな・・」分かりやすいオバさんだ。

相変わらずセミがやかましいが、どこと無く力強さが感じられない・・そして気が付けば赤トンボが出迎えてくれている。あれほど生い茂って日陰を作ってくれた木々も少し手を抜いているようだ。どこまでも澄み切った空は更に深みを増したのか山の稜線がはっきりしている。

距離や状況が分かっているので無理はしないが、峠までは一気に進む。祠の地蔵尊に再訪を伝え無事を祈る・・始めは迷惑そうな顔をしていたが、賽銭を置くと表情が和らいだ。
この世は全て銭次第なのか・・嗚呼。

これから先は下りの連続だ、昼過ぎには着く・・と、後ろからエンジン音が近づいて来る、振り返るとトラックだ。「どこまで行くんだ？」顔はごついが優しそうだ。２０代後半の腕の太い逞しい兄貴だ。「越波」と告げると「黒津まで乗ってけ！」有り難い！時間が稼げる。訊けば、福井県の大野まで行くとのこと。やはり何度も不思議な体験をしているようだ。一度、夜中に峠付近で人影を見たことがあり、以来昼間しかここを通らないと言う。仲間うちでも噂にはなっていて、よほどの事が無い限り夜間走行は避けているようだ。「・・で・・その人影は・・どうなったの？」「祠の中へ入ったと言うか消えたと言うか・・」通り過ぎてからバックミラーを覗くと、祠から這い出して来るのが見えたと言う・・。思い出したのか表情が強張っている。

「修行、頑張れよ！」真に受けてはいないだろうが、せんべいを2枚分けたのが気分良かったのか笑いながら大河原へ向か

って走り去った。この先にある温見峠はどんな処なのだろう?大河原の集落は・・大須の集落へもそのうち行ってみたい・・。あれやこれや想いをめぐらすが、自分の足で歩いて自分の目で見なければ実際のことは判らんし人に伝えることも出来ない。「越波のことだって能郷のオバさんも知らないだもんなあ。」山本も不思議がる・・。

国道から黒津の集落へ入る・・小さな集落なので通り過ぎるのも早い・・。人影もまばらで、盆の入りのざわめきは嘘のようだ・・祭りの後の寂しさが漂っている。「昨日は夕方まで、ずいぶん車が帰って行ったのよ」能郷のオバさんが言っていたが、行きかう車もなければ、人にも出会わない・・前回来た時と同じ光景だ。急げば昼には着きそうだが、あわてる事は無い、ここの時計の針に合わせよう、ゆっくり歩くだけでも心が満たされる。

そして、橋までやって来た。万感の想いを込めて別れを惜しんだ地だが、魔界ではない、優しい人たちが暮らす別天地への入り口なのだ。道がゆるやかに下り、川に近づいて来た。河原が広がっている、蛇池だ・・みんなで遊んだ光景が・・楽しそうな笑い声が聞こえてくるようだ。イサムはまだ残っているのか?陽一は、要は・・。

ついに戻って来た!イサムの家が目に入る・・が、戸板が打ち付けられ元の姿に戻ってしまっている・・。「・・だろうな・・帰ったか・・」山本も残念そうだ。参道に入ろうとすると下の家の婆さんが顔を出した。「やっぱり来たんだね・・そんな気がしたんだよ」よかった!邪魔者扱いされていなかった。山本と顔を見合わせ、胸をなでおろす。

山門をくぐると・・何と!白井さんが回廊で手を振っている。「待ってたぞー」とりあえず再会を喜ぶ。小西さんだけ和尚の車で昨日の早朝に帰ったとのこと。「模擬試験が気になったらしくて・・」無理もない遊んでばかりいたのだから・・。どうやら白井さんの方が集中力が高いのだろう。「でもすぐに戻って来るらしいよ」二人とも越波にすっかり魅了されてしまっているようだ。

庫裡へ顔を出す、笑顔でキヨさんが迎えてくれた、『鮎菓子』を渡し「又、お世話になります・・お礼の手紙はお盆過ぎに出そうと思って・・」型通りの挨拶だが少し照れる。「すぐにお昼にしましょう、用意はしてあるのよ」本堂に荷物を降ろして阿弥陀仏に手を合わせる「今度はおとなしく勉強しますので・・なにとぞ・・」心にもないことを誓う。気のせいか仏の顔に脱力感が・・やっと悟りの境地に達したのだろうか。

席に着くなり「もう一日いて欲しかったよ・・」白井さんが続ける「凄かったんだ・・女子校の・・」目が泳いでいる。キヨさんもニコニコしながら頷いている。「・・大はしゃぎしっぱなしでね・・」どうやら彼女らは越波に着くなり本堂に入って来て、唄って踊って大騒ぎしたらしい。本来なら躾・行儀・規律を重んじる空間なのだが、気難しい僧侶がいなけりゃ開放的になるのは理解出来ると言うものだ。

川辺家に一泊して、山里のお盆を少し体験して昼過ぎには帰ったとのことだが、女の子らしく掃除もして、なかなか行儀は良かったらしい。「イサムはどうしたろう・・」山本が箸を止めて呟く・・。「二人が帰ってから、しょんぼりしてたけど分校にみんなを集めて説明したみたいよ」そうか・・イサムで始まってイサムで終わったんだ・・。でも女子高生に囲まれて楽しかっただろう、オロオロする姿が想像出来る・・。

「和尚さんに怒られるかと思ったんですよ・・」山本がキヨさんに話しかける。「？なんで・・」
拝殿の床板の件やお化け大会騒動について耳に入ってるはずだが・・。「愉快そうに酒を飲んでたわよ、村の人から、子供たちと遊んでくれた、って色々聞かされて・・」「嬉しかったんだろうね、毎晩だれかが来て飲んでたわよ。・・今まで見たことないわ・・」正の母親から布団とうちわの『権現様』の話が出た時は、さすがにムッとしたが、余りにも楽しそうにその時の状況をみんなが口にするので「わしも見たかった・・」

確かに、物を壊したり汚したことは無かったので、その点は心配しなかったが村の人たちの心証についてはやや不安だった。

「それに・・」とキヨさんが続ける「毎朝の掃除と鐘突き、マキ割、畑仕事も手伝ってくれましたから・・と言っておいたわよ」

和尚にしてみれば、ひと月前のキヨさんとのやりとりを思い出したのだろう。盆の最中でピリピリしているはずが、はつらつとして動き回っていて村人にも酌をしている・・。心配することなど無かったのか「あいつらも、それほど馬鹿じゃなかったか・・で、勉強は？」

朝から晩まで遊び呆けていた、と訊いて「・・やっぱりな・・」

ありがたい！キヨさんの助言がだいぶ効いたようだ。それに村人の心境も察しているだけに、子供らの事とは言え感謝されたのは、よほど嬉しかったに違いない。あの拍子抜けした電話の意味が分かったが、その事を白井さんとキヨさんに話すと大笑いだ。「へ～・・聞きたかったね・・」

白井さんも一緒に食後の散歩に外へ出る。わずか一週間で寺の周りも村も別世界になってしまった。あの熱気はイサムや陽一らの家族とともに越波から消えてしまったのだ。分校へ行ってみるが西村先生も家族で実家に帰っているらしく、寂しいほどの静かさだ。裏手を流れる谷川のカジカと蟹だけが騒いでいる・・。

「何というのか・・独特の雰囲気が漂う盆供養だったよ」白井さんが語り出した。本堂がいっぱいになるほど村人が集まっての法要は、その歴史もさることながら、この地に残るしかなかった人たちと、去る覚悟を決めた人たちの、心情を判り合える唯一の機会なのだろう。しかも、それは年を経る度に顔ぶれが一人二人と消えていく・・決して増えることはないのだ。秋の祭礼に来れなければ、雪の溶けた春にしか会えない。此処には他の地域のような正月の風景はないのだろう。

「みんなバラバラに帰って行ったけど、寂しそうだったね・・毎年の事なんだろうけれど・・」

いっしょに遊んだだけに白井さんもイサムらの気持ちが痛いほど分かったのだろう。「家に帰っちゃえばすぐに友達と遊んで元気になるんだろうが・・この越波が故郷というのは、羨ましいよ・・よそ者だから言えるかも知れんが・・」自分も山本も校庭の鉄棒に寄りかかりながら頷く「不思議な処だよね・・」

子供らが家から出て来た、話が通じないが相手をしてやるか・・。さっそく山本にぶら下がって喜んでいる。童話にでてくる優しい赤鬼とでも思っているんだろう、絵になる光景だ。いっしょに寺へ戻るが、スズメバチが以前よりも目に付く、活動が活発になっているようだ。「ハチを驚かさないように・・しないと・・」キヨさんが欄干に布団を干しながら声をかけた。子供らも親に言われているようで絶えず周りに注意をはらっている。

色がつく程度の少量のネスカフェにたっぷりの砂糖を入れて冷たい水を注ぐ、子供らが大好きな飲み物だ。「初めての味覚なんだろねえ・・」白井さんが優しい眼差しで眺めている。

「お兄ちゃんたちは・・どこに行っちゃったの？・・」あえて訊いてみる・・。もじもじしながら顔を見合わせている・・「あっち・・」蛇池の方を指差す・・。陽一らも同年代と遊ぶので、この子らの相手をしないのだろうし、いつも兄弟姉妹でいっしょなのであまり寂しさを感じてないようだ。

道路まで子供らを送り出す。「朝、食事中に電話があってね」白井さんがコーヒーを飲みながら続ける。「あの二人が今日来るって・・キヨさんが喜んでね・・俺も嬉しかったよ」

ホッ！とした表情が子供のようだ。「で、小西さんはいつ戻って来るの？」「明日の模擬試験が終わったらすぐに来るとは言ってが・・」どうやら下の家のおじさんのダットサンを予約したらしい。

なじんだ畳に寝っ転がる、懐かしい感触が戻って来た。見た目には変化は無いが、お香の匂いが障子や柱にまとわりついている。大勢の村人の気配がまだ漂っているようだ。そして鴨居には、寄進者の名前と供物を書いた真新しい半紙が貼ってあ

る。もちろん金額の多い順番だ・・嗚呼。

「オッ！来たぞ・・」山本が顔を向ける。見るとトカゲが入って来た。しばらく周りをチョロチョロしていたが、陽の当たる畳の上でジッとしている。喋れたら面白いだろうに、女子高生たちの馬鹿騒ぎには、さぞ驚いたことだろう。

ズタ袋から本を取り出し机の下に並べる。前回で懲りたので荷物は半分ほどだが、秋の訪れが早そうなのでパジャマ代わりのジャージを突っ込んで来た。今回は葉書をバンバン出す予定なので住所録は忘れてくる訳にはいかない。高校の分は山本が、中学の分はお互いに持参だ。計画しても達成出来ないのは分かっているので、お互いに好きな科目しか持って来ないが、辞書などは共用だ。これだけでもずいぶんと軽い・・。

暮れ六つの鐘を突きに白井さんが出て来た。やはり夕暮れは早い・・。昨日の今頃は、和尚に恐る恐る電話を入れた時間だ、一日がアッと言う間に過ぎて行く・・時間は大事にしよう、ヒグラシのもの寂しげな鳴き声もさすがに弱々しい。８月はすぐに終わってしまう。

盆の残り物だが缶詰や肉が豊富に並んでいて、夕食は豪華だ。麦の入った飯だが何も考えずに流し込む・・。赤貧の家で育った訳ではないが、食い物に文句を言ったことは無い、元来、味に対する興味や欲を持ち合わせていないのだ。山本は農家の息子だけに食物を粗末にしない、収穫までの苦労や挫折そして歓びも全て体験している。

口数の少ない白井さんだけにキヨさんと二人だけの食事はお互いにつまらなかっただろう、「やっぱり食事は賑やかな方が美味しいわね・・」笑顔でお茶をついでくれているが、ふと眉を寄せた・・この夏が終われば・・いつものたった一人の生活に戻ってしまうのか・・。

「郵便屋さんは明日来るはずだわ・・あの人も頑張ってるんだよ・・」折越林道を上大須までカブで行くとの事、この地区の３集落と大河原を受け持っているのだ。辺境の土地で暮らすと言う事は、現実を受け入れるのはもちろんだが、覚悟と度胸が据わってなければ生きていけないことを思い知る。

本堂に戻り回廊に腰を下ろし慣れ親しんだ光景を眺める・・「明後日には小西さんも戻って来るのか・・驚くだろうな・・」山本が続けて「やっぱり来て正解だった・・」短い期間ではあるが、この地にいられることを感謝する・・よし！この状況を皆に伝えよう、葉書を取り出す。誰に書くか迷うが、返事を書きそうもない奴はもちろん無視だ。何故か中学時代の女子ばかり頭に浮かぶ・・。暇そうな大田にも出すか・・？家が近いので今日も来たはずだ、きっと怒っているだろう。

山本は、根が真面目なので相手をちゃんと選んでいる、同級生と担任だった教師にも書くと言う。自分はと言うと、洒落や冗談が通じない奴は御免だが、そうなると限られてしまう、人のことは言えんが頭の悪い奴ばかりだ・・ひらがなで書くか・・。

「美智江たちにも出すか・・？」山本も気になっていたようだ。まさか又、越波に来ているとは思わないだろうから驚くかも知れないが・・。「止めようぜ・・済んだことだ・・」
母親から注意されている「中学生の女の子なんか夢中にさせるんじゃないよ！出会えたのは『運命』なんて勝手に思い込んでいるだけだから・・」

母親本人が異郷の地、満州の大平原で、見たことも無い大きさの夕日が地平線に沈む荘厳な光景に心を奪われていた時、今まで気にもかけなかった男に寄り添ってしまったのだ。
１８歳のことだ・・今でも後悔している・・「何であんな男と・・」息子から見てもそう思う・・似合わない夫婦だ。さすがに友人らは面と向かっては言わんが「お前のおふくろは
心が広い・・」皆分かっている・・。

電気を消すとお馴染みの影絵が現れた、何も変わっていないようだが、あきらかに虫のオーケストラの団員が増えている。「トカゲやカエルがタクトを振っていたら面白いだろうな・・」「まったく・・お前の想像力には呆れる・・みんな食われちまうだろう・・」山本も、やっと冗談を返すようになって来た。

さあ又、修行の始まりだ・・鐘を突いて・・掃除して・・廊下を廻ると「イサムら楽しそうだったよなあ・・」山本がつい一週間前の出来事を振り返るが、遥か昔の事のようだ・・。長持ちも木箱もそのままだ。そして肖像画の上人だけが不気味な威厳を保っている。

「小西さんは、今日が模試ですか・・？」山本も真剣に受験を考えているので、先輩の動向が気になるようだ。自分は目標がぼやけているので真剣に考えたことはないし、大学に通っている姿も想像出来ない・・たぶん行かないだろう。「意気込んでいたけどなあ」白井さんも小西さんの遅れを心配している。みんなに好評のタクアンをキヨさんが足してくれながら「みんな受かるといいね・・」すでに家族のように思ってくれている・・。

子供らが遊びに来そうもないので集中出来る。今回は漢詩と徒然草に没頭したい、受験には関係ないが読んで・・書いて・・解らなくても飽きる事が無い。越波にちなんで平家物語も読んでみよう。山本は細江に物理の特訓を受けるので、基礎から頭に叩き込むつもりだ。物理の参考書を持ち込んでいる。

１０時近くなったのでｺｰﾋｰを作る。回廊に座っていると、スクーターの音が・・。配達のオネエさんだ。ハガキを持って出迎えに行く・・。「・・え～・・いつ来たの？」驚いている。「来年も来るかねえ・・」と、キヨさんと話していたと言う・・。「いい処でしょ・・毎年来なさいよ」と言ってくれる。「村の人も喜んでいたわよ・・子供らが、よその人とあんなに喜んで遊ぶとは・・」良かった、評判が悪ければキヨさんが白い目で見られてしまう。

「3人も・・どれが彼女？・・返事が来るといいわね・・」いつものいたずらっぽい笑顔で林道を登って行った。「俺も中学の同級生に出すかな・・」山本が呟くが・・「お前みたいに、くだらない川柳や狂歌は書けねえし・・」と溜息をつく。「止めとけ！俺の馬鹿がうつったと思われるぞ・・」・・山本が妙に納得するが、中学の生徒会長で優秀だっただけに、恩師にはくだらん内容の手紙は出せないのだろう。

池の脇の茂みにシマヘビの模様が見える・・みんな元のままだ。あとは小西さんが戻ってくれば《越波劇場》の幕が開く・・。それにしても・・スズメバチがいやに飛んでいる・・、子供らが来ない訳だ、刺激しなければ襲っては来ないだろうが・・気を付けよう。

そして・・翌日・・昼前に下の家にダットサンが到着した。3人で山門まで迎えに行く。「お～・・来てたんだ・・今度は最後までいるんだろ・・」小西さんの表情からは浪人生の憂いは感じられない・・我々同様に、この別世界『越波』に魂を抜かれてしまったのか・・？

空き地に車を止めておじさんが降りてきた。我々を見つけて「・・やっぱり来たか・・岐阜は暑いもんなあ・・」そして「おふくろに聞いたけど《お化け大会》面白かったらしいな・・子供らを泣かせたんだって・・？」しばらく間をおいて「そう言えば、女の子も泣かすし・・まったく・・」返事に困ったが「ちゃんとお礼の手紙が来ましたから・・」と山本が照れながら応じる。

ひさしぶりに4人揃っての昼飯だ。「・・名古屋は暑くてさ～・・あんまり・・出来なかったよ・・」小西さんが言い訳を始めた、「ここに比べれば・・仕方ないよ・・」白井さんが同調するが本音は分かっている。「膝の具合は・・どうなの？」山本が思い出したように尋ねる。痛みが取れたらしく、さっそく今日から走るとのこと、強い意志が伝わって来る。キヨさ

んには、４人それぞれの行動や考え方が可笑しくてしかたがないようだ、優しく微笑んでいる。表情から、この穏やかな時間の流れが進まないように願っているのが伝わって来る。

陽がやや傾き出した頃、小西さんが庫裡から出て来た。「橋までのんびりと行って来るよ・・」
気合が入っている、高校で使っていた短パンと半そでシャツ姿だ。屈伸運動を始めて腕を廻し・・「アッ！」と叫んだ、左腿の後ろを掴んでいる・・「刺された・・」スズメバチだ。「・・牛アブかと思ってたよ・・」駆け寄ってキンカンを塗る。すぐに振り払ったので大したことはないようだ。「今日は・・止めておくよ・・」出鼻をくじかれて悔しそうだ。

スズメバチ２

夕飯の話題はスズメバチだ、「急に動いたり、物を動かす時は気を付けてね・・」キヨさんが注意を促す。「私みたいにノロマでいいのよ・・刺されたことないもの・・」みんな箸を止めて顔を見合す・・キヨさんが軽口を・・。

風呂から上がると、居間で麦茶を飲みながら先輩が待っている、キヨさんも加わって初めての夜のお茶会だ。「陽一たちが本堂に来て・・しばらく階段に座っていたよ・・どこかに隠れているんじゃ・・？って、みんなで話してたなあ」と小西さんが思い出す。「ちょっと・かわいそうだとは思ったんだけど、大騒ぎになっちゃったから・・」神妙に答える。「でね・・昼過ぎに、今度は女子高生が押し寄せて来て・・何事かと・・？」小西さんの狼狽ぶりが目に浮かぶ。「君らがいたらどんな展開になったか・・と？」「途中で会いましたよ・・可愛いのがいたでしょう・・戻ろうかと思ったんだけど・・」聞いているキヨさんも大笑いだ。

車の中での和尚はすこぶる機嫌が良かったそうだ、「キヨが嫌な思いをしているのでは？」と案じていたらしく、小西さんも昨年の騒動を知っているので「キヨさんに迷惑をかけないように心掛けていました」と報告したとのこと。又、村の人がマムシの件や子供らと遊んでくれたことに、「あんなに喜んでくれるとは・・思わなんだ」毎年のこととは言え、嫌味な愚痴を訊かずに飲む酒は美味かったに違いない。拝殿の床板をぶち割った話になると「・・ん・・やっぱり・・あいつか・・」

小西さんも3日間離れていただけで戻って来た訳だが、とにかく待ち遠しくて仕方が無かったとのこと。受験生であることを忘れてしまっている。「家にいると・・うるさくてなあ・・」

我々同様に、我が家よりもこの願養寺の居心地がたまらないのだろう。本堂に戻りながら「あんな性格だとは思わなかったなあ・・」山本が小西さんについて語りだす。「優秀なのは間違いないが、ここで勉強ばっかりってのは無理だろう・・」

回廊に出て星座を眺める・・明日は２０日だ・・時の流れが速すぎる・・。

朝飯の席に着く、白井さんが左の肘を気にしている・・「手水鉢で顔を洗おうとした時に刺されちゃったよ・・いるのに気が付かなかった・・」キヨさんの表情が曇る・・「スズメバチはどこにでもいるから・・」みんなの目が・・山本に・・刺されるのを期待している。

廊下に出てみると、ガラス越しに手水鉢の周りに数匹飛んでいるのが見える・・水を飲みにきているのだろう。「俺は絶対に刺されねえぞ！」山本が力強く宣言する。本堂の中にも必ず飛び回っているが、追い払わなければ襲っては来ない。トカゲもそうだが、この領域は外と内の区別がないのだろう。何より我々が一歩下がらなければならないのだ。

「蚊が多いでしょう」キヨさんが蚊取線香を持って来てくれた。山本も上半身裸だ。涼しいというより、空気が澄み切っているのを感じる・・。このまま秋へ突っ走って行ってしまうのか・・？閉めきっていても涼しいが、やはり森のざわめきや

木々の息づかいを感じていたい・・。

のんびりと漢詩を読んでいると、実際の意味とは違うかも知れないが自由にいろんな事が想像出来る。古文もそうだが書いた本人の気持ちなどわかる筈もない。解釈するのは読み手の勝手だ・・面白いが・・試験の点数には結びつかない・・あたりまえか・・。

「お昼よ！」キヨさんから庭越しに声がかかった。たいした頭ではないが好きな事に集中していると腹が減るもんだ・・。山本が半袖シャツをかぶって立ち上がる・・「・・ッテ！・・」脇腹を押さえる・・シャツの中にスズメバチが入っていたのだ。気が付くのに手間取った分、たっぷりと刺されたようだ。

「どうだ・・刺された気分は？」顔が歪む「は、早くキンカンを・・」痛みをこらえている・・。シャツを捲くると、へその横も刺されたようだ。3箇所刺されていて血も滲んできたが腹だけに自分で絞り出している。肉をつまみながら居間に入る、「山本君もついに・・」小西さんらも笑顔で迎える。「シャツの中に・・気が付かずに・・」言い訳をするが刺されたことには間違いない、キヨさんも笑いをこらえている。

「どこかに巣があるんだろうね・・とにかく気をつけて・・」と、キヨさんがため息をつく。法要中は一日中線香を焚いているせいか、おとなしかったそうだ。自分が一番強烈に刺されたわけだが、夢の中に出て来たシマヘビの話とは言えスズメバチがこの地域の主役であることに異論はないだろう。

3人とも元気がないので、一人だけ騒ぐわけにはいかない。特に、山本は打ちひしがれている。自分の不注意を後悔しているのだろう。こんな静かな午後もいいものだ・・のんびりと畳の上に仰向けになる・・空が高くなったようだ、浮かんでいる雲は動きがない。

口数の少ない夕食が終わる・・山本は風呂に入らないというが、心配することはない・・朝には回復している筈だ・・。

いつものように夜が明けた。山本はまだ左脇腹を擦っている。「ちきしょう・・」よほど悔しいのか起き上がる気配がない。目が回るような症状は無かったとのことなので、大したことはなさそうだ。とにかく一日が始まる・・。

鐘を突きに外へ・・足元や畑のトウモロコシにも注意を払う・・牛アブの羽音にも敏感だ。山本が思わず首をすくめる。石畳の上で本堂を見上げると、銅瓦の隙間にスズメバチが出入りしている。ちょうど山本の机の上あたりだ。どうやらあそこに巣があるらしい・・。

「あとで・・天井裏の巣を調べるつもりです・・」食事中に切り出す。先輩二人もキヨさんも眉間に皺を寄せる・・。「大丈夫・・？やめたほうが・・」「無理しませんから・・」

山本も呆れる「俺は知らんぞ・・」賑やかに話がはずむ・・。３人とも傷が癒えたのか、のんびりとお茶を飲んでなかなか腰を上げない。その時、チャイムが・・何？初めて聴く。

「分校が始まるのよ」と、キヨさん。カレンダーに目をやる・・。２１日の月曜日だ、夏休みが終わったのだ・・ここにいると曜日の感覚が無くなるが、すでに４日が過ぎてしまった。早すぎる・・。

午前中はおとなしく机に向かう、山本もせっせとペンを走らせている。自分は・・というと天井裏が気になってしかたがない。どこから入ろうか？たいていは廊下の端の天井の板が外れる筈だ。どうやって登ろうか・・？・・梯子はどこに？・・思い出した。外へ出て神社側へ廻る・・あった、回廊の床下に寝かせてある。「ほんとに・・やるのかよ・・」山本が欄干越しに眉をひそめる。「俺一人でもやるぞ」とりあえず梯子を引っ張り出す。長さは充分だ、ホコリを取り払っていると、「今度は何するの・・？」郵便配達のオネエさんだ。「一番怖いから・・気を付けないと・・」全員が刺されたことを説明

する「人を見るのよ、私は一度もないけど・・」いつもの笑顔だ。自分がひどい目に合ったことを話すと「やっぱりね・・今日はないの？」帰ろうとすると「持ってって下さい・・」山本が慌てて階段を下りてきてハガキを渡す。「へ～・・きれいな字を書くんだね・・体はゴッツイのに・・字は性格を表すってほんとだね・・」こちらを見つめる・・『言いたいことは分かっている』そして「女の子もね、きれいな字で名前を書いてくれると嬉しいのよ・・」山本が柄になく照れる。「じゃあお預かりします・・」麦わら帽子をかぶり直し、楽しそうに体を揺らせながら山門では振り返らずに手を振って戻って行った。

「敦子に出したのか？・・」いつも訊かされていた名前なので覚えている。「おう・・返事は期待してないけどな・・」照れながら予防線を張っている。お互いに女の好みは違うので張り合うことは無い、言いたい事を言う。『やれ、あいつは頭が悪い、性格が良くない、品がないなど・・』自分らが無視された時の言い訳を常に用意している。

「懐中電灯、出しておいたから・・電池も入っているし・・」キヨさんが本堂に入って来た。「作業する人はここから入ったわよ」と回廊の突き当たりを指差す。準備は整った！

昼飯は自分だけが盛り上がっている、山本も先輩らも、たいして気にかけてはいない。と言うより巻き添えになるのを恐れているようだ。山本は子供時代の体験を口にする。「裏山の倒木に作ってあった巣を壊してしまい、大人たちが何人も病院に担ぎこまれた・・」自分も経験したので、あの痛さと精神状態はもうご免だが・・「巣を見てくるだけですよ」と平然を装う。さすがにキヨさんも「本当に・・大丈夫かしら・・？」心配している。

手ぬぐいで頬かむり、ジャージの上下を着込む、スニーカーは履いた方が良さそうだ。これでも少しは防御出来るだろうが今さらあとには引けない。天井板をずらし中へ・・ライトに照らし出された光景に息を呑む。まるで忍者映画の世界だ・・一抱えもある柱と頑丈そうな梁が何本も・・。「天井、突き破らないで・・」キヨさんが去年の騒動を思い出したのか声

が上ずっている。「俺も行くから待ってろ！」山本が上がって来た。・・圧倒されている。最上部の両端からボンヤリと光が漏れているが金網が張ってあるようだ。空が見えないので、雨が吹き込まないように下向きに板を取り付けているのだろう。

梁が太いので歩くのには心配ないが、柱と交差するところでは細心の注意が必要だ。だいたいの見当はついているが、銅瓦の隙間が見えて来ない・・。山本は後ろにぴたりと着いて来る。「どこに・・在るんだ？ もっと奥か・・」と「あれだ・・」太い柱の陰で見えなかったが横長のわずかな切れ目から光が差し込んでいる。梁から高さが1メートル位なので近くまで行けそうだ。・・何の音だ？発電機、いや大型の扇風機か？そしてライトのレンズに鈍い音が・・何と！スズメバチが何匹も体当たりしている。山本も緊張を隠せない。

ライトを消してみる・・すると光の方へ戻って行った・・もう一度点けると・・又、総攻撃だ。特性が分かった！吸血昆虫ではないので、呼気や臭気には反応しないのかも知れん。光が頼りなのではないか？帰ったら鷲見に聴いてみよう。ライトを消したまま暗闇に目を慣らす。物音に反応することも考慮してゆっくりと進む「巣はどこだ・・」発電機の音がすぐそこに・・あった！でかい・・屋根を支えるモヤという横木にぶら下がっている・・いや・・一体化しているのだ。ちょうど胸の高さだ。直径４０センチ高さは６０センチはありそうだ。ライトを点けて確認するが猛烈に襲って来たのですぐに消す。「戻るぞ・・」

「大丈夫かあ・・」先程から何度も小西さんから呼びかけられているが、返事をするわけにはいかない・・やっと見える処まで戻って来た。小西さんが頭だけ出している。「心配したよ・・」キヨさんも台所の片付けを終えて顔を出した。汗をぬぐいながら説明する・・。「やっぱりあったんだね・・床下かなとは思っていたけど・・天井裏とはねえ」そして毒液でべとついたレンズを見せる・・「凄いね・・よく刺されなかった・・」３人とも息を呑む・・。

「殺虫剤とダンボールとロープが有れば・・あとノコギリとボロ切れに線香・・」「えっ！まさか・・巣を取るの？・・」

先輩らも驚く。「敵の弱点を見つけましたから・・何とかなりますよ」いつもながら根拠の無い自信に酔っている。

作戦を伝える・・石畳の真ん中で火を焚き、3メートルほど離れて数箇所に線香を燃やす。
そして焚き火を背にして、襲い掛かるスズメバチをホウキで叩き落とす事を徹底する。
キヨさんも及び腰ながら仕方なく戦闘に加わるが、少し嬉しそうだ。

手筈を整えて再び天井裏へ、ダンボールにノコギリなど入れて荷揚げする。構造は頭に入っているので、極力ライトは点けずに目が暗闇に慣れるのを待つ。そして届く範囲まで近づくと山本がフマキラーを噴射する。巣を叩くと大騒ぎだ・・。「うわあ〜来た・・」庭から叫び声が・・。ライトを点けて穴を確認、ボロ切れを突っ込む。又消して屋根の隙間にも布を差し込む、これで外からは戻って来れない。フマキラ-が効いたのか巣の周りには戦意を失ったスズメバチがオロオロしている。ライトを点けても向かって来ない。ヨシッ、ダンボ-ルを引き寄せ巣の下に、山本がノコギリで付け根の部分を切断する。足場が悪いので切りづらそうだが何とか切り離す。作戦完了だ、手渡ししながら入り口までたどり着く。ゆっくりとロープで降ろす。庭では3人が奮闘しているが、誰も刺されていないようだ。しかし頭上にはまだ何匹も飛び交っている。巣を運び込むと、本能なのだろうか狂ったように次々に襲ってくるが、火と煙には勝てない。返り討ちにする。

ボロ切れを取って線香を突っ込む、燻し作戦だ。苦しくなって何匹も這い出してくるのを待ち受けて、ハエタタキで潰す。ほぼ動きが収まったので、いよいよ真っ二つに切断だ・・と、キヨさんが山門から走り出て行ってしまった。どうしたのだろう？ まあいい、とにかく切ってみることに・・、初めて目にする驚きの巣の内部だ。7層から出来ていて、幼虫やさなぎ、産み付けらたばかりの卵がびっしりと詰まっている。成虫になった空き家も目立つ。

山門が騒がしい、見ると村人たちが皿や弁当箱を持って走り寄って来た。キヨさんが知らせに行ったのだ。口々に、「ぜひ分けて欲しい」と言う。もちろん全て差し出すと大喜びで皆で分け合っている。石畳の上にのびているスズメバチも履

き寄せて集めている。どうやらマムシ同様に貴重な栄養源なのだろう。洗って焼酎に漬けるそうだ。

「しかし・・まあ・・よくそんな格好で・・」皆が呆れている、「何でもやるんだなあ・・」マムシをあげたオヤジさんだ。「一度刺されたんだろう？・・怖くねえのかい・・」

「こいつは昔から脳天気な奴で・・」山本が助け舟を出す。笑いながら皆が礼を言って帰って行った。戦い済んで日が暮れて・・。梯子を片付けて道具を仕舞い、回廊に座って休憩だ。キヨさんがお茶を運んで来た。お互いの無事を確認し話しが弾む・・。

皆でお茶をすすりながら庭を見渡す・・高揚した気持ちがやっとおさまって安堵感が漂う・・。

「子供らが来て騒いでも大丈夫だわね・・」キヨさんが一番嬉しそうだ。おそらくこんなふうに童心に帰って、一緒に遊んだことなど一度もなかったのでは・・。

暮れ六つの後すぐに夕食が始まった。賑やかな食卓だ・・連帯感が生まれてきたのか遠慮がなくなって、言いたい放題だ。キヨさんも横に控えていないで膳を囲んで食べている。

越波に来て初めての光景に小西さんらも溶け込んでいて、屈託がない・・。それぞれが、この素晴らしい時間が過ぎてしまうのを惜しんでいるようだ。

村人たちとの宴

「オーイ！・・」玄関に来客だ。キヨさんが出向く。村のオヤジさんを3人連れて戻って来た。「一杯・・やろうと思っ

てね・・」一升瓶と紙袋を抱えている。初対面の老人と床板を修理したオヤジさん、マムシのオヤジさんの3人だ。「あっ・・すみません・・僕らはラジオ講座の時間なんで・・」小西さんらは丁重に断って部屋に下がってしまった。

せっかく村の人たちと交流できるのに、しかたあるまい、心を開いて打ち解け合う事が苦手なのは判っている。プライドと言うのか境遇の違う人たちとの会話に慣れていないのだ。育った家庭環境も影響するだろうが、我々のように、雑多な、しかも海千山千の非常識極まる連中に囲まれていると、その中で生き抜いていくためには相手に呑まれるぐらいの柔軟さを身につけていなければならない。

「書生さんたちに礼を言いたくての・・一献傾けたいと・・皆で」一升瓶を取り出し封を切る。紙袋からアルミの弁当箱を開け、スズメバチの幼虫を小皿に盛る。そして「キヨ・・これ軽く炒めてくれんか」残りの幼虫とさなぎを渡す・・。初めて見る光景だ・・キヨさんの表情が自信に満ちている、村人に対して卑屈になどなっていない・・堂々と渡り合っている。「大変だったのよ・・誰も手が出せなかったのに・・」炒めたハチを盛った大皿を持って来て席に着く。

強い酒だ、一口で胃袋が悲鳴をあげる。山本は物心ついた頃から酒をたしなんでいるので余裕で味わっている。「さあ・・やってくれ・・」勧められるままに、生きた幼虫を口に放り込み噛み潰す・・生温かい未経験の感覚が口の中に広がる・・顔が歪む・・。山本が「噛まないで飲み込むんだ・・」オヤジさんたちも笑っている。「美味くはねえだろう・・ほら・・こっちを・・」炒めたさなぎは香ばしくてなかなか美味い・。

「無茶なのか度胸があるのか分からんが・・恐れ入ったよ・・天井裏にあんなでかい巣があるとはなあ・・」酒をキヨさんがついで廻る「今年の書生さんはすごいのよ・・」胸を張っている・・表情が底抜けに明るい。「去年来たのは・・ひどかったなあ・・」オヤジさんたちも思い出したのか顔が曇る。「子供らとも遊ばないし・・俺らにも挨拶したことなかったしなあ・・」

「は、初めてだったけど天井裏が真っ暗だった・・んで・・で、出来たんですう・・」ろれつが廻らなくなって来たが謙虚な姿勢は崩さずに説明する。「ちょうど梁の上にあったので・・何とか・・」山本が平然と補足してくれた。「畑も耕してくれるし・・何でも・・やるんだよねえ」キヨさんが自慢する。「１８かあ・・誰と同じだ？・・哲つぁんとこの２番目か？」現実的な話題になって来た。この地に若者がいないことが寂しそうだ・・３人とも、ため息混じりに目を閉じる。「しかた・・あるまい・・」老人が呟く・・。そして湯呑みに２杯目が注がれた・・。遠慮しては失礼だ、有りがたく頂く・・が・・効く・・。

妖しげな色香が漂う宴会だ・・正面の上座には鎧兜を外した老人が、両脇に遊び女をはべらして悦に入っている。勇ましい武者姿で酒を酌み交わしているのは二人のオヤジさんだ。
長い髪を後ろで束ねた、キヨさんと思しき女性が下女たちにテキパキと指図している・・。
山本は？と、見渡すと僧兵姿で落ち着き払って酒を飲んでいる、まるで弁慶だ・・。

「ごめん！無念に・・ござる・・」なんと頭を斜めに切り落とされた武者が土間に片膝をついて嗚咽している。「義経とか申す・・若造に・・馬上から・・」そして盃を受けると又戦場へ戻って行った。外が騒がしい、今度は何だ？額に矢が刺さったままの雑兵が、土間に崩れ落ちる・・。訊けば、波間に揺れる船上で敵を挑発したところ、いきなり射貫かれたと言う。「きゅうりだかナスだか・・与一なる、目立ちたがり屋の男でござった・・」丸顔の遊び女が嬌声をあげる・・どうやら巷では評判の色男らしい。「与一様あッ・・」酒がだいぶ入っているので、のけぞって大喜びだ。着物の裾が割れた・・でかい金玉が・・やはりタヌキが化けていた。と、言う事は・・細身のもう一人は、と見ると先程から油揚げばかり食っている、切れ長の目で賢そうだ。キツネの化身に違い無い。『チキショウ！俺は騙されねえぞ！』そして次々に、刀折れ矢尽きた兵が何人も現れては消えた・・。

「起きろ！」弁慶、いや山本の声だ、目を覚ますとオヤジさんたちが笑っている・・「いつでも来てくれ・・こんな処だけどな、忘れんでくれ・・」酒を飲み干すと・・、老人の顔が曇った「あの・・スズメバチはこの寺を守っていたんじゃ・・なかろうか」しこたま腹に流し込んだことを今になって後悔している・・。「ばちが当らなけりゃいいが・・」

ふらつきながらも玄関先で見送る、楽しそうに話し込みながらキヨさんは山門で別れた。
予想もしなかった展開になってしまったが、こんな形で村人から受け入れられるとは・・頭の中はまだグチャグチャだが、充実感に包まれる・・幸せな気分だ。

前回は、毎日が驚きの連続だったが精神的に疲れたのも間違いない。人との触れ合いは、地域に対する偏見があってはならないし、性別、年齢、身分などはどうでもいいことで、相手を敬う姿勢が伝わらなければ成り立たない事を学んだ・・つもりだが・・。

「住んでもいいぞ」電話の意味が解った・・冗談半分だが本音でもあったのだろう。過疎の村では、一人でも多くこの地で暮らして欲しかったのだ。切実な状況に置かれていることを実感する。「どうすることも・・出来ないのか・・」山本も黙ってしまった。酔いもあって二人とも深い眠りに落ちた・・。

頭がからっぽだ・・二日酔いになるかと思ったが・・どんな種類の酒なのだろう・・「薬膳酒みたいなもんだろう・・」山本は経験があるようだ。「それにしても・・強かったよなあ」酒が効いたのか、刺された痛みは消えたと言う、そして「やっぱり、和尚のことは、よく思っていないみたいだ・・」どうやらキヨさんも愚痴をこぼしたらしい。掃除を始めながら山本が状況を話してくれた。「俺たちが越波に来たいきさつを説明すると驚いてたぞ、ずっと和尚の知り合いと思ってたらしい・・」鐘を突きに外へ・・一匹も飛んでいない・・。
やはり全滅してしまったのか・・？あの中には自分を刺したスズメバチもいたのでは・・？

複雑な気持が湧いて来る・・あそこまでやる必要があったのだろうか・・屋根に向かって手を合わせる・・。

食卓に昨夜の残りのハチの子が並んでいる。先輩二人は箸を伸ばさない、ためらっている。

「昨夜は楽しそうでしたね・・」「うるさかったでしょう・・」笑いながらキヨさんが謝る。

そして「一緒に飲んで、話を聞いてくれて・・初めてだったのよ」山本も「オヤジさんたちもキヨさんにやり込められていましたよね・・」どうやら今までの鬱憤を晴らしたようだ。キヨさんが輝いている。「でもね・・これからのことを考えると、みんな同じように悩んでいるのよ・・しかたの無いことだけど・・」四人とも答えが見つからない、踏み入ることが出来ない領域が目の前に広がっている。雰囲気を察したキヨさんが「だから『今』を大事に過ごさなきゃね・・それしかないでしょ」重い言葉だ、四人とも頷く。

回廊に座ってコーヒーを飲みながら庭を見渡す。「俺が弁慶かよ?まさかお前が義経って言うんじゃねえだろうな!」夢の話に怒っている。「でも、まあ此処にいると何が出てきても不思議じゃないよな・・」立ち上がって神社を見つめる・・どれだけの人が願いを込めたのだろう・・スズメバチも高屋山の森に住んでいれば、殺されずに済んだものを・・。

分校から、オルガンに合わせて子供らの歌声が流れて来る。あらためて、このゆったりとした時間の流れが、毎日続いている事を実感する。我々よそ者はこの空間に溶け込むことなど出来る筈もない。通りすがりの旅人みたいなものなのだから足跡を残してはいけないのだ、別れを惜しまれる程度の人情が通えばそれで充分だ。

「午後から分校へ行ってみようぜ」山本は西村先生と話がしたいようだ。初めて会った時から、その人柄に憧れていて自分の目標にしている。さぞかし子供に好かれる教師になるだろう。

浮ついた話題の無い、平穏なごく普通の昼食だ。昨日の騒動があまりにも強烈で体力も気力も使い果たしたのだろうか、

皆も落ち着いてしまっている。「でも・・楽しかったね・・チョット、怖かったけど・・」よっぽど痛快だったのだろう、キヨさんの表情が見違えるように輝いていて、初対面の時を思い出すとまるで別人だ。

「キヨさんは、越波に来てから初めて自分を認めさせたんだろうなあ」山本が分校の入り口で立ち止まる。授業は終わっているが子供らがはしゃぎ回っていて普段と何も変わらない。西村先生が窓から顔を出した。「ここは涼しいよなあ・・やっぱり・・」日曜日に戻って来たとのこと、教室に入ると奥さんも顔を出した。「ムネキがずーと泣いてたわよ、どんな怪談話なの？」かいつまんで説明すると「本堂の中で聞かされれば・・そりゃ、効果絶大だわね・・」呆れている。

「異動の希望を出してあるので来年は越波にいないかもなあ・・」僻地廻りの教師は、情熱も意欲も無ければ務まらないが、長期間とどまるという事は、関わらなくてもいいような問題にも対処せざるを得ないという。「それに、若い教師には、まず僻地に赴任して教育者としての原点にして欲しいんだよ・・勉強になることばかりだったなあ・・」奥さんも優しく頷いている。

「奥さん美人だよなあ・・」山本は教師になるよりも、美人の嫁さんを貰うのを夢見ている。「敦子ってのは美人なのか？」山本が生徒会長で彼女が副会長だったとのこと。「お前の周りにいる女どもは足元にも及ばんぞ！」悔しいが返す言葉が無い。道路に出ると小西さんが蛇池に向かって行くのが目に入る。戻って来てから初めてのジョギングだが、手足の動きがぎくしゃくしている。注意はしているのだろうが、時折り手を前後に真っ直ぐではなく斜めに振っている。運動の苦手な女子のようだ・・。

寺へ戻ると、何と白井さんが竹竿を竹刀代わりに振り下ろしている。なかなか様になっていて「小学生の時、少しだけ道場に通ったんだ・・」やはり子供の頃は勉強以外にも集中出来るものがあったようだが、親の希望に沿って勉強に打ち込んだのだろうか？凡人には

分からんが、その頃からしっかりとした目標を持っていたのだろう・・。

湿り気を含んだ風が流れている。小西さんが山門に現れた「ポツポツ・・落ちて来たよ・・」慌てて戻って来たとのこと。残暑の厳しさは感じないが、夏が終わりに近づいているのは間違いないようだ。

郵便のオネエさんとキヨさんと

翌日は朝から雨が止む気配が無い。風は無く吹き込んではこないので回廊に腰を下ろしてコ-ヒ-を飲みながら村を眺める。まるで広重の浮世絵のようだ、雨が一本の線になっている。分校は授業が始まったのだろう、時折元気な返事が聞こえてくる。一度、授業を覗いてみたいが・・迷惑になるだろうから止めることにする。

雨脚が強くなって来た、危ないのでオネエさんは配達には来ないのだろう。外で遊べないと損した気になるが、すでに一週間が過ぎてしまった。天気予報を気にしたことはないが「しばらくは晴れ間がないようだね」夕食をかきこみながら小西さんがラジオの予報を教えてくれた。越波はお盆の前と後では、解りやすいほど違う世界になってしまうのだ。そしてキヨさんは一番煩わしい行事を終えたうえに、ハチ騒動で村人の鼻をあかしたのが痛快だったのだろう、鼻歌交じりで台所に立っている。

晴れ間は見えないが、石畳が乾いているので明け方には止んだようだ。手早く掃除を済ませ鐘を撞く。「早いなあ・・一週間しか残ってないぞ・・」「まったく・・ところで・・」山本が疑問を口にする。「ここんとこ、おかずの種類が増え

てねえか？」今まで出し惜しみしてた訳ではないだろうが確かに毎食賑やかになっている。宿泊費は決められた通りに払っているがお布施みたいなもんだ。始めの頃の精進料理とは比べ物にならないくらいの豪華さだ。

そして朝飯だ。茶碗には白米が盛られている。「貰い物が多いのよ」どうやらハチのお礼もあるようだ。漬物の種類が多いのはその為なのか、タクアンの塩加減が家庭によって違っている。

「今日ハガキを出しても、俺たちがいる間に返事が来ない可能性あるよな」お互いに日程を心配している。3日目に着いてすぐ書いて投函して3日か？「この前に出したのが今日返事がくればなあ・・そんなにすぐ返事を書く奴はいないか・・」

スクーターの音が・・「昨日は雨が強かったから・・川はいいんだけど山側から急に流れて来る所が何箇所もあるのよ・・」オネエさんが逞しく見える。「来てるわよ、後で聞かせてね」庫裡に入っていった。キヨさんと何やら楽しそうに話し込んでいる。山本は1通、恩師からの返事は達筆だ。こちらは3通、字を見ただけで分かる。芯の強い由紀子、控えめだが要点を撞くのが得意な文江、男女別の出席番号が同じで何かにつけて、いつも傍にいた亜佐美の3人だ。女の3人組にしては珍しく仲が良かった。

「スズメバチ、退治したんだって・・？」半分呆れている。キヨさんから武勇伝を聞かされたとのこと。「そういえば飛んでないね、さあ読んでみて・・」照れるが、この3人は家も近くいつも一緒につるんでいるので、ハガキは恐らく示し合わせて書いていると、説明する。「ふ～ん・・で・・」目が笑っている。キヨさんが麦茶を運んで来た。二人とも階段に座って一休みだ。

「9月に一度、ちゃんと話を・・」一緒に受験して同じ高校にいる由紀子だ。ろくに相手をしなかったことを詫びて出したのだが・・。「余ったハガキでついでに書いてくれたんですか・・いつも優しいんですね・・でも、もう《残暑見舞》

ですよ・・」女子高に行った文江のキツイ指摘だ。「一生、そこにいろ！・・帰ってくんな・・ったく・・もう」威勢はいいが泣き虫の亜佐美は予想通りの内容だ。男女で同窓会の幹事なのだが協力しないのでいつも怒っている、というより顔を合わせる度に文句を言わないと気が済まないらしい。
仕立て屋の娘だけに手先が器用で絵も上手い。ハガキの左端に、おさげ髪の女の子が猿顔の男の子をゲンコツで泣かせているイラストが・・俺はいいが・・美人すぎねえか？

「中学3年の時の同級生なの？この前の子たちと同じ年頃かしら・・」キヨさんが思い出す。「美智江と直美の二人は2年生ですよ」山本がつまらなそうに説明する。「友達は大事にしなきゃねえ・・いつかは離ればなれになっちゃうし・・」オネエさんも青春時代を思い出している。笑って聞いていたキヨさんが「私はそんな経験はないけど、・・今が一番楽しいわ、もう明日死んでも構わないわよ・・」キヨさんの顔に悲壮感は無い、屈託の無い明るいオバサンだ。「何、言ってんのよ・・」オネエさんも作り笑いで応じる。

「今まで誰にも話した事無かったけど・・」キヨさんが立ち上がって前へ出た。そして屋根を見上げて「雪が落ちて来てね・・ここから神社のお掃除に行こうと・・もう死ぬんだと思ったわよ・・声も出せないし・・誰も気が付かないもの・・」「それって・・この前の大雪の・・」オネエさんが麦茶を飲みかけて頷く。想像を超えた大量の積雪だったのだろう。「だんだん体が冷えてきて・・このまま死んだ方がいいんだって・・親の顔も知らないし・・何も良いこと無かったし、これからも楽しい事なんか有る筈も・・」3人で聴き入って声が出ない。「誰かが呼んでいるのよ・・キヨ、起きなさい・・ってね、優しい声だったわ・・」どうやら、石段の所へうつ伏せに倒れたので隙間が確保出来たのだろう。膝が動いたので立ち上がれたとのこと。「長いことここにいるけど・・初めて阿弥陀様の声を聞いたのよ・・」「やっぱり・・ちゃんと見ていてくれてるんだね・・」オネエさんが本堂に上がって手を合わせている。「お礼を言っておいたから・・」キヨさんも「ありがとね・・」

「山本君のは明後日の土曜日か週明けに返事が来るんじゃないかな・・すぐ書いてくれればいいけどね・・」やはりスムーズにいっても6日はかかるようだ。「降るといけないから・・」
オネエさんが小走りで山門に消えた。

「俺も色んな奴に出せばよかったなあ・・」山本が後悔している。「すぐに返事をくれる教師なんざ、そうはいねえぞ・・よっぽど期待されていたんだろう」半分茶化してやる。
「どんな事が書いてあんだ・・？」ハガキを取り上げる『・・さぞかし勉学に励んでおられ・・推察いたし・・前途洋々なる・・』見事な文章で達筆だが心に響くものが無い・・
「お前に・・言われたくねえよ・・」虫の居所が悪そうだ、末っ子の甘さが時々顔に出る。

とりあえず「返事は不要、帰ったら必ずお会いしますので・・」言い訳のハガキを書いておく。山本も気を取り直して何やらペンを走らせている。小西さんらも合宿が残り少ないので捻り鉢巻だ。

2人の娘

下の家が騒がしい、オヤジさんが帰って来たようだ。岐阜をゆっくり出て来ても、何も支障がなければ昼前には越波に着く、とは言っていたが時間が有れば話しも訊いてみたい。

笑い声がする・・山門に二人の娘が現れた。一人が紙包みを持って、こちらをジロジロ見ている・・何だ？色が黒く生意

気そうな目つきで横目に見ながら庫裡へ・・。山本と顔を見合す「アチャー・・また・・かわいくねえのが来たぞ・・」二人とも顔をしかめる。どうやらキヨさんとは面識が有るようで楽しそうに喋っている。そして、お盆に麦茶の入ったコップを４ツ載せて階段を上がって来た。嬉しくもない親切だが、仕方なく礼を・・と「何だ、ちっともいい男じゃないがね！」もう一人も「かっこいいって聞いていたのにさ・・どこが・・」自分らのことを棚に上げて言いたい放題だ。いつも障子にへばり付いているヤモリの方が遥かに器量良しだ。

「うるせえ！おめえらに言われたかねえッ！」温厚な山本が珍しく口調が荒い。無理も無いハガキの件でイライラしているのだ。「ブス」と口にしないだけまだ理性が働いている。
「せっかく・・持って来てやったのにさ」「いらねえ！持って帰れ・・飲むか！そんなもん」
まるで小学生の喧嘩だ。「ふ～んだ！自分で持ってけ」達者な娘らだ、動じる気配が無い。

「おい！あれを・・」適格な指令が出た。帰りかけていた二人が何事かと足を止めた。「シマちゃん・・出番ですよ・・」小声で話しかけ、いつもの茂みからシマヘビをつまみ出す。絶叫が響き渡る・・「バカ！アホ！・・猿・・ゴリラ・・」半分泣きながら、山門でわめいている。「宿題なんか持って来んじゃねえぞ！」「誰が行くか！ドアホッ・・」やっと下の家へ消えた。

シマヘビをそっと戻してやる。「放り投げられるかと・・思ったわよ」まだドキドキしている。「トカゲがいたら、ぶん投げてやろうかと思ったぜ！」何と言うことを・・「俺の友達なんだから・・大事にしてくれ・・」山本はまだ気がおさまらないようだ。

庫裡の玄関先で笑って見ていたキヨさんから「お昼にするから・・お盆下げてね・・」声がかかる。「本当にヘビを投げるかと思ったよ」白井さんも大笑いで、楽しい食事が始まった。やはり、あの娘らは昨年もこの時期に来ているらしい。

来ると何かと手伝ってくれて「いい子たちなんだけどねえ・・？面白くていいじゃない・・」山本は腹が膨れたので表情が穏やかになっている。分かり易い性格だ。「元気だけは有りそうですね・・」彼女らが持って来た、土産の肉をたいらげる。

「あいつら・・来るかな？」ちょっと気にしているので「あんな事言えば宿題持って来るに決まってんだろ他に行くとこなんかねえだろうし・・」食い過ぎたので本堂に寝ころがる。「中学生だろうな、それとも高校生か？・・とにかく宿題見てやれよ・・任せたぞ！」

障子を閉めて驚かそうと思ったが、余計な気遣いはするまい、喜ばせるだけだ。それに来なかったら惨めになるだけだ。

案の定、手提げ袋をぶら下げてこちらに向かって来た。「おじゃま・・します・・」目は合わせないが、言葉はしおらしい。「おう！肉、うまかったぞ、ありがとな・・」こちらは大人の対応だ。すると「うちは肉屋だから、いい肉を持って来たんだ・・うまいに決まってる・・」懲りない娘だ。それでも「しまった！」と思ったのか「勉強、教えて下さい・・」二人揃って頭を下げる。山本が教師の風情で「うまい肉、食っちまったから・・見てやるか・・」やっと笑いがこぼれた・・。

とにかく自己紹介を始める。岐阜市内の寺の出張所の近くの中学3年生だ。ソフトボール部で肉屋の娘が久子、同級生が富子と名乗る。どうりで土焼けしている訳だ。この時期しか遊べないので昨年も夏休みの終わり頃に来たと言う。「今年はカッコいい兄ちゃんがいるぞ」下の家のオジさんに聞かされて、「わくわくして、来たのにさあ・・」「ねえ・・」顔を見合わせている。こちらも負けてはいられない「前に来た・・美智江と直美はいい子だったよなあ・・色は白いし、中2だからお前らより若いし・・」二人とも黙ってしまった。女は幾つになっても年齢と戦わなければならないのだ。

「よし！始めるぞ」山本をけしかける。受験を控えているので各教科のポイントを丁寧にアドバイスしてやる。弱みを握

られたので素直な態度だ、女は何かに打ち込んで控えめにしていれば可愛いらしく見える・・不思議な種族だ。

山本が簡単なテストを考えているので、一休みすることに。二人とも県立を受けるつもりでいる。「俺たちの高校へ来るなよ・・ソフト部はねえぞ」いろいろと雑談しているうちに興味を持ってしまったようだ。出身中学の同級生の名前を出すが近所には心あたりが無いらしい。同じ中学出身でも3歳離れているとそんなもんだろう。「アッ！畳屋の・・俊介の兄ちゃんが・・そうじゃなかったっけ」「ああ・・そうだよ！博文って名前負けしてるチョット抜けてる人だったよねえ」言いたい事を言っている。詳しく聞いてみると、どうやら一つ下の応援団の奴らしい。「バカ面してるんだったら、あいつしかいねえだろう」山本も話に加わる。

さすがに弱点を調べるのに適した問題が並ぶ、気の強い久子には因数分解を3つだけ徹底的に覚えるように指示「これが頭に入っていれば数学は大丈夫だ」理科は「栄養素だけでもいいから」と無理に詰め込まない。富子には自分が説明する「国語は漱石など5人だけ作品を・・」「社会は・・歴史か地理の分かるところだけ覚えろ」そして英語は「・・う～ん・・二人ともあきらめろ！」大笑いで、緊張がほぐれたのか「お茶、貰って来ます・・」

二人で庫裡へ。生意気だが15歳の娘の素顔はあんなもんだろう。美智江らと違って受験生なので、期待と不安を常に抱えている。

時間がかかる・・と思っていたが・・何と色々な食い物を作って持って来た。キヨさんと知り合いだけに図々しく頼み込んだようだ。もっとも、自分らが食べたいのだろう。下の家では勝手なことは出来ない筈だ。

「大丈夫だから・・頭を下げて・・頼んできなさい」婆さんに言われたのだ。「だろうな来ると思ってたよ」二人とも始めの悪態は何処へやら・・すっかりおとなしくなってしまった。水を向けると、とにかくよく喋る、何が面白いのか・・。

「彼女、いるんですか？」

「小学校からの腐れ縁が続いているのが一人いる」と答える。山本も「親同士が仲がいいので逃げられない・・」もちろん想定していたので、打ち合わせ通りだ。話が盛り上がってきたので勉強どころではない。会話が続くということは、感情が移入されていってしまう、一方通行になると面倒だ。「花札でもやるか」持って来て正解だった。しばらくすると

「前の子たちとは何して遊んだの？」鋭い質問だ、明らかに比べている。「しりとりやって、それから五目並べだ・・」二人顔を見合わせている。

「私たちも五目並べ、覚えたい・・」厄介な女どもだ。「キヨさんに言って借りて来い！」喜んで跳んで行ったので一息つく。

「まったく・・一年違うとあんなもんか・・」山本が呟く。「教師になるってことは、あいつらみたいのも相手するんだぞ」「・・だな・・」あと一時間ほどで暮れ六つだ、それまで遊んでやるか。

山里の夕暮れは物悲しい・・梵鐘が響けばなおさらだ・・生意気な久子らも感傷的になっているのだろう。富子が口を尖らせる「まだ、居たいよ・・」「婆さんに怒られるぞ、明日早いんだろ、今夜はしっかり勉強しろ！」しぶしぶ階段を下りて行く。「元気でな！受験、頑張れよ！」「・・分かった、じゃあね・・・ありがとう・・」なんだかんだ言っても15歳の少女だ、涙目になっている。

やっと開放された。「まさか風呂で歌わねえだろうな」二人で大笑いだ。碁盤を片付けていると、久子が走って来た。何か忘れ物か・・「朝、一緒に鐘を突いてよ！」オヤジさんに聞いたらしい。「・・おう・・分かった・・」山本が気の無い返事をしたので「差を付けなくたっていいがね！」相変わらず気が強い。「寝てたら起こしに来るからな！」それでも嬉しそうに帰って行った。

「まったく・・好対照だよなあ・・俺たちと小西さんらも、そうやって見えるのかもな・・」

山本の顔が引き締まる「俺はお前とは一緒にされたくねえ・・」まだハガキが尾を引いているようだ。

夕食は久子らの話題が中心だ。小西さんも「ソフトボールか・・真っ黒だったよなあ・・でも・・あしらうの慣れてるよね」呆れているのか感心しているのか・・。「こいつの周りは、あんなのばっかりですから・・」山本が話しを盛り上げる。しかたがないので笑顔で「鐘を一緒に突いて送り出しますよ・・少しは思い出になるでしょう」お茶を飲みながら予定を話す。「又、歌が聴けるのかなあ・・期待するのは無理か・・」と白井さん。キヨさんも笑いながら顔の前で手を振る「あの子らは・・そんなことしないわよ・・でも・・又泣くかもしれないわよ・・」

小西さんが、車の中でオヤジさんに色々訊いたところによると、数年前から、知り合いの子供たちに越波を体験してもらっているという。ただ、越波には同世代の子供がいないので友達になれないのが残念だということだ。「こんなにいい所だから、みんなに知って欲しいんだろうなあ・・」自分たちは、たまたま４人いたので楽しかったが、「美智江や直美も二人だけだったら一泊二日でも退屈したかも知れない・・」

「由紀子は面識あるけど・・その亜佐美ってのは相当気が強そうだな・・」本堂に戻ってハガキを確認している。「久子らより間違いなく可愛いぞ・・この３人とは交換日記させられてたから・・頭が上がらねえよ」気を悪くしないように適当に説明する。「バレー部の女子に書いてやればいいだろうに・・」けしかけるが乗り気ではないようだ、自分も山本も共学でありながら２・３年と、「むさ苦しい男子クラスという悲惨な人生を歩んでいる。できれば授業料を半分返して欲しいものだ。

下の家が賑やかだ。久子と富子が風呂で聞こえよがしに馬鹿笑いしている。「「美智江たちは歌を聴かせてくれた、って言わなくてよかったな・・あれじゃあ泣く心配はないぜ・・」初めて越波で味わう、ガサツな一日が終わろうとしている・・。

「おいッ！もう起きてんぞ・・」隙間から覗くと山門でこちらを眺めている。明け六つまで、まだ時間があるので鐘を撞く訳にはいかない・・かといって相手をするのも面倒だ。「よし！掃除をやらそうぜ・・あとキヨさんの畑も・・」二人で、乙女心をもてあそんでいる・・。

「掃除、手伝うかあ」わざとらしく箒と雑巾を手にして障子を開ける。二人、顔を見合わせて「は～い！」喜んで跳んできた。運動部だけにフットワークは軽い。普段は掃除などしないだろうに、相手をしてもらえるのが嬉しいのかよく言うことを聞く。広い畳を丸く掃いては、山本から駄目出しを喰らっているが、口答えはしないで素直に従っている。

庭にキヨさんが出て来た。「それじゃあ・・トウモロコシを、もいでちょうだい」嫌がらずにザルをいっぱいにしている・・。下の家ではオヤジさんが起き出したようだ。時間が来たので一緒に鐘を撞く・・相手を替えて交互に・・希望をかなえてやる・・。が、顔がだんだん曇ってきて動きも鈍い。時間の流れに逆らっている・・。

「早くから悪かったね」オヤジさんが笑っている。久子らが荷物を取りに家の中へ入った。
「スズメバチ・・取ったんだってなあ、驚いたよ・・でも余り無茶するなよ」そして小声で「もうちょい、可愛いけりゃなあ・・」三人で顔を見合す、オヤジさんも俺たちの気持は分かっている。婆さんにせかされて久子らが出て来た・・泣いていて顔をあげない・・
オヤジさんは『また・・かよ』眉をひそめて苦笑いだ。そしてエンジンをかける・・。キヨさんが新聞紙にくるんだトウモロコシを持たせる。

「受験、頑張れよ！・・お前らなら大丈夫だ・・」山本が根拠のない無責任な言葉をかける。「努力すれば・・いいこと有るからな・・諦めんな！」こちらも、一期一会とはいえ、心にもないことを言う。「・・受けるから・・」泣きながら答える。やっと車に乗り込んだ。

婆さんとキヨさんの４人で見送る。窓際の富子が泣きじゃくって手を振っている・・車が動き出した・・小走りに追いかけて派手に手を振ってやる。久子が富子を押しのけて「忘れないから！」二人とも号泣している。状況を察したオヤジさんがスピードをあげて・・走り去った。

「よく、相手してくれて・・ありがとね」婆さんがホッとした表情で微笑む。「夕べから、ジャンケンばかりして大騒ぎでね・・」何を決めてるのか聞いたら、鐘を撞く順番とか車の窓側にどっちが座るのかなど・・「何回も勝負してんだよ・・まったく・・」騒がしいが色々な子供らを預かれて楽しそうだ。「根はやさしいのにね・・」キヨさんも笑っている。

「運転、荒かったなあ・・美智江らの時とはえらい違いだ・・」山本も「オヤジさんも分かってんだな・・今頃・・どんな顔してんだか・・」本堂に戻ると、疲れがドッと出て来た。「本当に受けるつもりでいるのか・・」合格するかも知れんが「俺たちはいないから
関係ないぜ・・」少しは女らしくなるのを祈るばかりだ。

山里の短い夏

「ノミとカナヅチ、借ります・・」朝飯をかきこみながら小西さんが切り出した。「・・？」
白井さんも箸を止める、「いいけど、切れるかしら・・」キヨさんが不思議がる。と、山本が「砥ぎますよ、しょっちゅうやってましたから・・」しばらくして「だけど・・何、するの・・？」小西さんが言い出さないので、白井さんがシビ

レを切らして問い詰める。
「何か残そうと思ってね・・」動じる様子もなく食事を終えた。

残り少なくなったコ-ヒ-を飲みながら「小西さんは器用だからなあ・・」二人でお化け大会を思い出す。台所の片付けを済ませたキヨさんが物置に入った。小西さんも部屋から出て来て頭を下げている。こちらを見ているので、二人で見に行くと、ノミは3本とも錆びている。「余り、刃こぼれしていないから砥げば切れますよ」「じゃあ、午後から頼むね」

やはり今日は郵便配達のオネエさんは来ない、明日の土曜日のようだ。山本は口には出さないが気落ちしている。３１日の朝には越波に別れを告げねばならない・・あと5日間になってしまった。計画はしたもののノートは2ページしか埋まっていない。山本も机に向かうより寝ころがっている時間が長くなってきた。

「走りながら・・色々考えてね・・」おいしそうに煮物をほうばりながら小西さんがみんなを見渡す。注目を浴びているので気分が良い、キヨさんも次の言葉をジッと待っている。
「トーテムポールを作ろうと・・思っているんだ」思わず《ローハイド》の映像が頭をよぎる。キヨさんは知識が無いらしく「それって・・なんなの・・？」小西さんがチョッと照れながら「木に顔や鳥を彫って・・魔除けとか看板みたいなもんですよ・・あんまり残された時間もないし・・」決意は固いようだ。山本も白井さんを見る・・『東大は諦めたのかも知れない・・』

山本が石畳にゴザを敷いて、砥石とノミを並べ蚊取り線香に火を点ける。手ぬぐいを頭に巻いてすでに研ぎ師に成りきっている。自分はノコギリを手に、小西さんが見つけたと言う木を切りに白井さんと3人で道路へ・・。イサムの家から１００メ-トル程下流の谷川の対岸に、つるの絡まった直径が２０センチ弱の木が倒れている・・、と言うか斜面に根を下ろしていて1メートル程幹を残してその先は折れて無くなっている。前から目を着けていたらしくその時から考えていたと

のこと。目の高さなので行くことは簡単だが足場が悪そうだ。種類は分からんが形が悪く価値もありそうもない。すでに驚くほど冷たくなった谷川に入り、隣の木に寄りかかって作業に取り掛かる。斜め上からノコギリを挽くので、それ程大変ではないが生木だけにしぶとい。自重で下がってくれるので半分を過ぎたあたりから楽になった。一気に切り落とし谷川の中から道路へ引き揚げる。小西さんはすでに工芸家の顔になってしまっていて、あれこれ想像を巡らせているようだ。

「何が・・始まるんだい・・？」下の家の婆さんが顔を出す。彫る、と聞いて「生木じゃだめだよ、好きなの持っていきな・・」家の脇に積んであるマキを指差す。「いいんですか？」

オヤジさんの商売品なので気が引けるが、今朝の久子らとの騒動に感謝しているようだ。

「いいから・・一番大きいのを使いな・・」遠慮無く直径３０センチ長さ５０センチの丸太をわけてもらう。

境内では、研ぎ終えた山本がノミの刃に小指を当てたり、片目をつぶっては満足そうに頷いている。池の脇で彫ると言うのでゴザを移動し準備にとりかかる。砥石などを片付けながら、白井さんが小声で「仏師・・気取りだね・・一人にしてやろう・・」

本堂からは様子が見えるが、声は掛けない。予想以上の材料を前にして構想を練り直しているようだ、腕組みして考え込んでいる。「東大は・・断念しちまったのか・・」山本が心配そうに呟く。確かにここのところ、小西さんは今まで抑えてきた物を、少しづつではあるが吐き出してきているように見える。邪魔をしないで見守ることに・・。

明日は来るであろうオネエさんに託す３人宛てのハガキを再確認する。余計なことは書いてないか？誤字、脱字は？文章が短いと文句を垂れるに決まっているので、２句載せる「山に行き 夏だというのに 山に雪」「おらが春 破れた障子 おらが貼る」洒落が分かればいいが、交換日記をやっていた頃に、さんざん揚げ足を取られていたので注意が必要だ。

「お前の人生は楽でいいよな・・」横で覗き込んでいた山本が呟く・・。「俺だって人に言えない苦労があるんだ・・」

反論すると「2年から一緒にいるが、お前が真剣に物事に取り組んでいるのを見たことがねえぞ！」・・・まあいいか・・明日『敦子さん』からの返事が届くのを祈るばかりだ。

結局、小西さんはノミを持つこともなく、自分の部屋に戻ったり、境内を歩き廻って夕暮れに・・。暮れ六つの鐘もどこか上の空で突いている・・。夕食は重い空気が流れる・・。

「時間はたっぷり・・有るから・・さ」白井さんが気を利かして口を開く。「そうなんだけど・・なあ」小西さんが漬物に箸を伸ばす。笑ってはいけないが、人が真剣に考えている姿は滑稽でもある。キヨさんがシビレを切らして「凄いの！期待してるわよ」火に油を注いでしまった。「ハイッ！」姿勢を正して食事を終えた。

「いったい 何を彫るつもりなんだろうな？」と、山本。「板を横に打ち付けてワシの羽根を作るとか人の顔を彫るとか言ってたのに、あんなゴッツイ丸太を貰っちゃったからビビッテんのかもな・・」

夜が明けたが今にも泣き出しそうな空模様だ。「午前中・・もてばなあ・・」鐘を突きながら心配そうな表情の山本。食事中も気が気ではない。小西さんは決断したようで晴々とした表情だ。それぞれの箸さばきが面白い、キヨさんも黙ってはいるが気になったようだ。

小西さんは午後から作業するという「雨が降りそうだし途中で止めるの・イヤだから・・」

山本が聞こえなかったふりをしている。

本堂に戻っても山本は山門ばかり気にしている。自分のハガキは投函してあるのでオネエさんは素通りはしないだろう。空が、降り出すのを我慢している・・。と、スクーターの軽快な音が・・。いつもより早い時間だ。ポストから郵便物を取り出すと、振り向いて参道を下りて行く・・来なかったか・・山本がうなだれる・・と「来てるわよ！」何とオネエさんが戻って来た。凄いフェイントだ・・「はい！ 雅典さんへ」よかった！・・が、教師からじゃあるまいな・・。『誰か

ら？』山本の表情が和らいだ・・こちらもホッとする。

「上大須の家に役場からの急ぎの通知があってね・・」多少の雨でも来るつもりだったとのこと。そして「二人がいなくなってから届いたら転送するから住所を書いておいてね」優しい人だ、キヨさんが字を書かないのを知っている。そして、空を見上げながら「まだ・・大丈夫・・みたいね・・じゃあ！」軽快に走り去った。

「敦子から・・だろ？」・・「おう・・」どうやら喜びそうな事は書いてないようだ。あえて傷には触れまい、本人も返事が来て気が休まっているのか、机に向かっている。

雨が落ちて来たようだ・・心配になって外を覗いていると・・上大須から戻って来たオネエさんが通り過ぎて行く・・強くならなければいいが・・。山里の短い夏が終わりに近づいている・・蝉時雨はもう・・聞こえない。

「天気予報、当たったわね・・明日まで続くみたいよ・・」キヨさんが呼びに来た。昼食は、小西さんに注目が集まる。「回廊でやれば・・雨は入って来ないし・・」水を向けるが「相当、ちらかすからなあ・・」乗り気ではないようだ。「誰も来ないから・・玄関先でもいいわよ」キヨさんも気をつかっている。「拝殿で・・ってわけには・・いかねえか・・」山本も適当な案を出す。面白いもんだ・・みんな、この願養寺を勝手に自分の家だと思い込んでいる。

結局、小西さんは次の日曜日も制作にはかからない。雨に気勢をそがれてしまったのか、ぼんやりしていることが多くなった。「芸術家の・・産みの苦しみ、ってやつかな」山本が分かったような事を口にする。

夜が明けたが、障子には明るさが感じられない。障子紙も弛んでいる。雨音が聞こえないので曇り空なのだろう。「あと・・

3日しか・・ねえぞ」布団をたたみながら、お互いに呟く。「なんで・・こんなに・・早いんだ」「まったく・・だ」

「今日、午後から始めますので・・」小西さんの口から静かな決意表明が・・。いつもの賑やかな朝食が始まった。「気楽に・・好きなようにやればいいのよ」キヨさんが優しい言葉をかける。小西さんも重圧から開放されたのか、おかわりをしている。

「昼飯、食ったら分校へ行こうぜ・・」山本は少しでも西村先生の相手をしたいらしい。周りに話相手がいないのを知っているのだ。辞書を借りに山本の所へ行くと「これだよ・・見るか？」敦子からのハガキだ。「そんな・・処で・・大変ですね・・修行、頑張って・・」

「本当に修行してると思ってるんじゃないのか？ 何て書いたんだ・・」「毎日、滝に打たれ・・煩悩を・・チョッとお前の真似をしてふざけてみたんだ」どうやら墓穴を掘ったらしい、敦子さんは冗談が通じないタイプなんだろう。

みんなが葛藤しているのに・・自分ひとりが能天気なのだろうか・・敷居に腰を下ろしてボーッとしていると、トカゲが顔を出した。手を差し出すと手のひらに乗って来た。全く警戒していないようだ。どんな世界が見えているのだろう・・一度は訊いてみたい。

スクーターの音が・・。長袖シャツのオネエさんが山門を上がって来た。風を切ると、もう涼しいのだろう、秋はそこまで忍び寄って来ている。「後輩から・・来てるわよ！」

山本が首をかしげながら「お前じゃないのか？」お互いに心当たりが無い。小西さんたちに来たのでは・・。差出人を見て・・膝から崩れ落ちる。何と久子と富子からだ。

「だって金曜日に帰ったばかり・・」オネエさんが指を折りながら「午前中すぐに投函して集荷に間に合えば・・来るわよ」そして「今度は・・どんな子だったの・・」二人で口をそろえる「思い出したくねえ・・」オネエさんは「・・？・」

キョトンとして視線をハガキに・・読むのを催促している「少しだけカッコイイ先輩たちへ・・勉強・・ありがとう・・もっと・・先輩たちが落第して留年したら学校で会えるね・・」とんでもない奴らだ、受かるつもりでいやがる・・。山本が「お前、単位、大丈夫だろうな」心配している。オネエさんが「可愛い後輩が出来てよかったわねえ・・今日は、無いの？」笑いながら戻って行った。

「異動するとしたら又、どこか僻地ですか？」山本が素直に訊いてみる。「ん～、まだこの歳だから・・県内にいくらでもあるしなあ」西村先生が校庭の子供らを目で追っている。

「一人でも多く、読み書きと計算だけは身に付けてあげたいんだ・・」偽らざる心境なのだろう。「ところで・・いつまで、いるんだい？」のんびりとふらふらしているように見える高校生を心配している。

寺からノミを打つ音が、聞こえてきた。山門に入ると・・池の脇で、横に倒した丸太の上に、頭にタオルを巻いた小西さんがまたがって汗をたらして奮闘している。声をかけるのはやめて本堂に戻り、とりあえず机に向かう。山本も、ため息をついている、明日は２９日だ、残りの時間はあっという間に過ぎてしまう。恵まれた環境にいるのだから、少しは集中して・・と思ってはいるが居心地が良すぎる。いつのまにか本を顔に載せて・・夢の世界だ。

鐘の音で目が覚めた、山本も仰向けで足を組んだまま欠伸をしている。障子を開けると、小西さんが白井さんとなごやかな表情で暮れ六つの鐘を突いている。どうやら制作が進んでいるようだ。作品は布をかぶせて庫裡の軒下に置かれていて見ることは出来ないが、大量の木屑が木箱に入っている。だいぶ削ったのだろう、お披露目が楽しみだ。

「晩飯もあと、３回食えば・・終わりだぞ・・」馴染んだ廊下の軋みを聞きながら、山本と庫裡へ・・。小西さんは、みんなに進捗状況を話したくて、体が前かがみになっている。「切れ具合は・・どうですか」山本が、見事な問いかけを・・。会話の妙を会得したようだ。小西さんは考える事も無く、自然に答える。「のこぎりも使ったけど・・明日には出来そうだ

よ」白井さんも「半日、熱中してたもんね・・」感心しているのか呆れているのか・・。

「明日は、どうする・・？」布団の中で予定をたてる。上大須へ行くのはやめにして、草むしりとマキを割ることにする。八幡神社の周りも掃除して・・。「雨が降らなきゃ・・な・・」

虫の鳴かない静かな夜が更けていく・・。

予想が当った・・濡れごろの雨が降っている。「秋の長雨って・・やつか・・」回廊に座って村を眺める。「さすがに、毎日、変化がなければ・・退屈だろうな・・」この地で暮らしていくのには、何を目標にすればいいのだろう?寺を守る事を、与えられた使命として日々暮らすキヨさんは特別な存在だ。下の家のオヤジさんのように故郷の恩恵を商売にして、町と行き来するのは誰にでも出来るわけではない。先祖からの土地を引継ぎ、僅かな畑を耕して自給自足の生活を、ほとんどの村人が送っているのだ。我々のように、『今日は退屈だ』なんて考えている村人は一人もいない。

「小西さんたちはいつまで・・」朝飯を食いながら、予定を訊く。金曜日に下の家のダットサンに同乗するとのこと。「31日とついたち・・か・・急に寂しくなっちゃうじゃない・・」

キヨさんがカレンダーに目をやる・・。「いろんな・・事、あったね・・」お茶を注ぎながら思い出している。

「明日は先生にもちゃんと挨拶しようぜ、オヤジさんらにも出会えたら、声をかけよう・・」

おかしなもので切羽詰ってきたら、急に教科書が恋しくなってきた。二人とも無言で机に向かう。裏の高屋山で、時折キジが鳴く以外は、石をくり抜いた手水鉢に、竹筒から流れ落ちる水の音だけだ。夏の主役のセミは消えてしまっている。

「やる時はやるんだね・・」キヨさんが呼びに来て笑っている。「まあ・・少しは・・」廊下へ出ると、雨もだいぶ小止みになっていて「あがるんじゃ・・ねえか?」山本も期待している。久しぶりのカレ-ライスをお代わりして午後からの労働

に備えることに。

濡れているので草むしりは止めてマキ割りに集中する。「ひと冬越せるぐらいのマキを割っちまおうぜ！」斧とナタを使って片っ端から割っていく。小西さんが庭に出て来た、制作を始めるようだ。邪魔にならないように散らばっているマキをかき集める。しばらくして白井さんが顔を出した。「体がなまっちゃうから・・」竹竿を引っ張り出して素振りを始める。４人揃って境内で汗を流す・・。「スズメバチがいたら出来なかったね・・」白井さんが屋根を見上げて呟いた。

「蚊に食われるわよ・・」キヨさんが庫裡から出て来た。蚊取り線香と麦茶を盆に乗せている。「大きな顔・・だこと・・」小西さんの作品を横目で見ながら本堂の階段に座る。

みんなで一休みだ。麦茶を飲みながら「そういえば・・イサムが出て来たんだよなあ・・」

山本が呟く。小西さんも山門を見つめて「元気なやつ・・口は悪かったけど・・」「桃を持って来た時は驚いたよ」白井さんも半月前の出来事を思い出している。「そう・・ねえ・・あっと言う間に・・過ぎていっちゃうんだね・・」キヨさんは、別れが近づいて来ているのを静かに受け止めている・・ようだ。

「ひょっとして・・ヌード？ じゃねえか」山のように出来上がったマキを片付けながら、語りかける。小西さんの作品が形を現してきたのだ。「顔・・じゃないよな」山本もうすうす気付いている。夕暮れが迫ってきたので、手早く庫裡の裏の軒下にもマキを積み上げる。

「これだけあれば・・充分よ・・一人じゃそんなに使わないもの・・」キヨさんが喜んでいる・・が、一人の生活に戻らなければならないことが頭をよぎっている。

豊富なおかずが並ぶ楽しい夕食が始まった。料理好きなキヨさんが腕をふるっているのだ。

あえて作品には触れないが、白井さんは呆れた顔を隠さない。「明日・・一日か・・雨は降らないみたいだよ・・何か決め

てるの・・」小西さんも我々を気遣っている。「拝殿の掃除と神社の周りも少しはきれいにしようか・・と、だいぶ・・迷惑をかけたので・・」しおらしく答える。山本の目が笑っている。「おまえ・・だけだろう・・迷惑かけたのは・・」

同じように越波を離れるのに・・前回とは全く違う状況に置かれていることを実感する。星の見えない夜空を見上げて「降らなきゃ・・いいがな」

最後の日々

時折、薄日がのぞく朝を迎えた。願いが通じたわけでもあるまいが、手短かに掃除を済ませ鐘を撞く。湿度のせいか鐘の音が響き渡るのに時間がかかっている。今まで気付かなかったが、いろんなことが確実に変化しているのだ・・。

白米のご飯にみんな顔を見合わせる・・「在るうちに、食べちゃいましょうよ」キヨさんが
涼しい顔で続ける「おかわりしてね・・いっぱい炊いたから・・」初めて見せるいたずらっぽい目が輝いている。

「午前中にやっちまおうぜ！」神社の周りの草を刈り取る。マムシがいるのは分かっているので、慎重に足を運ぶ。何度も覗いているが社殿の中はいつも不気味だ。刈り取った草を米の入っていた袋に詰める、乾かして焚き付けに使うのだ。拝殿の床を掃き出す、自分がぶち抜いた箇所の板だけがやけにきれいだ、激痛を思い出して思わず左肩をさする・・。天井を見上げるがスズメバチの姿は無い。

「そこに・・いたの！」オネエさんがこちらに歩いて来る。「姿が見えないから・・」手紙は持っていない。そうだ！住所を教える約束だった。本堂に戻りノートを破って書き込む。
米袋を二つぶら下げて山本も戻って来た、カマを背中のベルトに挿し、額に汗が流れている。「雅典君・・かっこいいね」山本の顔が、修正不可能なくらいにだらしなく崩れる。敦子のハガキの件をオネエさんは知っているので、思い切り持ち上げている、見事と言うほかない。俺たち男は、優しい女の一言で天にも昇れば地獄にも堕ちるのだ・・嗚呼。

「キヨさんに会ってくる・・」オネエさんが、池の脇でさかんにノミをふるって仕上を急いでいる小西さんを横目に見ながら庫裡へ・・行きも帰りも作品に目を留めている。戻って来ると、無言で両手で自分の胸を持ち上げるしぐさを・・こちらも無言で目で答える。

山門まで一緒に歩く。「冬、以外はいつでも来なさいよ・・みんな歓迎してくれるわよ・・じゃあ・・元気でね・・」道路に下りて、分校の先に消えるまで見送る。「どうせ暇だ、戻って来るまで待ってようぜ」「ずっと行ってないから、墓参りでもいくか」授業中の分校を見ながら、村はずれの墓地へ・・。途中の家のおばさんと目があった。誰だか分からないが「こんにちは・・」声をかけると「おや・・いつまで・・いるんだい」親しみを込めた返事が返ってきた。山本が「俺らを知らない人 少ないんじゃないか・・？」

お盆を過ぎて半月あまり、予想に反して、どの墓もきれいだ。無縁仏に手を合わせるキヨさんの気持が伝わって来る。「阿弥陀様にお仕えしてるって言ってたが、本当だよな・・」

上流の堰堤辺りからカブのエンジン音が・・下り坂なので砂利にタイヤを取られないように慎重なハンドルさばきだ。驚かせるといけないので墓地を出て待つことに。やがて・・気付いたようだ「え～・・」と言う顔をして近づいて来た。「ん！」止まらずに通り過ぎて行く・・。１０メ-トル先で止まって、振り向く「いたの？分からなかったわ・・」笑っている、又

も凄いフェイントだ。「帰りに寄ろうと思っては・・いたのよ、でも嬉しいわ」
そして「そうやって、女の子泣かせてんだ・・」この夏の出来事を話しながら参道まで一緒に歩く。「本当に、又来てね・・私も泣いていい？・・」笑いながら、胸のハンカチで涙を拭いた・・。カブに跨ると・・だいぶ先まで行ってしまったが、畑の脇に行くとまだ姿が見える・・止まって振り向いて手を振っている・・。人を見送るのは難しい、気持ちの通じた相手ならばなお更だ。視界から消えるまで立ちつくす。詳しい話は聞けなかったが何年くらいこの仕事をしているのだろう。茶目っ気たっぷりの可愛いオネエさんだ。

山門をくぐると・・キヨさんと白井さんが並んで、池の向こう側にいる小西さんを見ている。「出来上がったのか・・？」二人で寄って・・驚いた！ヌードの半身像だとは分かっていたが・・まさか池の石の上に据えるとは・・。先程からキヨさんが固まっているわけだ。
白井さんも竹竿を握ったまま思考回路が停止している。「向きは・・どう？」小西さんが同意を求めているので「ＯＫ」をだす。

「君らがいるうちに・・間に合ってよかったよ！」妙な雰囲気のなかで昼飯が始まった。どのように評価しようか？「仏様も、びっくりしてるわよ・・」キヨさんも呆れてはいるが嫌な顔はしていない。白井さんは無言で箸を動かしている。

「なんで、あんなこと思いついたんだろう・・工作が得意なのは分かるがなあ・・」回廊から池を眺める。半身像の後ろは背中のくぼみも尻の膨らみも無い、ただの丸太だ。「小西さんらしいな」山本も苦笑いだ。そして「小西さんじゃ和尚も怒れまい！俺たちがやったら只じゃ済まないだろうな」皆がいなくなれば、村の人に捨てられるに決まっている。
授業の終わりを告げるチャイムが・・。分校へ西村先生を訪ねる。息子のムネキも出て来た。「こわかったか？」お化け大会の話を蒸し返してやる。しばらく考えて「何のこと？」

とぼけている。男のプライドが芽生えてきているのだ・・。小西さんらの話題を振ると「僕も一浪したんだけど、この越波で勉強するのは、相当精神力がないとな・・」西村先生が笑って同情している。明日、帰る事を告げると「毎日、楽しかったでしょう」奥さんが笑顔で道路まで送ってくれた。

「これで予定通りか・・又、来る事があったら上大須や高屋山に登ってみようぜ・・」「今度は車だな、大河原の集落も人が住んでいるうちに行かないと・・」

山門から石畳に数歩入るといやでも、乳房だけの半身像が目に飛び込んで来る。「鼻と口を彫れば顔に見えたのに・・」キヨさんが「大きな顔？」と思ったのも頷ける。本堂に上がる前に茂みを覗くと・・「・・ったく・・」相当迷惑なのだろう、シマヘビがため息をついている。数々の非礼を詫びて、別れを伝える・・が、無表情だ。回廊では音に気付いたトカゲも顔を出した。この数日は障子を閉めていたので入って来れなかったのだ。やはり別れを告げるが反応が無い。「明日の朝でいいじゃねえか？」と山本が笑う。「あいつらは朝が弱いみたいなんだ」と説明する。「お前は、親類に爬虫類がいるんじゃねえのか？」

「予定は・・未定・・とはよく言ったもんだな」山本がノートを捲りながら呟いている。
「半分もいかなかったか・・細江に絞られんだろうな」罰として細江の下宿の掃除をさせられている姿を想像しているようだ。うらめしそうに顔を向けたので「俺のせいじゃねえぞ！」

前回は逃げるように越波を去ったのだが、今回は後ろ指をさされることもなく帰れそうだ。もっとも前回だって俺たちが考えていたほど評判は悪くなかったのだが・・。

ぼんやりしながら2ヶ月前に時計の針を戻す、図書室で越波を見つけ、和尚に会って、断られて・・又、ＯＫが出て、馴染

みの土建屋でアルバイト、東名小牧インタ-でダンプの誘導は面白かった・・そして親にも詳細を伝えずにこの越波に来て、一度帰って・・そして又、ここにいる。自由気ままな風来坊とはこういうことを言うのだろうか？「俺は大地に根を張って生きている！いっしょにするな・・」山本の目が笑っている。

暮れ六つの鐘が・・響きが鈍い・・こちらの心情もあるが、雨の前兆だろう。折りたたみ傘を袋から取り出して山本が確認している。

最後の晩餐いや晩飯だ、鮎の塩焼きが並んでいる、オヤジさんたちが「食わしてやってくれ・・」と持って来てくれたとのこと。小西さんが「君らのおかげで・・」こちらに向かって手を合わせる、スズメバチ騒動を話題に賑やかな食事になった。「今回は堂々と帰れそうです」笑いの絶えない時間がすぎていく。

床につく頃に雨が落ちて来た。二人で回廊に出て感慨にふける・・。この八月に起きたことは、全て雨が洗い流してしまうのだろう。もちろん俺たちの存在すらも・・。「それでいいんだろうな・・出会いがあれば別れがあって・・」山本が続ける「俺たちは、うわべだけだから気楽なんだ・・ろうなあ」どうやら西村先生の重い話が胸に刺さっているようだ。

今日一日の疲れが出たのか、山本が寝言を言っている。「・・やめたほうが・・」誰かに忠告しているようだ。いろんなことが思い出されて、なかなか寝付けなかったが、それでも日付が変わる頃には眠ってしまった。

「まだ・・降ってんのか・・」山本が起き出して障子を開けている。たいしたことはなさそうだが歩いて帰ることを考えるとやや気が重い。「ヨシッ！やるぞ」気合を入れて掃除を始める。ひと通り終えて阿弥陀仏に丁寧に手を合わせる。布団はシーツを外して三つにたたみキヨさんが干しやすいように回廊側の机の横に積み重ねる。まだ時間があるので神社にも詣でる。いつ来ても馴染めないが「わざと近寄り難く作ってんだろうな」山本も頷く。

別れの時

最後の明け六つの鐘を撞く・・が不思議なほどに特別な感情が湧いて来ない。山本も普段通りに突いている。キヨさんが傘をさして出て来た。「ご苦労さまでした」頭を下げられて、やっと実感がこみ上げて来た。「これで本当に最後なんだな・・」山本も黙っている。

「何時に出ようか？」朝食前に荷造りしながら打ち合わせる。天候を考えると８時前には出発した方が良さそうだ。二人とも体力には自信があるが、風が出て来ると時間がかかるのは目に見えている。

「予報ではそんなに降らないみたいだよ」白井さんが初めてのカニ缶に舌鼓を打ちながら教えてくれる。「そんなに、おいしいとは思わないけどね」新鮮な物を食べつけているキヨさんにしてみれば、たかが缶詰なのだろう。そして「山間部とかラジオで言ってるけど、ここらへんのこと分かってるのかねえ」鋭い疑問を投げかけた・・４人とも押し黙る・・。最近のキヨさんは、以前と違って、はっきりと物を言うようになって来ている。

本堂に戻って帰り支度を始める。「キヨさん、別人みたいだよなあ」山本も気付いていたようだ。「少ししか残ってないけど・・」ネスカフェをキヨさんに持っていく。「又、これ食べてね」おむすびを渡してくれた。そして「手紙はいらないから、又来てちょうだいね！」
感情を押し殺して平静を装っているのが伝わって来る。

小西さんと白井さんに挨拶をする。「受かること、祈ってます」と告げる・・と「君らも一発で受かれよ！」お世辞でも嬉しい言葉が返って来た。でも、と小西さんが口を開く「東大だけが人生じゃないしなあ」すでに諦めている。白井さんが眉を上げて無言で「こんなになっちゃった・・」意志の弱い友を嘆いている・・。

居間へ行くがキヨさんの姿が無い。下駄と傘が見当たらないので又、下の家の婆さんに声を掛けに行ったのだろう。湯呑み茶碗にフキンを乗せたお盆が卓袱台の上に置いてあるので、礼状とお金を入れた封筒をお盆の下に・・。

回廊でスニーカーを履きながら「小西さんらが明日で良かったな・・最後じゃ、辛いぞ・・やっぱり」「全くだ・・ところで・・」と昨夜の寝言の件を持ち出す「・・おう・・そうだ
忘れてた！」山本が階段を下りて池の前へ行く。ホッとしているので「どうか・・したか？」
「後で話す・・」目にいやらしさが・・。

「元気でな！」庫裡の廊下では小西さんたちが手を振っている。男同士の別れはこんなもんだ。余計な感情が入らない。傘をさすほどでもないが、小ぬか雨ってやつだ、じっとしてれば結構濡れる。参道でキヨさんたちが待っている。山門の向こうに傘が見えて来た。

「何だ・・？」山本も足を止める、・・3・4・・・7人ものオバサンが・・いや一人は赤ん坊を抱いでいて隣の人が傘を・・コーヒーをねだった子供らもいる。キヨさんが声をかけたのだろう、何と半数以上の家からエプロンや割烹着で駆けつけて、参道の右側に並んでいる。照れるどころではない、顔を引きつらせながら皆にお礼の言葉を・・「ご迷惑・・ばかり・・」山本も「かけ・・やした・」舞い上がっている。「今度は、嫁さん連れて来な！」下の家の婆さんだ、何かと接する事が多かったので遠慮が無い。皆から笑い声が起こる。

キヨさんの涙は見たくなかったので、賑やかで楽しい別れに、気が楽になった。何度も、頭を下げて「それじゃあ・・さようなら・・又、来ますから」振り向くとまだ皆で手を振っている。この先を左へ大きく曲がればもう見えない、立ち止まって振り向く・・誰もいない・・何故かホッとする。「イサムを思い出しちまった・・」山本が立ちすくんでいる。

やや濁ってはいるが川の流れは変わらない、橋を渡る頃には、スニーカーもズボンの裾もずぶ濡れだ。「あれで、日の丸振ってたら完全に出征兵士の壮行だよな・・」大笑いしながら振り返る。前回のような悲壮感は無い、「いつでも来れるさ！」越波に別れを告げる・・。

「和尚がな・・」夢の話だ、「彫刻を見てカンカンに怒ってんだよ・・」「そりゃ夢でも怒るだろうよ・・で、叩き壊したのか？」いや！と首を振る。「小西さんが、貰ってくる、って言うんだよ・・」何を？「・・ブラジャー・・」呆れて言葉が出ない。そして気が付く、「まさか・・郵便局のオネエさんから・・だから、やめたほうがいいと・・」余りの馬鹿さ加減に笑い転げる、俺たちの頭の中はこんなもんだ。

黒津を過ぎる頃に雨脚が強まったが、国道に入ってからは小止みになった。風がないので傘をさしていても会話は出来るが、ズタ袋をかついでいるので両手がふさがっている。峠までは踏ん張って進まねば・・あとは下るばかりだ、のんびり出来る。

峠に着いた、珍しく山本が賽銭を・・「無事に帰って来れたからなあ・・」スズメバチ騒動を思い出している。「あれは・・運が良かっただけだからな！」まだ手厳しいことを言う。

地蔵尊に別れを告げて谷底を覗く・・上流よりも濁っている・・わずかな雨なのに景色が一変してしまう。これも現実なのだ、絵葉書のような景色ばかりではない事を実感する。

バスが見えて来た、時間に余裕があったので間に合うとは思っていたが「え～まだ、いたのかい、とっくに車拾って帰ったかと・・」オバさんが驚いている。「学校、始まるんだろう・・のんびりしちゃって・・大丈夫かい？」前回来た時の運転手と3日前にも話題になったとのこと「そんなに頭が悪そうじゃないから・・ちゃんとした高校に行ってんだろう、もう帰ってるさ・・」山本も苦笑いだ。「今日中に帰ればいいんで・・」体が冷えたのでおしるこを注文する。運転手も車掌も地

元の人間ではないので、不思議そうに聞いている。
この先にまだ人が住んでいるのか・・？そんな表情だ。

「良かったね、ふるさとが出来て・・来年も来るんだろ・・車で来ても寄りなよ・・」
雨は止んでいる、ビニ-ル袋を貫って傘をズタ袋にしまって外に・・「おい！」山本が気付く。目の前の坂にダットサンが止まった。下の家のオヤジさんだ！「やっぱり、今日だったか？・・又、来いよ・・面白い処だろ・・」「久子たちは・・どうでした・・」興味が有ったので聞いてみた。「しばらく泣いてたけどな、すぐに寝ちまったよ、４時前から起きてんだもんな」大笑いだ。良かった！オヤジさんにも挨拶出来た。笑顔で見送る・・そしてオバさんにも礼を言ってバスに乗り込む。珍しく、見えなくなるまで手を振っている。

しばらく走ると、「預かってきたので・・」車掌から紙袋を渡された・・？山本が中を覗いて笑っている・・予想通り、饅頭と羊羹を取り出した「よっぽど売れねえんだな・・」
「今度来る時はみんなを連れて来ようぜ、キヨさんや子供らが元気で越波に住んでいるうちに・・」山本が呟く。「いつになるか判らんが必ずな・・」

振り返れば、雨雲に覆い尽くされた根尾の山々は、すでに水墨画の世界だ・・自分らは本当にあの幻想の地で暮らしたのだろうか・・夢だったかも知れない。

それぞれの道．それぞれの人生

山本の下宿へ寄って、一緒に学校へ。バスに乗り込むと、始発から乗っている加藤と大田の顔が・・。とにかく現実世界の情報を仕入れることに。学校近くで自転車通学の細江を追い越す・・。真っ黒に日焼けしている、無事に日本一周は達成したのか？

男子クラスだけに、再会の喜びも、ときめきも何も無い、いつもの殺伐とした空気が流れている。このまま、時がすぎるだけだ・・。

山本は時間を見つけては細江の下宿に入り浸りで、物理の特訓を受けている。加藤も磯野も受験モードに切り替わっていて授業が終わると、さっさと帰ってしまう。志望大学を1年の時から絞り込んでいる鷲見も顔つきが真剣だ。相変わらず脳天気なのは、自分を含め部の先輩の引きや、競争の無い目をつぶっても入学出来る大学へ行く奴ばかりだ。
加藤には迷惑をかけたので、サッカー部の面倒をみることに・・。顧問は素人だしＯＢの黒木さんは６月に急逝していて、夏の大会は加藤が一人で引っ張ってくれたのだ。そして体育館では野澤も時々出てきては後輩を怒鳴り散らして鬱憤を晴らしている。

ボールを蹴っていると、陽一のことも思い出す・・どこの高校へ入るんだろう・・イカン！久子らの顔が・・あんなのが入学して来たら・・後輩が気の毒だ、来ない事を天に祈る。

グランドで笛を吹いて叫んでいるので、いやでも目に付く。気が付くと玄関に由紀子が立っている。小さく手を振っているので、腕時計を指差す。頷いて校舎の中へ・・。早めに切り上げて図書室へ迎えに行く。一緒に帰るのは久しぶりだ。照れも、ときめきも無いが幼馴染とはこんなもんだ。進学も就職もしないとのこと。「花嫁修業か？」笑って「家事手伝いよ」

そして「文江は短大を受けるみたい、亜佐美は・・知りたい？」何と答えても、すでに主導権は握られている。いつものことだ。「美大だろ？」素っ気無く答える。「今度会った時に教えるって言ってたわよ」いまだに引きずり廻されている・・嗚呼。

師走に入ると、細江が大忙しだ。話を聞きつけたバスケットの女子連中に物理と数学を教えている。振り回されているが山本に教えるより楽しそうだ。

年が明けた・・美智江と直美の連名で年賀状が届く。山本は親類の下宿なので住所を教えていない。実家から戻ってきたら見せてやろう。誰だか気付いた母親が溜息をついている。
そして亜佐美の年賀状には、会える日時が３通り書いてある。「らしいね・・」母親は笑っている・・面識があるので余計な心配はしていないようだ。

担任に呼ばれた、「何だその格好は・・」２月に入ってもまだサッカーをやっているので呆れかえっている。「とりあえず関西だけは受けます」きっぱりと意思を伝える。「前の晩に覚えたのが問題に出る・・ことも・・あるかも知れんな」心強い教師の言葉に勇気付けられる。

みんな落ちた、山本、磯野、加藤・・。いよいよ人生の分かれ道が・・磯野と加藤は東京へ、野澤は大阪だ。細江は飛騨へ帰って役場に・・既定通りの人生が待っている。亜佐美は名古屋のデパートの広報宣伝部だ、２年ぶりに会ったのに相変わらず言いたい放題だが、少しときめいた。山本はしばらく下宿と実家を行き来するとのこと。

何も決めてはいないので、いつもの土建屋へ顔を出す「机を用意するからここに就職しな」
気風のいい社長夫人が喜んでいる。「沢田君みたいに働きながら夜学でも行けば・・応援するよ」とにかく一週間通うこと

にした。小牧インターは別働隊が行っているので市内の北部の区画整理が仕事だ。近距離なので夕方には戻って来れる、そのあとの時間が使えるのは有り難い。3日目の帰りは週末で忠節橋が渋滞している。助手席で何も考えずに外を眺めていると、ぎこちない動きのランナーが歩道を走っている・・まさか？追い抜いたので、顔を・・小西さんだ、すでに4月に入っている・・やはり落ちたのか？声を掛けるのは止めよう。そして、その後も同じ時間帯に姿を見かけた。

珍しく山本が下宿にいたので、ビ-ルを飲みながら話題に・・「受かってたら走ってねえだろう」落第に決まった。「来週から一ヶ月名古屋のホテルでドアボーイのバイトに行くことにした・・」と、告げる。事情を知っているので「亜佐美と一緒か・・？まあ楽しんでくれ・・俺は5月には一度、実家に戻るつもり・・」何かバイトが決まっているような口ぶりだ。

シフトの関係で週に三日、同じ電車での通勤が始まった。お互いに気取ることが無いので気楽なもんだ、いつも連結器の中で飽きずにバカ笑いだ。

連休前に母親が法事を終えて千葉から帰って来た。「受験勉強しながら電話番でも」鉄鋼ブローカーやっている実弟から誘われたとのこと。性格的にあまり好きになれないタイプだが川崎で事業を始めたことは知っていた。

平日に休みを貰って飛騨へ・・連絡せずに役場に顔を出したので細江も驚いている。邪魔するといけないのでそこら辺をぶらつく。ここも山に囲まれた歴史のある魅力的な町だ。

5時近くに戻ってみると、何やら上司とやり合っている。しばらくすると上司が頭を下げた、相変わらず物怖じしない性格を発揮している。

「川崎へ行くよ」飲みながらいきさつを伝える。「みんないろんな処にいた方が楽しいさ」

飲みすぎて頭が痛いが朝飯を頂く。車の止まる音が・・「ゆっくりして帰りに又、役場へ寄れよ」外に出ると、何と霊柩車

が横付けだ。火葬予定の遺体を預かっていくという、仕事を選ばない姿勢はさすがだ。陳腐なプライドを持ち合わせていない。夕方近くに役場を訪ねると、顔見知りになった受付嬢が「今さっき、川の中から戻って来て着替えてます・・」？今度は・・何やってんだ・・タオルを頭に乗せて細江が出て来た。「又、入水自殺があって・遺体探しだよ・・髪の毛一本でも探す・・」周りから頼られる訳だ・・。

山本の下宿を訪ねるが、「十日ぐらい・・帰らないみたいよ」親類のオバさんが迷惑そうな顔での応対だ。怒るだろうが黙って行くことにするか。

名古屋駅からデパートへ電話を・・「川崎へ行く・・」と恐る恐る告げる。いやな間が流れる「もう帰ってくんな！・・・」電話が切れた、予想通りだ・・。怒るのも分かる、来週は亜佐美の誕生日だった。

そして2週間後に山本からハガキが届く。「まったく、お前って奴は・・帰ったら飲むぞ！絶対に連絡しろ！」教材販売の親類の仕事を手伝うために、教習所へ通い出したらしい。

6月27日・・鬱陶しい梅雨が続いている。山本からのハガキだ。免許を取ったので学校に納入するために奔走している、と書いてある。美山町の仲越集落にある小さな小学校で何と西村先生と再会したとのこと。やはり異動が叶ったのだ、話が弾み「そういえば、君らが去って間も無く、キヨさんが発狂して・・何かを叫びながら村中を・・」徘徊したそうだ。すぐに和尚が跳んで来て精神病院へ・・。あの、越波でそんな事が起きていたとは。

川崎に来て必死で動き回っていて、越波のことはすでに脳裏から消えかけていたはずだった。又、強烈な思い出が甦って来た・・。明るい笑顔のキヨさんと別れられたのが救いだったのに・・。すぐに返事を書く。「もう一度、越波へ行くぞ！」

そして数日後、昼に亜佐美から電話が・・泣いている「帰って来て・・」何だ？「由紀子が・・死んじゃった・・」出勤途中に救急車とすれ違った時、胸騒ぎが・・デパートに今、連絡が来たという。電話を切って・・思い出す。母親を中学２年の時に白血病で亡くしていて、自分の体を時折心配していた。徒手体操部に入るから、と聞かされた時は大丈夫かなと思ったが、跳び回るのが夢だったんだろう。「家事手伝いよ」あの笑顔を思い出す・・早く結婚したかったのか、それとも薄々気付いていたのか？母親の許に行くことを・・。

由紀子の葬儀には行けそうも無い、母親に電話を「・・由紀ちゃんが・・」驚いている。代わりに行ってくれるので助かった。帰ったら、焼香には行かねば・・謝ることばかりだが・・。

気持ちの整理がつかない日々が続く・・夜になると考えてしまう。時の流れに逆らうこともなく短い生涯を閉じた由紀子、辺境の地で、見えない力に捻じ曲げられてしまった運命にその身を委ねたキヨさん。二人とも身近にいたのだ。この俺は、いったい何やってんだ。

やっとその年の暮れには帰省が出来た。誰に会っても文句を言われる、山本とキヨさんの話題で語り合う「夏、一緒に行こうぜ」野澤も磯野も興味を示す。毎日、男友達と飲み歩くので・・由紀子の墓参を忘れている。亜佐美とは電話だけだ。結末は分かっている。

そして毎年、越波行きを計画するが台風や集中豪雨で国道が通れない。何回も電話で役場に確認するので川口さんと言う女性と馴染みになってしまった。「今年も崖崩れで閉鎖中よ・・そんなに・・行ってみたい所なの？」相変わらず認識がないようだ。６年も前の話を
すると「今度、役場に寄って聞かせてよ・・」若くはなさそうだが・・。

9年ぶりに越波へ

１９７６年5月　9年ぶりに越波を訪れる。お盆ではないので人の姿もまばらだ・・下の家の婆さんの姿は無い。庫裡も本堂も補強の柱で支えられていて、余りにも無残な姿だ。村を歩いてみる。今回の目的である《村人の声》を収録したかったのだ。もちろんキヨさんの消息を知るために・・。何人かの老婆に話は聞けたが「小さいころからパーだ、と言ったり賢かった、と言ったり」キヨさんがこぼした子供の頃のつらい思い出が浮かんでくる。俺たちのことも、うっすらとは覚えているようだが心もとない。１０年近く前のことだ、しかたがないだろう。

寺は、要の家の婆さんがいつも掃除に行っているとのこと。せっかくだから本堂に泊まりたいと話すと、ちょうど和尚の弟、玄秀氏が、経営している幼稚園の父兄と山菜を取りに来ていると言う。庫裡に顔をだすと奥さんがいたので事情を説明する。驚いていたが「もうすぐ山を下りて来ますから」そして二組の母親と園児と一緒に玄秀氏が表れた。

あっけにとられていたが、とにかく居間に通され夕食が始まった。酒も入って昔話に盛り上がるが、肝心のキヨさんの消息については、はぐらかされてしまう。「もし、亡くなっているのなら・・手を合わせたかったんですが・・」「ん～・・それは・・私には・・」目をつむって黙り込んでしまった。事情が飲み込めない母親たちも固まっている。

「もう・・よせ」山本が目で合図を送る。気を取り直して盃を交わし、横で騒いでいる園児の相手をする。小西さんたちが泊まった部屋で寝るように奨められたが、寝袋持参なので本堂で是非、とお願いする。と、園児たちも「僕たちも～」と言うことをきかない。しかたがないので布団を抱えて本堂へ・・。すでに、ご本尊は無い。障子は、いたる所で破れている。積んであった畳を下ろし布団を敷く。園児二人に蹴飛ばされながら朝を迎えた。山本もイサムを思い出したようだ。想像もしなかった時が流れていたことを思い知る。来ない方が良かったのか・・？何度も拒まれたのは、キヨさんからの忠告だったのかも知れない・・。

懐いてしまった園児らが泣きべそをかいて母親にしがみついている。丁寧に礼を言って車に乗り込むと、玄秀氏の顔に安堵の色が浮かんだ。

「何か、言いたくねえことがあるんだな」「戸籍が在ったかどうかも、分からんだろうし」
話に夢中で能郷のオバさんを素通りしてしまった。あれほど、帰りには、と思っていたのに。まあいいか・・。

「とにかく調べてみる・・」教員の鷲見が知人らに頼んでくれたが、周辺の施設では該当する人物は見あたら無かった。これ以上はよそ者が立ち入ることが出来そうもない領域だ・・次第に記憶が薄れて行く・・時間の経過とともに・・。

別れ、そして4度目の越波

１９８６年６月１１日、細江から電話が入った。「昨日、山本が逝ってしまった、野澤と葬儀に行って来る」何と言うこと

だ・・久しく会っていなかったが、と言うよりほとんど岐阜に帰っていないのだ。加藤に連絡を入れ水道橋の磯野の事務所に集まる「美人の奥さんと・・幸せだったのに・・３７歳だぞ・・悔しかったろうなあ・・」思い出が尽きない。そして磯野が決断する「代わりに・・俺が越波へ行く・・お前の話の信憑性を確かめる」

７月６日、山本の霊前に焼香、無念を感じ取ったつもりだ。そして由紀子の墓参りも済ませ、あわただしくとんぼ返りで川崎へ戻る。何度も乗った新幹線だが富士山がこんなに暗く寂しいとは・・。過ぎ去った思い出が甦って来る。《順番》が決められているのかも知れないが見送るのもむなしいものだ。生き残っている者の宿命か。

８月５日、役場へ電話を・・川口さんは覚えていた「工事は済んでいるから、お盆は通れます」笑っている。

８月１５日、磯野の車で川崎から突っ走って来たが、一宮でベルトが切れる・・タクシー会社に修理を依頼、磯野の実家で車を乗り換え越波へ向かう。

１０年ぶりだ、道を間違え大河原方面へ行ってしまった。狭い道で何度も切り返し。後輪が崖からはみ出して肝を潰す。トラブル続きだがキヨさんが心配しているのだろうか？

「何箇所あるんだ・・いったい・・」初めて来た磯野が青ざめる。数えただけでも１５箇所に花が供えてあるのだ。急カーブを曲がると右側にセドリックが止まっている。着いたばかりなのだろう十代のまじめそうな少年が花束を持っている。降

りてきたのは両親か？献花するには派手過ぎる。お揃いのアロハだ。「出来の悪い兄貴でも落っこったんじゃないのか」遊びに行く途中でついでに寄ったかも知れんが来ないよりましか。《おちたら死ぬ！》
崖っぷちの標識がひん曲がっていた。

やっと辿り着いた・・道は舗装されていて中学生か？３・４人がスケートボードで騒いでいる。今年のお盆は何家族が帰って来ているのだろう、ざわつきが感じられる。畑の脇に車を止めて参道へ。

？？何だ、山門が・・消えてしまっている・・そして鐘楼は・・無残にも朽ち果て草むらの中に鐘が落ちている。庫裡は・・どこへ？・・在るのは、みじめな姿の本堂だけだ。白いクラウンが境内に入って来た。少年二人と両親か？見覚えがある・・玄秀氏だ・・会釈するが気付かない。トランクから花束を出して本堂へ持って行くように指示している。近寄って話しかけるが、覚えていないようだ。無理もない、目立つ山本ではなく初対面の磯野と並んでいる。しかもお互いに１０年を経て人相も変わっている。

前回の話を持ち出すと、「おう・・あの時の・・」奥さんも思い出したようだ。弟が本堂でいっしょに寝た園児とのこと。なごんだ雰囲気になったが「キヨさんのお墓があるなら・・」と切り出すと、目をそらして「それは・・」聞かないでくれという表情に・・。磯野がズボンを突付く。「法要がありますので・・」本堂へ入ってしまった。

イサムの家に人影が・・義理の兄さんだった。イサムは帰って来て無いと言う。昼食をご馳走になり、２０年前の話をするが、すでに民話の世界のようなものだ。その場にいなければ分かる筈も無い。自分でも夢の中の話なのだ。分校へ行ってみる・・《越波漁業組合》の看板が・・野澤の言った通りだ「原始の里。越波」のコマーシャルをテレビで見た・・と。

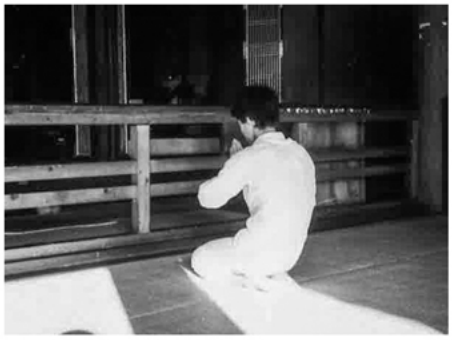
もう来ることはないだろう・・何度も聞かせた越波の物語を磯野は体験してくれたし、思い残すことは無い・・。イサムの

家の庭先から八月の太陽に熱せられたアスファルトの道路へ車を出す。出発しようとギアを入れた磯野がバックミラーに目を・・「オイ見ろ！」車を止めた。振り向くと、年配の女性と下の家の婆さんが手を振っている。背後には大男と一緒に年頃の娘が並んで微笑んでいる、あれは！・・降りて確認するが・・誰もいない・・。陽炎が高屋山の森に吸い込まれて行く・・。気が付けば、せみ時雨の中にたたずんでいた。

（了）

1967

越波、夏の夢物語



この物語は、筆者の体験をもとに
創作された物語(フィクション)です。
又、特定の地域、団体、人物を侮辱、標榜することを
目的としておりません。

「1967　越波(おっぱ)、夏の夢物語」

2016年8月 WEBサイト「e-konの道をゆく」にて公開

著者　菊地憲二
編集　近藤英治